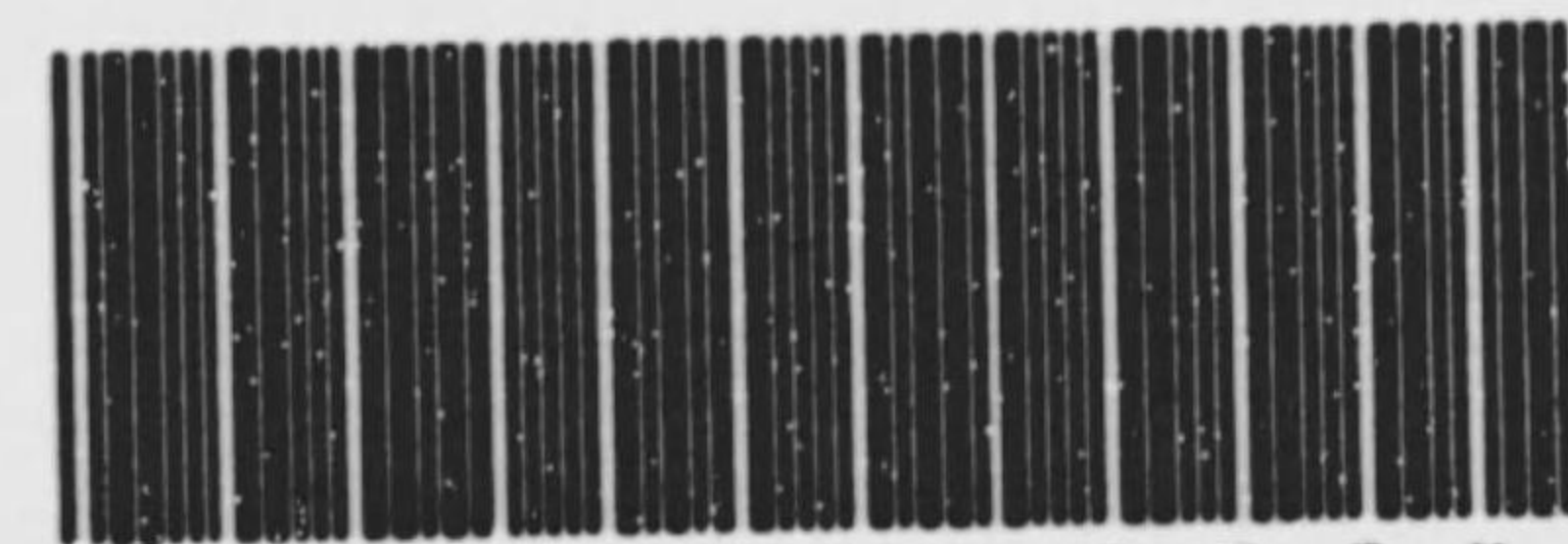


644  
71

赤露の中枢解剖  
池田弘著

1



\* 0034645000 \*

0034645-000

644-71

赤露の中枢解剖

池田弘・著

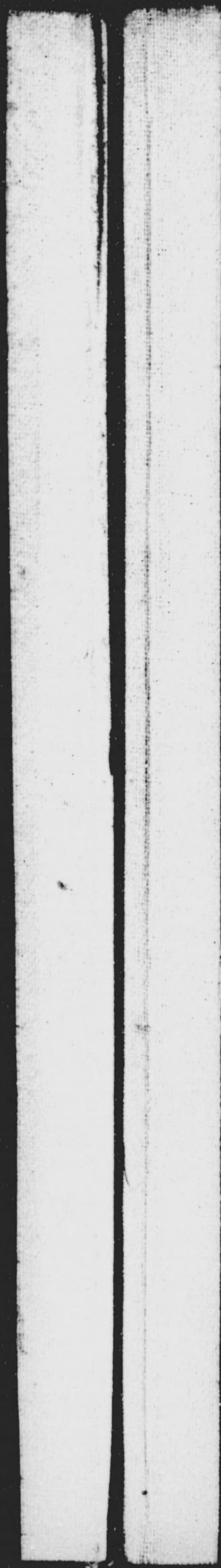
回天時報社

昭和8

AGC

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法  
第67条の規定に基づき、平成12年3月2日付  
けで文化庁長官の裁定を受け使用するものです。











644

71



著

申樞解剖



回天時報社發行



644-71

## 自序

赤嶽の中樞ロシア共産黨は、對外的には惡逆極りなき世界革命陰謀團の核心として、陰慘なる黨史を綴りつゝあると共に、對内的には陰險苛烈なる内訌争闘の醜惡史を連續せしめつゝある。然し其陰慘限り無く且つ間斷無き對内外の惡魔的争闘史は、究極する處、彼等が迷信する非人間的非人道的共産主義運動の必然的所産と云はねばならぬ。

されど此處に最も無慘と云ふべきは、共産黨獨裁政權の支配下に在るサツエート・ロシアの人民である。帝政時代の呪はれたる專政と雖も尙企及し能はざる否古今東西未だ曾て人類史上に其類例を見ざる共産黨獨裁政治の狂暴性は、ロシア全人民を悉く恐怖と窮乏のドン底に追込まねば止まぬ。今や其獨裁權力は全人民の壓迫機關として君臨しつゝあるのだ。斯くて全人民が奈落のドン底より叫ばんとする共産黨政權への死闘も、痛烈なる權力の暴壓により兎も角も抑壓されつゝありとは云へ、暗澹たる展望と悲惨なる生活苦とは彼等を驅つて種々なる様相に於ける消極的反共産主義運動を尙ほ開はしめつゝあるのである。

共産黨共者の深刻苛烈なる内訌争闘と共産黨政權對人民の陰慘なる對立争闘とは、陰然陽然愈々



激化錯綜し、將に、奸譎咒咀、陰謀彈壓、暗闘虐殺の現世地獄を現出せしめつゝある。

思ひ見よ！ 如斯悪魔の跳梁跋扈を文明世界の領域に許す事は、實に全人類文化の絶大なる恥辱なるを！

我等が、内外の共産黨を人類人道の公敵——殊にロシア共産黨を不倶戴天の仇敵——として、積極的に之が絶滅を力調する所以は此處に存する。

洋の東西を問はず今や世界全人類の最大重要問題は、共産主義及び赤露共産黨を如何に殲滅するかの一事であらねばならぬ。然し我等は日本國民として日本國家の大精神大使命を深く思ひ識る時此世界的最大重要問題の解決こそは獨り日本國民に附與されたる重責なるを確信せしめらるゝのである。

此小著は、筆者が、斯かる傾來の信仰信念に立脚して、赤露共産黨が全力を傾倒して世界に陰蔽秘覆せんとしつゝある彼等自らの非人間的非人道的罪惡を、歴史の事實に照應して露顯指摘せるものである。勿より淺學非才、江湖の期待に副ふを自負するものに非ず、唯だ同志諸賢の参考の一端に資するを得ば甚だ幸である。

昭和八年六月十五日

著

者

本稿の校正を終つて後、獄中の佐野鍋山の、共産黨が労働者階級の黨に非らざること、コミンテルンが官僚主義の權化たること及コミンテルンによつて指令される戦時に於ける自國敗北主義の否定、以上三個條の理由による「轉向」の聲明が報道された。彼等の轉向は如何に善意に解釋すると雖も單なる形式的理論に止まるものにして、我等の胸底に觸るゝ何者もないが、人生觀哲學觀上の吟味は暫く措き所謂彼等「轉向」派がロシア共産黨及コミンテルンに轉嫁したる一切の誤謬（實は其誤謬はロシア共産黨及コミンテルンよりも彼等「轉向」派自身の上こそ、より多分にあるのだが）を、歴史的事實の上に露顯指摘せるものが此小著であるのだ。佐野鍋山等の轉向と期を一にして此小著の校正を終つたことは私にとりては一種の感懐を禁じ能はざるものである。



# 赤露の中樞解剖 目次

## 第一章 サヴェエト・ロシアの全貌

- 一、世界的陰謀國としてのサヴェエト・ロシアの真相……………(一)
- 二、サヴェエト・ロシアの国内的矛盾の激化……………(四)
- 三、人民五ヶ年計畫の失敗と第二次五ヶ年計畫……………(一五)
  - (イ)工業 (ロ)運輸 (ハ)農業 (ニ)外國貿易 (ホ)赤軍
- 第二次五ヶ年計畫……………(一四)
- 四、共産主義的矛盾解決の手段としてのコミンテルンの利用……………(二五)
  - 内的事情——外的事情
- 五、コミンテルン陰謀の歴史的觀測……………(三六)
  - 戰爭勃發以前の戦術——戰爭勃發期の戦術
- 六、サヴェエト・ロシアにおける内訌争闘の基礎……………(五六)

目次



七、内訌及び反対派の性質……………(六一)

第二章 内訌渦中におけるレーニン獨裁の成立過程

一、レーニン、ブレハーノフと共にナロードニキに反旗を翻す……………(七三)

二、レーニン等競争に學生層を利用す……………(七九)

三、所謂「ロシア社会民主主義労働黨」の結成とユダヤ人の役割……………(八一)

四、黨内に於けるレーニンの勢力擴張運動……………(八五)

五、ロシア社会民主主義労働黨第二回大會とボリセヴィキとメンセヴィキの大分

裂(レーニン、ブレハーノフに背反す)……………(九〇)

(イ) 第二回大會開催さる

(ロ) 第二回大會の競争とレーニンの分裂主義發露

(1) 「ブンド」代表レーニンの陰謀に反對し席を離つて退場す

(2) レーニン遂に先聲マルトフに背反す

(3) レーニン大衆から排撃され遂に「イストラ」脱退の餘儀なきに至る

六、失業者レーニンとその内訌策動……………(一〇七)

七、千九百〇五年革命と「ボリセヴィキ」「メンセヴィキ」の醜争……………(一一〇)

(イ) 政府の労働運動取締及び対策の失敗

(ロ) 官僚主義的陰謀主義

(ハ) 愚劣な対策所謂スパイ政策

(ニ) 新興資本家層の壓迫

(ホ) 農民政策の失敗と農民の反抗運動

(ヘ) 一般國民を支配した「自國敗北主義」

(ト) 労働者の氣分

八、一月九日事件所謂「血の日曜日」……………(一二九)

九、千九百〇五年におけるボリセヴィキ及びメンセヴィキの陰謀計畫と醜争の展

開……………(一三四)

(イ) ボリセヴィキの陰謀プラン

(ロ) プルノーギン國會の開設

(ハ) 所謂「十月革命」

(ニ) 陰謀圖の敗北(十二月暴動)

十、陰謀圖の孤立化と内訌による戦線の分離……………(一三一)

(イ) メンセヴィキとボリセヴィキの合同

(ロ) レーニン又も黨規に違反して内訌を捲き起す



(一) ヌルヤ人組合「ブンド」及び社会民主黨と合同

(二) 社会民主黨の陰謀と非合法への潜入及び彼等の陣營の再分裂

十一、「ボリセヴィキ」と「メンセヴィキ」の最後の分裂……………(一三六)

(イ) フラীগ全露ボリセヴィキ會議とレーニンのクーデター

(ロ) レーニンの峻烈なる黨の統制ぶり

(一) 民主主義的中央集權主義

(二) 多難決への絶對服従

(三) 二黨組織の禁止

(四) 一切の黨規の嚴守

(五) フラック・リスト制

十二、ボリセヴィキの反戰策動と十月革命及び權力の奪取……………(一四六)

(イ) ナンメルヴァルト會議

(ロ) 二月革命事件

(ハ) 十月革命事件とボリセヴィキのクーデター及びレーニンの權力把握

十三、レーニン獨裁權力下の内訌事件(主として共產主義の現實相について)……………(一五六)

十四、労働者反對派結成とその内訌……………(一五五)

(イ) 労働者反對派のサヴェート國家批判

(ロ) 労働者反對派の活動

(ハ) 労働者反對の強制服従

十五、「民主主義的中央集權派」の擡頭と反レーニン運動……………(一七二)

(イ) 民主主義的中央集權派によるサヴェート國家現状の批判

(ロ) 反對派の要求と綱領

第三章 内訌渦中におけるスターリン獨裁の形成過程

一、スターリン時代の内訌の性質と「レーニン遺書」に現はれた分裂の豫言……………(一七六)

二、トロツキの清黨運動と意見衝突の若干……………(一七七)

(イ) 一國に於ける社会主義建設可否に関する問題

(ロ) サヴェート國家の素質問題

(ハ) 農村問題

(ニ) 對露委員會問題

(ホ) 五ヶ年計畫の暴露

三、トロツキ派の活動とスターリンのクーデター……………(一九七)

四、トロツキ以下全反對派の追放狀況……………(二〇〇)



五、ブハーリンの除名事件と内訌の擴大……………(一〇四)

(イ) ブハーリン派の主張

(ロ) ブハーリンの農民擁護

(ハ) ブハーリン除名の経緯と反幹部運動

(ニ) ブハーリンの除名後

六、デポーリンの除名事件……………(一一三)

七、サヴェート・ロシアを震撼させた「産業黨事件」……………(一二四)

(イ) 産業黨の發生

(ロ) 産業黨行動綱領

(ハ) 産業黨の活動

八、産業黨に對するサヴェート當局の處斷……………(一二一)

九、間斷なき農民暴動の勃發……………(一二六)

附 録

一、サヴェート聯邦國家とコミンテルンの政治的組織的及び歴史の同一性——其  
論證の諸根底……………(一三六)

二、共產黨運動根絶對策……………(一四五)

思想的教育的對策

社會的對策

外交的對策

檢閱的對策

對共產黨問題

合法的無產政黨及び労働組合運動への對策

其他の問題



# 赤露の中核解剖



## サヴェエート・ロシアの全貌

### 世界樹陰謀國としてのサヴェエート・ロシアの真相

ウラジミール・レーニンは、トロツキーの評言するところによれば、所謂宗派主義的「分裂主義者レーニン」に過ぎなかつた。千九百二十六年から七年にかけて激化したロシア共産黨の内訌闘争は、サヴェエート・ロシアの欺瞞を幾多暴露して、その真相を社會への贈物としてゐる。ロシア共産黨史、ロシア革命史は二つの自由な藝術的作品として改竄された。分裂主義者レーニンは、ロシア革命の所謂「天才的な指導者」として、何時の間にか世界的偉人の群に神秘化されてしまつた。今日のロシアの狀態を理解するためには、何うしてもレーニンのイズム、所謂「レーニズム」なるものと、彼の



歴史的な實踐——と言つても分裂内訌の全頁をめぐることになるが——を理解する必要がある。本書はこの意味で、ロシア革命の歴史的背景としてのレーニンの行動を千九百十七年の十一月革命以前、十八世紀末葉のロシア社会民主主義労働黨の成立事情から説明することとした。いまこゝで分裂主義者としてのレーニンを認めると、分裂主義者によつてボルセヴィキが指導され、分裂主義者によつて十一月革命が實行され、且つ分裂主義者レーニンによつて今日のサヴェート國家なるものが創設されたことになる。實際のところレーニンは内訌争闘の達人であつた。彼の分派的内訌争闘の出発點は、ロシア社会民主主義労働黨(今日のロシア共産黨の前身)の第二回大會(千九百〇三年)である。こゝで當時のロシア革命陰謀家の指導機關が分裂した。この分裂は、ロシア共産黨の其後の三十年間の内訌争闘の要因的な發足點をなした。分裂事件の直後、共産黨一派がレーニンの個人的性格についてなした批評を見ると、「ブレハーノフは反對派に咬みつけば振つて振つて振り落して弱らせる。然るにレーニンにあつてはさうではない。彼は「反對派に咬みつけばダニのやうに喰ひついて決して離すことをしない。」彼は相手が死ぬ迄離すことをしないと評されてゐる。

筆者は、彼の個人的性格を深く問題にするものではないが、レーニン主義をもつて唯一の戒律としてゐる今日の共産主義者の執拗性は、こんなところに一部分歸因してゐるのではないか。現在、

共産黨は、世界の幾多の國家に於いて非合法若くは半非合法の状態にまで排撃されてゐる。合法非合法の問題は單にこの點だけをとつて見れば所謂法律上の禁止と認容といふことになるが、禁止されても、つまり非合法に押し込められてゐても尙且つ策動を繼續してゐるといつた點に、彼等の獨特の精神がなければならぬ。これが独自の「執拗性」である。この執拗性は、所謂一つの體系的なボルセヴィキ精神と言はれてゐる。又この問題に一つの根據を與へるものは、有名なボルセヴィキの理窟辯であつて、彼等は、何か小さな問題でも大きな理窟で粉飾する性格を持つてゐる。分派的内訌争闘の武器にはこれが不可欠のものである。レーニンの勝利した一要件は、凡ての問題に所謂科學的と稱する理窟を嵌めることを忘れたかつたこと、他人を誹謗することによつて絶えず自己を合理化していつたこと、最後に、よしそれが間違つた主張であつたとしても、絶對の信頼を自己の主張に持つたことである。スターリン一派の官僚主義の犠牲となつて自殺を餘儀なくされたヨフエはトロツキーに送つた遺書によつてこの點を指摘してゐる。即ち「レーニンには、孤立の中にあつても鞏固な確信があつたが君(トロツキー)にはそれが無い。」云々と。

理論の正不正は彼等にとつては寧ろ第二義的である。「自己の主張に確信を持つて」この確信を押し通す執拗性がボルセヴィキ的精神の典型をなしてゐる。こゝから「他人の動搖を停止せしめるため



には、先づ自から動搖することを停止せよ。」なるレーニン哲學が産出される。マルクス主義には正義の基準の一片だけに見出すことが困難である。實際、力、策動、戦術の巧劣が彼等の運命を決定する。千九百〇五年の暴動で、トロツキ一の主張を罵倒したレーニンは、ロシア革命後「あの時は君が正しかった。」のだと告白してゐる。「誤謬は人間の常である。」を常に窮餘の常套的戰術用語とする彼等の節操哲學は、何といふ便利なものであらう。

このレーニン一派と、レーニン式戦法の共産黨が今日のロシアの指導者であり且つ國家の大官である。

サツエート・ロシアの對外政策に於ける陰險なる執拗性と、國家内部に於ける絶えざる矛盾内訌の発生は、實にこの點に歴史的理由が伏在してゐるのだ。

## 二、サツエート・ロシアの國內的矛盾の激化

分裂主義的宗派理論のレーニン主義の實現としてのサツエート・ロシアは、既にそのものとして一つの偏局的存在である。理論の闘争によつて眞理を見出すことより、理論を強執することによつて、事柄を誤謬を醸成させたサツエート・ロシアには、直ちにその誤謬が強大な國內的矛盾として現

はれた。先づ矛盾の第一は、新經濟政策の採用である。知悉するやうに新經濟政策は、十一月革命直後の臨時共産黨なる「無秩序下」に於ける赤色獨裁の廢止と交代して採用された原則である。提案者は、即ちレーニン自身であつた。この政策は、共産主義的國家組織の進路を失つた彼等が、制限的な私有地の所有と、同じく制限的な私的商工業資本を許容し、且つ彼等が常に資本主義の特徴と稱してゐる商品交換制度を採用したものであつた。當時、ロシアの狀態としては、この新經濟政策を實行せざる限り滅亡と交換せざるを得なかつたのだ。レーニン自身は、この政策を「一步の退却」として或は賠償なき手段として認容してゐるが、このことに關しては、更に客觀的な誤謬が共産主義そのものの中に伏在してゐたのである。即ちそれは、農業共産主義化の理論であつて、レーニンは、共産主義社會の基礎を都市労働者とその指導下に立つ貧中農の結合若くは都市労働者は貧中農と結合しその支持と援助によつて共産主義社會を實現し得るものとして宣傳した。しかるに反對派、特にトロツキ一の如きは、この主張に對して眞正面から反對してしまつてゐる。トロツキ一の主張は、或る意味で「ロシア一國のみの共産主義國家」の成立を否定するもので、都市労働者と農民は、相互にその經濟的利害が對立するため、これに對する平面的なる共産主義の實行は不可能であると主張した。彼の主張するところによれば、都市労働者は共産主義の實行を喜ぶが農民はさうでは



ない。彼等は、自由主義を希望し、しかも共産主義に對しては、不斷に闘争する性質のものであるといふ。つまり、プロレタリア獨裁制は、不斷に農民の攻撃によつて破壊されることになる。しかるに農民は、工業の原料的資源として不可欠のものである。農民と都市労働者の共産主義下に於ける結合は、結局相互に對立する要素となつて共産主義的を所謂プロレタリア獨裁は不可能となるのである。大農業國としてのロシアに於ける共産主義の實行については、早くも既にトロツキーによつて「暗澹たる展望」が投げ與へられてゐたのである。

そこで、この矛盾を解決する手段は何か。

第一は、農民の壓迫である。農民の利害と反對するに拘らず、斷乎として赤色テロルの恐怖政治を實行すること、畢竟「プロレタリア獨裁」を「農民獨裁の機關」として轉化せしめることである。

第二には、コミンテルンの機能を活潑に利用して、世界共産主義革命の陰謀を、出來得る限り急速に實行することである。

「サヴェート・ロシア」は、新經濟政策の實行を「一步の退却」として採用したが、彼等は、共産主義の汚點を特にその政治的宣傳の意味に於いて一時も早く取り去る必要に迫られた。新經濟政策廢止後五年計畫が採用された。これは「農民電化」「農村共産主義化」のスターガンの下に「前述の農

民壓迫を實現したこと、更にコミンテルンの機能を倍加させる點に關聯してゐる。しかるに、新經濟政策の「汚點」を叫び出したのは、何とトロツキー一派の反對派であつた。五年計畫の強壓を實行するためにはスターリンに準備が必要であつた。即ちスターリンは、反對派を巧妙に料理して、この獻立を五年計畫への準備としたのである。

次に、新經濟政策採用後に於ける矛盾を今少し説明して見よう。新經濟政策採用後の五年計畫への準備として、先づレーニンの左の如き敷居によつて事實が確證される。

「我々は、こゝに一年來國家權力を我々の掌中に握つた。が、さて新經濟政策體系は我々の目的に向つて進展したであらうか。我々は遺憾乍ら否と答へねばならない。然らばそれは如何に發展したか。國家なる機關は、我々が導かんとする方向には進まない。それは天から降つたか地から湧いたか、何處からとも知れず現はれたのである。一つの機械の進路は、常に必ずしもその常軌を辿るものではない。それは、往々にして操縦者の考へてゐること、全く別な路を行く。」

これは、レーニンが最後に出席したロシア共産黨大會の演説中の一節である。彼は、この言葉を殘して間もなく永別を告げてゐる。それだけにこの言葉の意味は非常に深いものと言つて差支ない。レーニンは、新經濟政策を、所謂「一步の退却」として、謂はゞ一時的に餘儀なく採用した非常手段



であると宣傳した。一時的な非常手段なるが故に、この政策は少く共産主義の見透しのつき次第廢止されるべき筈であつた。農間の便法は、農民に讓歩し、中小資本家の活動を最低限度に許容し、かくしてこれをロシア復興に利用すべき筈であつた。レーニンは、新經濟政策實行の成果によつて、將來の共産主義實行の腹を肥さんと企てたのである。

しかるにその結果は何うか。新經濟政策の採用は、歴史の進歩ではなくして寧ろ共産主義の採用が歴史への進歩となつてゐる。レーニンの言葉の中には、寧ろ彼の失敗を判断する試金石が含まれてゐる。國家は、權力は、機械はどの方向に進んでゐるか。共産主義は大衆の利益を實現するものであるか。歴史は新經濟政策の採用を如何に判断したか。彼等が反動への復讐と呼び一時的讓歩と稱すこの政策の中に、大衆は寧ろ傳統的正義への希望を深めはしなかつたか。

新經濟政策の採用は、共産主義者の豫断にバラドキンカルな結果を提出した。サツエート・ロシア内には、この政策の採用によつて彼等の最も怖れてゐた富裕農民(クラトク)新個人資本家(ネツブマン)が擯棄して来た。彼等は最少限度の自由と赤色獨裁政治下に、やうやく汗の成果を結ぶこ

とが出来た。次ぎに共産主義分子の中に、赤色獨裁の諸獨裁主義に反對して寧ろ彼等と妥協せんとする傾向が部分的に現はれて来た。これは共産主義の滅亡ではないか。

この悲劇すべきボルセヴィキの試みに對して、ボルセヴィキ自からがその救済策を考案しなければならなかつた。國家は「往々にして操縦者の考へてゐるものと全く別な路を行く」結果について當時レーニンの提案した對策を紹介して見やう。

- 一、クラトク、ネツブマン、官僚主義者の諸勢力の増大を細心に觀察すること。
- 二、國の一般的復興と共に、これ等の諸勢力は自己の要求を擴め、我々の政策に加へる壓迫を次第に増大して、我々の組織によつて彼等は個人的利益の充足を計ることに努めるであらう點を絶えず警戒すること。

三、これ等の諸勢力の増大、或は聯合を、壓迫するために、且つ又彼等の隠れたる而も事實上存在する目的、即ち二勢力組織の實現を阻止するために苟も手段といふ手段を傾注すること。

四、事實の真相を労働者層に公然と通告して、反革命の危険を防止すること。

所謂「反革命の危機」共産主義に對立する二勢力の擡頭は共産主義への脅威となつた。彼等は強引して對策を密議した。しかるに歴史は皮肉にも彼等の對策を彼岸に押し流してしまつた。事態



は益々變化した。脚下の現實は、先づ農村に於いて働く者の財産が形成せられてきた。ボルセヴィキは、この現象を「農村に於ける階級別発生」と歎聲をもらす。同様に都市に於いても、個人資本の増大によつて富裕階級が発生した。ボルセヴィキは又「商工資本の発生」に對し歎聲を漏し狼狽せずにはおられなかつた。

共産主義のこの矛盾現象を明確づけるために筆者は、當時の資料の中から、若干の統計的なものを紹介して見よう。

先づ商業資本の増大を見ると、これは新經濟政策實施後の數年間に、サヴェート全商業の五分の一を支配するに至つた。(新經濟政策の採用は千九百二十一年からである。)又、その資本増額は、一ヶ年間に五十億ルーブルであつた。

第二に、個人資本による商業家は、サヴェート・全消費者層へ、五〇パーセント以上の物資を供給するに至つた。

第三に、登録された個人資本工業による生産年額は、四十億ルーブルを示し、家庭手工業は、百八十億ルーブルの年産額を示すに至つた。

第四に、この結果として租税、賃銀、價格、信用の問題に變調を示してきた。結果は共産主義の

豫想を裏切つて、反つて資本主義的秩序への復歸を示してきた。農村に於ける諸租税は、普通逆の標準に賦課されるやうになつた。即ち、貧農に強く富農に弱くといつた現象である。例へば當時階級差別の甚だしいと言はれた地方(ウクライナ、コーカサス、シベリヤを除く諸地方)に於ける一例を取つて見ると、——トロッキの暴露した統計による——最小土地所有者の三十四パーセントは總所得の十八パーセントに止まつて、これは、富裕な土地所有者の七・五パーセントに割當るといふに過ぎなかつた。然るにこの兩者の支拂ふ租税額は殆んど同額に近かつた。これによつて、當時赤色獨裁政府の採用した富裕階級彈壓政策が、有名無實たるより外に仕方のなかつたことが明白となる。

第五に、共産主義は労働階級の利害を擁護する主義であると宣傳してきたボルセヴィキの對労働者政策をとつて見よう。彼等は、如何に労働者の利害を擁護したか。先づ、千九百二十五年から、二十六年へかけての労働者に對する課稅率は、前年度の二倍となつた。しかるに一方に於いては、非労働者としての都市住民に對する課稅は、前年度に比して六パーセントの減少を示したのである。特にウオツカに對する高率課稅によつて、サヴェート政府は、年々貧農層から一九パーセントと、労働者層から二十六パーセントの税金を搾取してきた。



第六に、新経済政策の實施は、それが全體としての共產主義的政策下に於ける部分的讓歩であるといふ點で、都市労働者と農民との對立を激化してきた。富裕階級壓迫の政策をもつては尙更ら然りである。政策上に於けるポリセヴィキの部分的讓歩の中に於いてさへも、農民はその壓迫の繩を断ち切ることが出来なかつた。先づ農産物と工業生産物の價格の差額が著しいものとなつた。この半ば不可避免的な差額の出現は、今日各國に於ける農村問題の基點をなしてゐるが、サヴェート、ロシアに於いては、この問題を解決する代りに、富裕者發生撲滅のスローガンで、却つてこの困難を深めたのである。農民は、その産物に對して平均戦前價格の一・二五倍を受取ることに對して少く共二・二倍を支拂つた。農民は、この著しい收支差額の中で不當の労働を支拂しない限り生活の手段が與へられないことが明白である。特に注意すべきは、これ等農民からの支拂過剩は、實際の上では主として下層貧農の負擔となつてゐた。千九百二十六年年度の数字を見ると、その額は十億ルーブルに達してゐたのである。貧農救済は、共產主義の不斷の主張の手段として、新経済政策實施下に於いても保證されるべきものではなかつたか。

以上の現象は、明らかに新経済政策の實施が「操縦者」の豫想に反して發展していつたこと、彼等の事態を解決する無力量を暴露したものである。富裕階級の壓迫を云はうが、さうした結果は、彼れを壓迫することによつて貧農及び都市労働者を救ふことが出来ない。又、反對に、貧農と都市労働者を壓迫することによつて、富裕階級を發展せしめることは尙更ら出来ないことである。さて、ポリセヴィキは何處へ行つたらよいのか。レーニンは告白してゐる。

「ロシアが依然たる小農國である以上、ロシアに於いては共產主義に對するよりも寧ろ資本主義に對してより堅固なる基礎を與へる。次のことを考へよ。我々は資本主義を根絶し得なかつた。」

實際、プロレタリア獨裁は、プロレタリアを獨裁する獨裁である。プロレタリア獨裁は、やはりプロレタリアを搾取する獨裁である。労働者の状態は今日と雖も、部分的な地域を除いては殆んど改善されてゐない。サヴェート政府の官製統計は、五ヶ年計畫による労働者生活状態の改善と實質賃銀の増加、農村社會主義化の成功を宣傳してゐるが、實際の数字は寧ろこれに反してゐる。サヴェートの宣傳的技術は既に定評されてゐる通りであるが、その確證は、千九百二十七年以前、つまり五ヶ年計畫實施以前に見ることが出来る。サヴェート官製統計によつて發表された千九百二十七年年度の實質賃銀は前年に比して三〇パーセントの増加を示してゐるが、反對派テーゼによれば反つて減少して、千九百二十五年年度のそれと軌を一にしてゐる。コミンテルンの宣傳に至つては論議の外とも言ふべきで、例へば同年の失業率数は漸次減少して殆んど統計の上では見ることが出来な



つた。しかるに反対派のテーゼによれば、失業者は五十萬を遙かに超過してゐたのである。新經濟政策の實施は、それそのものとして共產主義に對する背反であつた。明らかに共產主義の矛盾であつた。しかるにこの矛盾は更に矛盾を再生産していつた。矛盾の生起はポリセツイキをして混沌たる「呪の輪」の中に投入せしめていつた。「暗澹たる展望」は彼等の進路に絶望の屏風を立てしめた。

これは共產主義の矛盾を表明するものである。

又これは共產主義に對する歴史的現實性の峻烈なる審判を意味するものである。ポリセツイキは、唯だ單に彼等の失敗を告白する以外に、その本質的な歴史的矛盾に氣附かなかつたのであるか。それ共、氣附きつゝも尙且つそれを改革し得なかつたのであるか。

然し、ポリセツイキは矛盾のために共產主義權力を放棄するやうな事はしないのである。即ち、労働者貧農の味方であると云ふ共產主義は、例へ労働者貧農までそれによつて苦しめられても、共產主義を放棄することをしない。それは二十年のレーニンの勞苦に對して、否より多く自己の政治的地位と權力に對して相済まぬ譯なのである。要は、この權力を是認して、ロシアを益々共產主義化してゆくことであると。或る種の條件の下に於いては、獨裁のツインゴクが實現の途程に於いて

つことがある。反対派を撲滅して然る後、富裕階級を撲滅し、貧農を壓迫し、都市労働者の腕に強制の鞭をつけて「機械ロシア」を、「機械民衆」を作り上げねばならぬ。即ち五ヶ年計畫が實施された。トロツキー、ジノウイエフ等の反対派が千九百二十七年、即ち五ヶ年計畫實施直前に追放された事實は意味深長である。

共產主義の歴史的矛盾を解決する手段として選ばれたのが、コミンテルンの對外赤化政策と同様にこの所謂五ヶ年計畫なのである。

スターリン獨裁は、彼がこうした事業の指導的派閥としての過程に於いて形成されていつた。

### 三、人民五ヶ年計畫の失敗と第二次五ヶ年計畫

サヴェート政府當局、サヴェート共產黨大會、コミンテルン執行委員會及び大會の五ヶ年計畫の成果に對する報告は、言論調査の批判的自由の與へられてゐない現在のロシアに於いて、果してどの程度の信用を與へてよいのか。五ヶ年計畫の成果を觀察するに當り、適當な材料のない限り、ここでは、當局の官製的數字による以外に仕方がない。

所謂人民五ヶ年計畫は、スターリン一派が千九百二十七年に、反対派の批判的大綱を壓殺して計



畫を樹てたもので、千九百二十八年に始まり知悉するやうに「五ヶ年計畫を四ヶ年に」のスコロガンで一九三二年十二月末に一應結末をつけたものである。

前述したやうに新經濟政策實施期間にトロツキーの反對派が盛頭した。反對派は新經濟政策下にあるロシアの現状を批判し、且つ五ヶ年計畫に對する反對派案大綱をも作成した。しかるにスターリンは反對派にサツエートの指導權を譲渡することに極力反對して、彼等の批判的成績のみを失敬して、反對派の全部を、五ヶ年計畫實行の直前(千九百二十七年)國外追放に處したのである。五ヶ年計畫は共產主義制度下に於けるサツエート・ロシアの根本的矛盾解決の一手段として着手されたことは、前述した通りで、それは新經濟政策に對立した政策であつた。こゝに、農民への攻撃としてスターリン的政策に反對したブハーリン一派の反對派が生じたことは、決して不思議なことではない。

さて、新經濟政策の反共產主義化に批判の鋒を向けたトロツキーが、當時レーニンの次の言葉をもち廻して五ヶ年計畫に先鞭をつけたことは面白い。レーニンは、歴史的必然が共產主義者に與へた權利に、機械サツエート・ロシアを對立させた。

「社會主義の勝利とその存続を確保するたためは、搾取者の抵抗を徹底的に壓迫し、彼等を絶

全に——信頼せしめるまで——降伏し、全産業の基礎を、大規模の集合生産及最新式的全經濟電氣化の技術の基礎の上に組織しなければならぬ。都會なるものが、保守的非分科的な農村に一つの強力な技術的社會的援助に提供し、かくして農業及び小農的労働の生産力を猛烈に増大すべき物的基礎を與へ、小地主をして實際の力及び自己の利益によつて、大規模の集合的機械的耕作に移行させるためには、こうした方法による外はないのである。」

これがロシア救済の考察書である。この中には、五ヶ年計畫の精神が殆んど含まれてゐるので、そのまゝ引用して見た。レーニンが「搾取者」として稱してゐるのはクラーク及びネップマンのことである。彼は所謂この搾取者なるものを壓迫はするが、しかし共產主義者へ信頼をつなぐやうに降伏するのだと言つてゐる。又機械ロシアの建設が「小地主をして大規模の集合的機械的耕作に移行せしめる」方法であると主張してゐる。スターリンは、所謂ブハーリン等反對派の除名が示したやうに、富裕階級小農階級を「信頼せしめるやうに」降伏することは出来なかつたが、壓迫することは出来た。又五ヶ年計畫の大綱を作成し、突撃隊を組織し、不休労働週間の實行によつて労働者への鞭を持つことは出来た。

さて五ヶ年計畫の實績を見よう。



五ヶ年計畫は都市農村の矛盾解決のために農村の電化、工業に於ける最新機械及び技術の適用、生産額の増加、生産原價の引下げ、國民所得の増加等を豫想するものであると宣傳された。先づ工業方面を見ると

(4)工業

サヴェート當局は五ヶ年計畫の成果を先づ工業的方向に於いて、生産超過額は、

- 石炭 七・五〇〇萬噸が九・〇五〇萬噸に……………二割増
- 石油 二・二七〇萬噸が二・八〇〇萬噸に……………二割八分増
- 銅 八四・七〇〇噸が一〇・〇〇〇噸に……………一割九分増
- 電氣工業……………七・八分
- 機械製作工業……………四割二分
- トラクター製作高……………四割七分

しかるに生産原價の引下げは、生産額の増加に對して正比例してゐない。千九百二十九年―三十年に於いては、豫定の七分四厘に對して、六分四厘に過ぎず、三十一年に於いては、七分四厘引下げの筈なのが、反つて二分の増加を示してゐる。大設備、大量生産への發展は、生産費の漸進的

低下を齎らすのが普通であるが、サヴェートに於いてはこの現象が逆となつてゐる。

この最大の理由は官僚主義の跋扈であつて、個人私財の法的制限をうけてゐるサヴェートに於いて當然のことである。

しかし五ヶ年計畫が、特に工業的部門に於いて、帝政時代に於ける設備や生産額を追い越してゐる事實は否めない。これは、生産資源の豊富なロシアに於いて、これに時代的進歩が加へられることによつて當然なことである。

(ロ)運輸

運輸問題について、特に鐵道運輸は、その施設開發及び新旅客車貨車の生産に於いて豫定の數字に達してゐる。五ヶ年計畫は、大體未開ロシアの近代機械化を彼等が急いだ結果、機械化の量的方面の發展を示したゞけで質的方面に於ける進歩は、甚だ不成功に終つてゐる。鐵道運輸もこの範圍を出でないもので、不良機關車の破損、事故の頻發、又これに對する修理作業の不成績が伴つてゐる。特に従業員層に現はれてゐる官僚主義は、労働能率の一般的低下、不經濟労働を生み出してゐるのみではなく、民衆の大なる反感の對象となつてゐる點も強調しなければならぬ。

水運事業に於いては、帝政時代の水路を單に部分的に改築使用してゐるだけで何等見るべきもの



がない。

たゞ、航空路の擴大に於いて若干認め可き點がある。航空路の擴大は、農産物の運搬に於いては、特にそれが新經濟政策の廢止による農民への強制的社會主義化——謂はゞ一つの農民への攻撃である點に於いて特殊な困難を内包してゐた。農村社會主義化は、サヴェート當局の宣布するところによれば、都市と農村との對立的矛盾を解決するために國民分配の均等の試みの一つとして行つたもので、それは農業機械化農産物生産の増加を當面の目標としてゐた。

五ヶ年計畫は、農業問題の領域に於いて、特にそれが新經濟政策の廢止による農民への強制的社會主義化——謂はゞ一つの農民への攻撃である點に於いて特殊な困難を内包してゐた。農村社會主義化は、サヴェート當局の宣布するところによれば、都市と農村との對立的矛盾を解決するために國民分配の均等の試みの一つとして行つたもので、それは農業機械化農産物生産の増加を當面の目標としてゐた。

先づ農村の社會主義化に對しては、コルホーズ(集團農場)とサフホーズ(國營集團農場)を組織し、これに農村の全大衆を糾合して、農業大經營による生産額増加を企圖したものである。五ヶ年計畫の最終日まで、集團農場への貧中農民の收容数は、當局の言明によれば六〇パーセント以上であると稱してゐる。

しかし集團農業への農民收容過程に於いて、農民による反抗の過程と新たな農村の分化を生み出したことは言ふまでもない。農民の反抗と對立は今日激化してゐる。

耕作地は、千九百三十一年の一億三千七百五十萬ヘクタールから、三二年の一億五千五百五十萬ヘクタールに増加してゐる。

農村の機械化は、千九百三十年度に於ける七萬三千五百臺の増加に見ることが出来る。五ヶ年計畫以前のトラクター皆無の状態から見れば、即ち増加である。

しかるに生産額の増加は、設備に正比例して必ずしも開拓者に與へられない。又その分配の内容に於いてもさうである。農民はどうしても先づ、尨大なる設備と機械の購入に要する負擔を日々の労働から支出してゆかねばならぬ。集團農場から、飢餓の叫びが起つた。農民は、部分的にストライキ怠業を斷行した。

當局は、食料不足の問題を解決するために、千九百三十年には、これ迄禁止的狀態にあつた家畜の無断屠殺を法令によつて許容した。しかるに農民は、幼畜をも屠殺せざるを得ない状態の下にあつた。政府は同年十一月、これを防止する目的で「幼畜屠殺令」「種畜屠殺令」を發するに至つた。そこで、農民には何が残されたか。

竊盜である。その後集團農場に於ける穀物竊盜事件が、しかも集團農場の成功につままれてゐる農民の手によつて頻々と行はれるやうになつた。



社会主義化は、農民を遂に竊盗化した。

最近の報道によれば、サヴェート當局は銃を操して大衆的穀物竊盜に備へてゐるといふ。

(二) 外國貿易

この領域に於ける不成績といふよりも寧ろ企畫せる處と反對の結果の招來については特筆するに値するものがある。即ち貿易上に現はれたる國際的差額は、一國の經濟的内容の表現となるからである。

五ヶ年計畫は、輸出を増加して輸入を減少することによつて、國民所得の増加を齎らす點に重大な目的の一つがあつた。當時當局の宣傳するところによれば、五ヶ年間に總額八億ルーブルの輸出を増加する筈であつた。しかるに五ヶ年計畫の貿易指數は、次の如き不成功に終つてゐる。

一九二八年、四千二百二十九萬三千ルーブル(出超)

一九二九年、六千六百四十七萬〇千ルーブル(入超)

一九三二年第四半期、五千五百二十八萬五千ルーブル(入超)

であつて、出超は僅かに五ヶ年計畫の第一年度に見られただけに過ぎなかつた。その後の結果は、入超の漸進的な増加を示してゐる。千九百三十一年度のごときは、僅かに四分の二期に於いて五十萬ル

ーブル以上の入超となつてゐる。千九百三十年頃から、ヨーロッパ市場に「サヴェートのダンピング」の問題が傳へられた。彼等は農産物の投資によつて窮餘の一策を採つたのであるが、かの猛烈な投資政策にも拘らず、貿易差額は依然として入超を増加するばかりであつた。

(本) 赤 軍

五ヶ年計畫の重要な目的が又軍備擴張にあつたことは言ふまでもない。筆者はいま手許にある資料をそのまま借用して簡単にその概表を記載して置く。

赤軍々備擴張比較表

	一九二七年度	一九三二年度五月	増
歩兵師團數	六九	七五	六
瓦斯 隊	不明	瓦斯隊 三一	
機械化兵團	不明	同 大隊 三	
飛行 機 數	七〇〇	一、八〇〇	二倍半
戰 車 數	一〇〇	一、〇〇〇	十倍
陸海軍省費	七六、〇〇〇	一二八、〇〇〇	二倍弱

大體五ヶ年計畫の全貌は右に概括した通りである。機械は、共產主義の矛盾を解決し得ない。機械は又新たなる共產主義の矛盾を生産して来る。五ヶ年計畫によつて、巨額の資本を投じたドネプ



ルス河の電気大ダムのごときが作つたまゝで立ち枯しになつてゐる事情は、決して一片の例外をなすものではない。

## 第二次五ヶ年計畫

第二次五ヶ年計畫は、その政治的經濟的目的に於いて、第一次五ヶ年計畫のそれと同様である。本年一月から二月にかけて開催されたロシア共産黨第十七回大會でモロトフは、國家計畫委員會の作成になる五ヶ年計畫大綱を報告してゐる。

この報告によると第二次五ヶ年計畫は、

- (一) サヴェート・ロシアに於ける富裕階級の最後の清算
- (二) 階級的差別を形成する根據の徹底的清算、人間による人間の搾取の廢止
- (三) 國民の意識深く潜在してゐる資本主義經濟意識の撲滅
- (四) 階級なき社會の積極的建設
- (五) 都會と農村との對立の除去
- (六) 筋肉労働と知識労働との對立の除去

(七) 労働者農民の物質的狀態の改善

(八) レーニの方針の徹底

(九) 新技術の採用による國民經濟の再組織と産業全體の技術的改善

(十) 農業の漸進的電化

(十一) 機械製作工場の新設擴大

等々であつて以上は第一次五ヶ年計畫遂行當初の目的であつた。以上はそれ故に、五ヶ年計畫の失敗點を彼等自身が指摘したものと云へる。失敗を補足するのが第二次五ヶ年計畫である。又この失敗を補足するのが第三次、次ぎには第五次と盡きるところを知らない。

しかし、第二次五ヶ年計畫の目的の他面に於ける眞實の所在はいま一つある。即ちモロトフが、第十七回黨大會で新計畫の重大な目的を「プロレタリア國家の強化と其權力の強化」に主眼點を置いたことである。彼等は第二次五ヶ年計畫の遂行によつて、「存在そのものが世界の脅威となる」世界制度に根本的に對立する「陰謀國サヴェート・ロシアの擴大強化を目的してゐるのである。コミンテルンの思想的實踐的侵略の強化——これ又再言の要はない。



## 四、共産主義的矛盾解決の手段としてのコミンテルンの利用

コミンテルンは共産主義的権力の救済及び破壊の大機關として組織された。

コミンテルン(第三インターナショナル)は、今日國家としてのサヴェイト・ロシアとは組織的には別個の存在となつてゐる。共産主義者の主張するところによれば「コミンテルンは各國共産黨が自主的に組織してゐるところの國際本部であつて、その指導部員は各國共産黨の成員比例によつて民主的に選舉されるものである。」と。成程これは一つの事實に相違ない。「民主的選舉」といふ文字を除けば以上の主張は事實なのである。しかるにコミンテルンはこの事實以上の存在である。つまりサヴェイト・ロシアとの關係に於いてさうなのである。ロシア共産黨といふ一つの巨大なる世界的陰謀團を核心として考へて見ると、前者と後者の事務的政策的區別は、内務省と外務省式の區別以外のものではない。兩省は、ロシア共産黨の兩翼として、つまり一方に平和的に、他方は攻撃的陰謀的に相互にその任務を補足し合つてゐる。コミンテルンの創立には秘密がある。それは當初からロシアに於いて、即ちロシア的なるものとして創立された。

コミンテルンとサヴェイト・ロシアとは別個のものであるが、そこに果して政治的な實際的な區別

があるか。若し、區別があるとすれば、それは如何なる範圍で又論者が如何なる立場に立つときその區別を云々し得るのであるか。

この問題は、今日對ロシア問題への鍵である。この點を明らかにすることは國家顛覆の陰謀團の責任の所在を明らかにすることである。

筆者は問題の重要性を考慮して、この點に關する論證を「サヴェイト・ロシアとコミンテルンの組織的政治的同一性」と題して、本書の末尾に附録として載録して置いた。たゞこゝでは、コミンテルン創立に關する事情の若干を説明して、主としてコミンテルン罪惡史の説明に問題を規定して置く。

先づ千九百十九年三月のコミンテルン創立の事情を、革命後に於けるロシアの狀勢にとつて見よう。いまそれを假りに内的問題と外的問題との二つに區別して見る。

## 内的事情

千九百十七年三月に帝政ロシアに自由主義的内容を持つた革命が生じた。ケレンスキーがその主領となつて臨時政府を組織したが、この政府は長期の歐洲大戰の及ぼした兵士の倦怠を解決することが出来なかつた。ロシアの極端な専制政治の政策下に生じた軍隊の潜在的混亂を、徒らに舊弊の



階級と無定見とをもつて對置させたに過ぎなかつた。問題を解決するためには何等かの新規なる政策とそれを斷行するための徹底的決断が必要であつた。凡ての政策に對する不徹底と動搖がケレンスキー政府の根幹を流れてゐた。

これを利用したのがレーニン一派のポリセヰイキである。

三月革命は先づ最大の缺陷を、ポリセヰイキの徹底的清掃を斷行する代りにポリセヰイキを許容し、却つて彼等に陰謀の自由を與へたことに持つてゐた。

ポリセヰイキは所謂「労働者農民兵士のサヴェート」なる政權、謂はゞ一種の許すべからざる二重政權をベトログラードに組織したのである。政府の指導に服従せず、又何等それに關係を持たない權力を組織することは國家權力に於ける矛盾した二重政權である。ケレンスキー政府は、この陰謀的赤色政權の撲滅に努力する代りに、却つてそれを許容し寧ろ彼等に左右されてゐたのである。こゝにレーニンが聲を大にして暗躍する條件が與へられたのである。先づ彼等は國內にあつて労働者を煽動し、農民を利用して、彼等の赤色政權下にこれを吸集していつた。彼等は政府の凡ゆる命令に、ストライキを怠業を、軍用品の生産及び輸送拒否をもつて返却したのである。戦線にあつては、彼等はケレンスキー政府を攻撃し、戦争の休止或は即時講和の幻想をまき撒らして兵士の意識

を混亂した。混亂は益々混亂を生む。凡ての大衆は事態を正しく判断する冷靜さを失つてゐた。

この新たなる混亂状態は、ポリセヰイキの横行調歩を一段と激化させた。

彼等は群衆の動搖を利用して「戦争を内亂へ」の過激なスローガンを掲揚するに至つた。彼等は、軍隊を煽動することによつて最後の政權獲得の野望を遂行した。千九百十七年十一月七日、彼等は自から「民衆の味方」と名のり、民衆の動搖渦中を煽動して所謂武力的脅喝によつて政權を掠奪した。しかるに、彼等の政權は間もなく敗北的危機に遭遇したのである。

第一は内訌の頻發であり、第二は彼等自身が生み出した生産機關の破壊であり、第三には、諸外國からの食料品輸送の杜絶であり、第四には、未曾有の大衆的飢餓であり、第五には、赤色陰謀鎮壓の外國からの干渉であつた。

ポリセヰイキの政權掠奪に對する義憤は、間もなく國民の意識的層から、又、彼等革命的陰謀家そのものゝ中からも——その反對の動機は、一種の分派的抗争心であるが——生じてきた。軍隊は分裂し反ポリセヰイキはこの指導下に參集した。所謂「掠奪者の掠奪闘争」が發展してきたのである。

十一月革命の翌年二月には、早くもカレーチン將軍がドン地方に於いて擧兵した。カレーチン將



軍は、ボリセヴィキの計略によつて痛手を蒙り遂に自殺を餘儀なくされた。

四月十六日には、勇取なる行動主義の無政府主義者がベトログラードに蜂起してボリセヴィキ権力を直接脅威した。

同じく四月には、コルフ軍がベトログラードに向つて進軍してきた。同月十八日に南方に於いて猛烈なる激戦が演じられた。

六月一日には、既に組織されてゐた「祖國自由擁護聯盟」の闘争分子が、ボリセヴィキの魔手に斃れてゐる。

七月六日には、掠奪者討伐をスローガンとして白衛軍がヤロスラフに組織された。

同八日には、社會革命黨員が兇悪なるボリセヴィキ撲滅をスローガンとして蜂起した。

八月五日には、社會革命黨員——といつてもこの政黨は當時祖國主義の上に立つてゐた——の手によつて、赤色政權撲滅の北方政府が組織された。

三十日には、ボリセヴィキのベトログラード非常時委員会委員長ウリツキーが同地に於いて社會革命黨員に暗殺された。尚レーニンの暗殺も企てられた。

九月二十日には、バクーのボリセヴィキ「バクー委員」二十六名が社會革命黨の手によつて誅伐された。

十一月には、コルチャツク將軍の擧兵があつて、彼の指導下に多くの祖國主義者が參集した。捕力の餓饉ボリセヴィキ討伐が始められた。同月十八日には、同軍はオムスクにおける共產黨の支配を顛覆して同地方の統治権を獲得することが出来た。

さて、千九百十九年は何うであらう。分裂内訌は激化した。内亂は次から次へと生起した。同年三月のコミンテルン創立大會なるもの、後においても内亂状態は依然として繼續された。

#### 外的事情

世界各國は、戦後における極度の疲弊の中にあつて、ボリセヴィキの病毒の國際的傳播を防衛しなればならなかつた。防衛は又或る意味における攻撃である。

千九百十七年十二月三十日に、早くも日本艦隊はウラジオに入港して病毒防衛の任務についた。

千九百十八年二月十八日には、ヨーロッパ・ロシアの一部にドイツ軍が侵入した。

四月五日には、日本軍はウラジオに上陸して該地方及居留民の守備についた。

四月三日から、ドイツ軍はフィンランドのサヴエートを破壊することが出来た。

十六日には、イギリス軍がウラジオに上陸した。



五月十六日には、ボリセヴィキとチエツコ軍との最初の衝突が始まつた。

七月二日には、英國及び佛國軍隊がムルマンスクに上陸した。

八月三日には、アメリカ軍隊がアルハンゲルスクに到着した。

九月四日には、ウラジオにアメリカ軍が上陸した。

千九百十九年一月十八日には、英佛派遣軍がオデッサに上陸した。

列國は、以上の武裝的包圍に加ふるに、この陰謀家の集團に對する經濟的封鎖を斷行した。國境及び或る種の地方は列強軍隊によつて包圍された。内敵は間斷なく生起する。陰謀家同志の意見の衝突と分裂が惹起される。生産機關の停止は、未曾有の大衆的飢餓状態をつくり出したといふ状態の、酷い内憂外患ともいつたやうな時機において、レーニン一派の進路は何うであつたらうか。彼等は權力を放棄して只滅亡するより外に路はなかつた。

そこで、この難關の切抜け策として採つた彼等の政策が世界陰謀團としてのコミンテルンの創立であるのだ。この手段によつて、彼等は各出兵列強の背後を狙つた。戦後におけるヨーロッパの疲弊は彼等の策動に絶好の機會を與へた。彼等は各列強出兵國の軍隊をロシア戦線より撤退せしめる目的によつて、コミンテルン創立を案出したのである。千九百十九年から約二十四年にかけて、ヨ

ロッパはボリセヴィキの内的陰謀に悩まされた。この世界陰謀團組織の政策は彼等の野心を充足したのである。

レーニンは、そこでボリセヴィキ權力保持の條件として、次ぎの問題を提唱した。

「ボリセヴィキは、ロシア革命と共に、外國列強の世界革命がこれに伴はぬ限り、到底權力を保持し得ないであらう。」

と。彼の意見によると、ボリセヴィキは、コミンテルンを組織して世界共産主義革命を斷行しない限り、ロシアは當時の國難から脱却し得ないし、且つ今後においても到底その權力を維持し得ないであらうと言ふのである。千九百十七年十一月革命の直後、彼は「ボリセヴィキは權力を保持し得るか」の問題を提出して、しきりに世界陰謀への方向轉換を叫んでゐた。又「小農國としてのロシアは共産主義よりも寧ろ資本主義に」鞏固な發展の基礎を與へるといふ、共産主義權力と農業問題の永久的矛盾は、永久的な世界陰謀の繼續を裏書きするものである。コミンテルンによる世界共産主義革命における第一期的な終焉に近い頃、ボリセヴィキ政権の今後の保持の問題について、再び「左翼小兒病」においてレーニンは、繰返してゐる。彼によれば、世界共産主義革命を實行することなくしては、サヴェエト・ロシアは到底その内的矛盾を解決し得ないのである。トロッパキーの如き



は、この主張の極端なる一派を代表するもので、彼の「永久革命論」のときは、ロシアの農業國的特質を強調して、サヴェート権力の保持と矛盾解決の條件に、世界共産主義革命の實行を絶対不可缺の條件としてあるものである。

即ち、コミンテルンは、革命期におけるロシアの窮餘の戦術として組織せられ、且つその権力の永続的保持の目的で擴大強化されてゐる機關である。

要略すれば、コミンテルンは今日ロシアの生命である。コミンテルンなくては滅亡するロシアであるのだ。

いまや陰謀の強化、世界共産主義革命の實現が、サヴェート・ロシア當面の不可避的任務となつてゐる。

### 五、コミンテルン陰謀の歴史的觀測

コミンテルンが創立せられて以來、世界的政治狀勢の上には新たなる變化が齎らされた。先づヨーロッパの先進國の中では、從來共産黨としての定型を持つてゐなかつた共産主義グループが急激

に一個の黨として結成され、モスコイにおけるコミンテルン本部の指令下に一舉一動を律するやうになつた。ドイツのスパルタクス團はコミンテルンドイツ支部となり、フランス、イギリス、合衆國、イタリア、チエツコ等の共産主義者の集團はこれ又コミンテルンの支部としてモスクワの指令下に立つに至つた。

歐洲大戦直後の混亂を利用した暴動叛亂は、悉くコミンテルンによつて企てられ且つ遂行せられた。後述するやうに當時のコミンテルンは、この時代を所謂「疾風怒濤の時代」と規定して、國家顛覆の手段としての武装叛亂と獨裁恐怖権力の萌芽形態としての「サヴェート」樹立を指令した。

然しこの策動は單に先進諸國における歴史への叛逆が不可能であると云ふ意味で決定的に敗北した。だが、コミンテルンの創立後、各國の國家内部に陰謀的叛逆の組織網が植えつけられたことは事實である。千九百二十四年における彼等の敗北は、彼等の組織を決して根本的に清掃したことはなかつた。ヨーロッパ各國の政治的經濟的機構の回復すると同時に彼等の一步退却した陣容が見られた。そこで、彼等は、當時「共産黨のボリセヴィキ化」と「統一戦線戦術」なる二つのスローガンを掲げた。この二つの戦術は暴動準備時代の兩翼をなすもので、非合法的策動に潛入して、尙且つ活動を繼續すると云ふのがその特徴をなしてゐる。レーニンの如きは、この戦術の要點を擧げて、



(イ)民主主義的中央集権的組織と(ロ)非合法的技術に訓練された黨員によつて共產黨を組織すること、(ハ)特に非合法的な活動と假面を覆ふた合法的活動を巧みに結びつけることを主張してゐる。實際この戦術が當時における彼等の所謂ポリセヴィキ化戦術の根幹をなしてゐた。プロフィンテルンの幹部の一人ピアトニツキーは「非合法黨が合法的舞臺を利用しての活動を忘れ、非合法活動にのみ専念するやうでは黨は大衆から孤立化する。」とさへ主張してゐる。當時において各國共產黨に飛ばした指令の中で、コミンテルンの陰謀家達は、常にこの點を強調することを忘れなかつた。共產黨一味が「黨のボル化」と言つて騒ぐ戦術は以上のものである。

次の所謂「統一戦線戦術」なるものを分析して見ると、これは又陰險な手段で、彼等の政敵社會民主主義的政黨を破壊するために、彼等と或る目的のために一時的に共同闘争を行ひ、彼等の指導下にある大衆だけを共產黨側に獲得すると云ふものである。このために彼等は、社會民主主義的(改良主義的)労働組合の中に潜入してフラクション的なグループを作り、或はドイツの如く公然と赤色反對派なるものを作つてゐる。これ等の戦術は、大體労働組合の所謂ダラ幹と彼等の影響下にある大衆との結合線を切り離して、大衆だけを自らの指導下に掠奪せんとするものであるから、その手段も甚だ陰險を極めてゐる。謂はゞこの戦術は統一戦線なる名目の下に自己の赤化網を擴大せんとする手段である。當時イギリス労働黨の一派とコミンテルンが組織した「英露委員會」のときはこれの表現である。

しかるに間もなく社會民主主義系統の幹部連はこの戦術を見破ることが出来た。彼等は、共產主義者との「統一戦線」なるものを拒否した。そこでコミンテルンの戦術が一時的に停頓した譯であるが、彼等の執拗性は再び「下からの統一戦線戦術の適用」なるスローガンを掲げ出した。

この戦術は、共產主義者が工場内へ秘かに潜入して、改良主義幹部との交渉なしに、過激な策動に労働者を引き入れて彼等を赤化せんとする手段である。ストライキ、工場委員會選挙、コミンテルンの計畫する種々なる定期不定期の「カンパニー」等は、彼等の魔手を發揮する豫定の計畫であるし、又絶好の機會ともなるのである。

彼等の陰謀、彼等の究極目的とそれを實現するための時々刻々の戦術の變化と目的に關聯する陰險なる諸手段の採用は、コミンテルンによつて即ちロシアの指令下にロシア的なるものとして統一されるに至つた。

又コミンテルン創立後における植民地の状態は特筆するに價する。アジア及び南米における所謂植民地革命運動は、それが表面の上で例へば民族自決主義の様相を示してゐたとは言へ、何等かの形



で、若くは何等かの過激な點でコミンテルンの勢力が伏在してゐたのである。この民族自決主義の名で行はれた暴動運動は、當時植民地におけるコミンテルンの勢力を擴大する基礎となつた。今日一と口に植民地の革命運動と言つても、それを歴史的に見ると數多の分化過程が行はれてきたし、現在においてもその戦線は分化否熾烈な形で對立してゐるのである。

歐洲大戰後の植民地革命運動と稱するものは、本國の支配から植民地を切り離して、謂はゞ單に民族的に獨立した國家を組織することが主要なる標的であつた。當時における民族なる概念は、甚だ漠然としたものであつた。その内容は、これを思想的に分析して見ると、先づ植民地における舊支配若くは傳統的な組織形態を復活せんとする王政主義的な傾向と、近來植民地に發生してきた工業階級の利益を主眼として、この立場から新國家體制を形成せんとする一派、最後に、小部分の労働者と農民層を煽動して、植民地の共產主義化を實行せんとするコミンテルンの手先が策動してゐる。

この分化は、支那、印度、印度支那及び南米の一部分のごとく、今日ハッキリと分化してゐる地方もあるが、植民地の歴史的條件、特殊性、その發展の度合ひによつて、或る部分は寄合世帯的な混合形であり、或る部分は、分化の萌芽形態を示してゐるものもある。

しかし、こういった分化は、今日その對立抗爭の中に、共產主義一派に對する極度の反感が集中されてゐることは事實であるが、それにしても彼等は「植民地の解放」なるものは「共產主義によつてのみ」實現される云々と宣傳してゐる。今日、植民地の状態を展望すると、そこには必ず大なり小なりの共產黨の手が伸びてゐる。コミンテルンは、植民地の白紙の連鎖を、ことごとくかの「赤き魔手」によつて結びつけてゐる。

さて筆者はこゝで、コミンテルン創立後十五年に亘る世界革命の戰略戰術の史的變遷を紹介して置きたい。これは、今後のコミンテルン策動の方向を見極めるために非常に重要と思はれるからである。

#### コミンテルン陰謀戰術の歴史的變化

陰謀の第一期、(千九百十九年—千九百二十三年)

この時期は、前述したやうに歐洲大戰直後におけるヨーロッパの混亂時代で一方又サウエイト・ロシアの戦争と内訌が錯綜してゐた時期である。先進諸國の疲弊と混亂を利用して、又實際にはロシアの包圍を解除せんとする窮餘の一策から、彼等が極端な直接行動の陰謀を逞したことは、決して偶然なことではない。



所謂コミンテルン創立大會(第一回大會)は、千九百十九年三月モスコウにおいて開催されたのであるが、ロシア共産黨の陰謀家が、秘密の連絡線を利用して殆んど各國共産主義者に召集状を發したにも拘らず、その參集者は僅かに豫定の三分の一にも充たなかつた。約五十名の代議員が席上に名を連れた譯であるが、大部分はロシア共産黨側の出席者であつた。その參集者も必ずしもロシア共産黨の連中に指導されやうとして來たのではなく、寧ろロシア共産黨を指導せんとする者が多かつた。こゝでロシアの陰謀家は、何等かの方法でこの代議員を煽動して各國の内亂を速進せんとする焦慮があつたので先づ代議員の優遇を採用した。汽車は國家の名によつて一等車を提供し、國境へはサヴェートの幹部連がわざわざ出迎に出張し、ホテルは、最優の善美を盡すといつた有様であつた。それにも拘らず、この會議は何等實質的に成果を納めることが不可能であつた。ロシアの陰謀家は、この會議へ列席した代議員を口説き落して少く共彼等の歸國數ヶ月後には、何等かの形で暴動を實行せしめんと目論んだのであるが結果は寧ろ逆であつた。この種の代議員は、大會なるものに列席し、喋るだけの事は勝手に喋り、請けるだけの優遇は充分に請けて早々歸國してしまつた。創立大會なるものゝ結果について、ブハーリン等は、「それでも」と冒頭して——「兎に角、ロシアに共産黨の國際本部をつくり、各國共産主義者をモスコウに集める習慣だけはつけた。」と。成程彼

の漠然とした表現通り、この言葉が今日各國共産黨を縛する有名な「コミンテルンの鐵則」の母體をなしたものである。

第一回大會の決議なるものを見ると

- (一) 共産主義インタナショナル(コミンテルン)方針に関する決議。
- (二) ブルジョア民主主義及プロレタリア獨裁に関する決議。
- (三) 社會主義諸分派に對する態度についての決議。
- (四) 國際狀勢に関する決議。
- (五) 創立大會決議。

の五項目である。この決議は、それでもコミンテルンの方針を——概略ではあるが——規定し、特にプロレタリア獨裁の問題を討議して、ロシア的ボリセヴィキ的方针を強要してゐる。又社會主義分派に對する態度なる問題を決議してゐる。この内容は、今日のごときものではなくて僅かに共産主義の他宗派に對する排他主義を見せた程度のものである。兎に角ロシアの陰謀家は方針だけは作成したが參集した代議員連を實際に説得することには失敗した。

そこで彼等の戰術は、彼等自身オルガナイザー(組織部員、即ち大衆赤化の先頭隊である。)を各



國に派遣し、暴動を自から計畫し自から實行せしめた。このことによつて彼等は來るべき第二回大會を準備し、コミンテルンの勢力網を各國に擴大したのである。

所謂コミンテルン第二回大會(千九百二十年)は、當時の共產主義暴動の母體をなすべきもので、彼等はこの大會で「赤色暴動」の秘密計畫を實際上遂行したのである。コミンテルンの策動が奏功したか、第二回大會には約三十七ヶ國より二百十八名の代議員が集まつてゐる。この大會で決議されたと稱する左の事項は、コミンテルンの大陰謀を端的に表現した代表的なものである。

- (一)コミンテルン根本任務に關するテーゼ
- (二)コミンテルン加入條件二十一ヶ條
- (三)プロレタリア革命における共產黨の役割に關するテーゼ
- (四)労働組合運動及び工場委員會に關するテーゼ
- (五)議會主義に對する共產黨の態度に關するテーゼ
- (六)労働者農民のサヴェート創設の前提に關するテーゼ
- (七)農民問題に關するテーゼ
- (八)民族問題及び植民地問題に關するテーゼ

(九)コミンテルン最初の規約採決

以上である。この決議の各項に亘つて説明することは、本書の目的ではないから、こゝでは、この決議の作成された根本精神と、諸決議を通じて貫いてゐる彼等の意圖を説明するだけに止めたい。當時の狀勢を彼等は「疾風怒濤の時代」(Sturm- und Drangzeit)と呼んでゐる。野心に燃えた投機師の視頭には、當事の世界狀勢の傾向が「資本主義制度の最後の没落と共產主義革命の時機」として映じたのである。資本主義經濟制度は、歐洲大戰と共に滅亡して、幾百萬の所謂プロレタリアが暴動革命を實行し、これによつて従來の國家制度が没落して、新なる共產主義社會が樹立される——と、彼等はかく幻想を描いたのである。そこで、彼等は革命の惹起を豫想して、以上の決議のことに、「プロレタリア革命における共產黨の役割」までも作製して、革命における指導權を彼等の手によつて掠奪せんとしたのである。所謂共產主義者の新政權としての「サヴェート」なる問題が決議の上に現はれたのもこれに連關してゐる。

共產主義革命は實行されなかつたが、事實當時は狂亂の暴動期であつた。ヨーロッパにおける二つの王朝はこの時期に斷滅せられてゐる。コミンテルンの陰謀は、この一般的社會の動搖期を利用して、あらゆる積極的戰術を展開し、武装暴動を惹起し、ヨーロッパを一大混亂の修羅場と化して、この中で彼等の目的は巧みに暴動大衆の指導權を握つて、一舉共產主義革命を實行して赤色恐怖獨



裁政權を樹立するにあつた。この陰謀は綿密に計畫せられ、所謂科學的に討決作製され且つ準備されたのである。しかるにコミンテルンの陰謀は成功したであらうか。

投機師の陰謀は失敗した。

赤風による歐洲席捲の試みは、先づブルガリヤ、ドイツ、ポーランドにおけるコミンテルン最大の走狗の敗北によつて破壊された。千九百二十三年の六月に、無秩序のブルガリアでは、スタムプリスキー政府と、ツァンコフの白衛兵との間に公然たる戦争が行はれてゐた。ブルガリア共産黨は、この兩者の抗争の間に立つて、寧ろ傍觀的な無意の態度をとつてゐた。——事實彼等には戰闘力がなかつたのである。しかるにツァンコフ政府が樹立されて、全國民による共産黨撲滅のクーデターが開始された。

共産黨一派にはかに狼狽して「それ武装だ」「それッ、クーデターに對して闘へ」などと叫びながら武装叛亂を惹起した。この害悪なる叛亂によつて當時のブルガリア政府は多大の犠牲を拂つてゐる。ブルガリアの走狗が敗北しての直後、コミンテルン第三回執行委員會(同年七月)が言つてゐる言葉は面白い。即ち、ブルガリア共産黨は、兩者の抗争の中に積極的に参加してその指導權を握

らんとするよりも、寧ろ傍觀して自己の潔白さを保とうとした云々と。潔白は笑止に値するが、彼等が自己の敗北と敗北の原因を検討して、來るべき行動への指針として利用してゐる點は注目に値するものである。

第二にドイツにおいては、當時イギリスとフランスの占領が行はれてゐて、加ふるに社會民主黨を含む聯立政府は無意無策の状態にあつた。ドイツにおけるコミンテルンの走狗はこの状態下にあつて秘かに自己を太らせつゝあつた。コミンテルンの投機師連は、唯だ一つの成功をドイツに繋いでゐた。彼等はドイツの手先に指令して「ルール占領」に對して、大衆を動員し武装せよ云々を怒號し、又千九百二十三年十月一日に、プレヌーム(執行委員會)の名において彼等は次のとき要綱を指令した。

「共産主義革命を斷乎實行するために社會民主黨員との聯立政府をつくれ」

ドイツ共産黨一味は、以上の指揮に従つて各所に武装蜂起し、陰險なる策術を盡して政權奪取に狂奔した。しかるに彼等の奸策は、これまた社會民主黨員ブランドラーの奇計によつて、血を見ずして武装解除されたのである。武器を失つた共産黨は、相次ぐ共産黨撲滅の運動によつて鎮壓された。コミンテルンの投機師連は、この敗北に偉大なる嘆息辭を投げたのである。即ち



「ドイツ共産黨の敗北によつて資本主義の動搖は終りを告げた。」と。

ポーランドにおいても、彼等の敗北は、その暴動鎮壓の過程に伴つて極めて必然に行はれた。コミンテルンの走狗、ヨーロッパの各共産黨は、戦後の疲弊を利用して一路攻撃的戦術を開始し、約五ヶ年に亘つて暴動の害悪を流布した。彼等は、労働者貧農層を煽動して國家の經濟機關を破壊し若くは停止せしめ、大衆に武装を供給して叛亂を起し、所謂「サヴェート政府樹立」のスローガンを掲げて横行跋扈した。この間にあつて、コミンテルンの指令焦慮怒號にも拘らず遂に彼等の暴動は鎮壓された。彼等は、ヨーロッパの領域から清掃された。

この部分的殘兵を糾合して執拗なるコミンテルンは何處へ行く。所謂戦術轉換の根據がこゝに見出される。

戦術轉換への端緒は、千九百二十二年十一月のコミンテルン第四回大會で、それを定式化したのが千九百二十四年六月の同じく第五回大會である。この戦術の轉換は千九百二十三年から二十八年のコミンテルン第六回大會に至る迄の約五ヶ年間に亘るもので、その要點を示すと

(一)来るべき陰謀蜂起のために一時的に退却して、戦線を整備し且つ充實して當面の目標として大衆赤化に専念すること、即ち武装暴動を斷念して、次の時機まで準備陣を敷くといふのが彼

等の一般的戦術であつた。

(二)しかし、この時期における彼等の轉換を最う一つの點で特殊な部分を指摘する必要がある。それは、彼等の一般的退却戦術の中、攻撃が行はれたと云ふことで、彼等の攻撃が、ヨーロッパの敗北から、即ちアジアの積極的赤化に轉じたことである。彼等は凡ゆる間隙と狀勢を利用する。彼等はヨーロッパにおける敗北によつて除外された「攻撃的戦術」を、地理的に、つまり極東支那に移行させた。ヨーロッパの例をとれば、この時期は退却期であり、コミンテルンの一般的原則からしても、この時期は所謂退却期である。しかるに支那にあつては、この時期はコミンテルンの「攻撃的時期」であつた。彼等にあつては、こんなことは少しも例外とはならぬので、寧ろヨーロッパにおける犠牲を支那赤化によつて充當せんとしたまでである。一言するが、コミンテルンの官製歴史は、支那赤化の腹黒き一策を隠蔽せんがために、その攻撃的性質を例外としてさへ認めてゐない。

まゝコミンテルン「退却期」の戦術を定形づけた第五回大會なるものゝ決議を見ることにしよう。

### (一)國際狀勢の再檢討

### (二)共産黨ポリセヴィキ化の問題



- (三)中央ヨーロッパ及びバルカンにおける民族問題に関する決議  
(四)トロツキー反幹部運動に関する對策

この決議に示されてゐるやうに、彼等のヨーロッパ赤化政策には實質的な變化が認められる。彼等の國際狀勢の再検討の内容は、所謂退却期の客觀的狀勢の共產主義的認識である。彼等の認識によれば、前言したやうに資本主義の動搖期はドイツ共產黨の敗北をもつて終りを告げたので、これを轉機として所謂「資本主義の安定期」なるものが開始したと言ふのである。共產主義者は、資本主義の安定期は——といふのである——資本主義の強化が速進せられるので、過激な暴動主義を放棄しなければならぬ、のみならず共產黨は國民層の鎮壓の手に追跡せられる。こゝで共產黨の戰術は、この狀勢下に自己を保持しつゝその組織網を擴大しなければならぬと言ふのである。

彼等の戰術の巧妙な點は、狀勢に應じて伸縮自在の容體を示すにある。コミンテルンの赤化戰術の一般的退却期にあつて、極東支那においては新たなる局面が展開されてゐた。國民黨と共產黨とのプロツクの形成は、彼等の勢力を急激に擴大していつた。千九百二十三年六月、支那におけるコミンテルンの走狗は、秘かに第三回大會を開催して黨則及び彼等の陰謀を端的に表現する九ヶ條綱領を作成した。コミンテルンは彼等に指令して全國鐵路總會及び紡績

工業労働者の組織を遂行せしめた。千九百二十五年の五卅事件、同じく沙基事件等には彼等の陰謀が明白に表現された。

しかしコミンテルンが支那赤化の攻撃を積極的に展開したのは、千九百二十六年七月の所謂北伐の開始當時からである。國民黨は、支那共產黨が黨中にあつて黨を作り秘かに彼等が自己の勢力を擴大しつゝあつた事實を寧ろ許容してゐた。北伐は、コミンテルンの赤化に對する公然の舞臺を與へ彼等に暗躍の自由を與へるに至つた。北伐の期間中に、支那におけるコミンテルンの勢力、即ち赤化網はその領域とメンバーにおいて十倍加した。三十萬に満たぬ總工會は二百數十萬となり、二十萬に満たぬ農民組合は約五百萬の人員を赤化組織するに至つた。彼等の攻撃暴動は熾烈化した。特に農村における暴動はその惡逆無道の點で言語に絶してゐた。支那における傳統的な農村社會は、彼等の掠奪、放火、殺害によつて蹂躪された。彼等は農民を武装せしめて北伐よりも寧ろ掠奪に利用した。

蔣介石による共產黨へのクーデターは、國民黨内にあつて支那革命の指導權の奪取を企て、ゝゝゝたコミンテルンの策略を排除することが出来た。武漢政府は、共產黨と國民黨左派のプロツクとして間もなく結成されたが、これは又間もなく分裂潰滅するに至つた。共產黨は武漢政府の鎮壓から農



村に逃れていつた。彼等は、既に敗北の一般的状態下にあつて、半ば自暴自棄的なバルチザン暴動を展開した。

丁度千九百二十七年の十二月、コミンテルンの退却期がヨーロッパにおいて終りを告げると交代して、支那には共産黨による最後の攻撃（廣東暴動）が終りを告げた。

支那攻撃における彼等の戦略は、支那民族革命運動の指導権を彼等が奪取せんとする點にあつた。植民地における共産主義革命、この問題は單に問題とすることさへも共産主義における一つの不可思議ではないか。共産主義の革命理論は、マルクスの「經濟學批判序説」に書いてある通り、資本主義の發展と、所謂生産力と生産關係との矛盾を前提としてゐる。しかるに先進ヨーロッパ諸國の資本主義の高度に發展してゐる國家においては革命が失敗に終り、何等資本主義的社會關係の無かつた、若くは僅かに部分的な萌芽形態にある支那において、彼等は共産主義の暴威を發揮した。理論を離れた侵略主義がコミンテルンの眞の姿である。

支那革命のヘゲモニーと共産主義革命への支那における物質的前提を彼等は何に求めんとしたのであるか。

トロツキーは言ふ、支那における不平等條約治外法權が、この撤廢運動を目指して大衆を反帝國

主義運動に動員し、独自の政策を遂行することによつて共産黨は、その指導権を獲得出來ると。

又スターリン派の意見によれば、支那には新工業が發達し、且つ從來の家族主義的農村經濟が崩壊しつつあるから、労働者と貧農層が出來てゐる。この階層を動員して内部的に舊農村關係を顛覆し、一方に反帝國主義運動を展開することによつて、支那革命は達成せられると。

トロツキー派は、不平等條約治外法權等の問題に重點を置き、他方は、舊農村關係の破壊に重點を置いたのである。支那革命の陰謀には後者の意見、即ち幹部派の意見が採用されたのである。

しかしこの理論は、マルクスの革命論における「革命の前提條件」としての「高度に發展した資本主義」なるものが除外されてゐる。否實際において支那にそれを求めることは不可能である。彼等の理論はその政治的目的に寧ろ附加して構成される。理論もやはり宣傳である。陰謀實現への焦慮は、マルクス主義者がマルクスを追へ越して暴動によつてそれが置き代へられる事である。

### 第三期

コミンテルン陰謀史の第三期は、千九百二十八年から今日の期間として見る事が出来る。同年七月より開催された「コミンテルン第六回世界大會」なるものは、從來の戰術を轉換して、再び攻撃的戰術を採つた。この大會では有名な「コミンテルン綱領」が決定された以外に



## (一) 現下の世界状況の再認識

## (二) 植民地問題及び民族問題に関するテーゼ

## (三) 共産黨及び労働組合内における共産黨フラクションの戦術上の新方針

等々の問題が彼等によつて決定された。この大會を稱してコミンテルン赤化政策の轉機と見るのは、先づ彼等の客觀的状況の新認識による攻撃的赤化政策が採用されたこと、且つ實踐においてそれを示してきたからである。所謂客觀的状況なるものゝコミンテルンの認識によると、資本主義はその部分的安定が破壊されて、最終の没落期に這入つたと云ふのである。彼等の定義によれば、これが所謂「没落資本主義第三期」で、「資本主義の内部的矛盾が解決すべからざる時機に到達した」と宣傳してゐる。第一期は、資本主義の動搖期で、第二期は、資本主義の部分的安定期、第三期は、所謂資本主義の没落期であるといふ、そしてその次ぎは共産主義社會と、彼等の幻映は恐ろしく都合がよい。

共産主義の色眼鏡を通じて觀た客觀的状況認識の誤謬は兎に角として、この状況から發明された彼等の戰略を見ると、所謂戦争反對運動がその中心となつてゐる。彼等は事實、第六回大會以後來るべき數年間に、巨大なる世界戦争が勃發すると見たのである。彼等は、所謂第三期の別名を「戦争と革命の時機」と稱した程で、世界戦争の勃發によつて必然に——彼等は必然にと宣傳する——共産主義革命が勃發すると説明した。そこで「戦争を内亂へ」といふのが彼等のスローガンとなつた。第六回大會は、この爲に特に戦争内亂戦術の秘策を、各國共産黨一味に指示してゐる。内亂戦術は、又自國敗北主義とも稱せられるもので、その内容の要點を列記すると次のやうになる。

## 戦争勃發以前の戦術

- (一) 帝國主義戦争反對のスローガンで極力戦争反對運動を行ふこと
- (二) 軍需品工業・運輸・金屬・化學礦業・食料・電氣等の諸重要産業部門に共産黨の細胞を組織し赤色労働組合の基礎をそこに置くこと
- (三) これ等の産業部門の労働者を赤化して如何なる場合でも共産黨の指令一下に動くやうに訓練すること
- (四) 凡ゆる機會を利用してストライキを起し大衆的革命行動の準備を調べて置くこと
- (五) 失業者を組織赤化すること
- (六) 農村青年を組織赤化し特に反戦意識を注入すること
- (七) 軍隊内には主として下級兵卒を狙つて特殊な組織を作り次第に赤化反戦意識を注入すること



(八) 反戦意論の注入方法は、いさなり戦争反対を宣傳せず、彼等の反抗運動を煽動し、この機会を利用して無意識的に反戦意論を植え付けること

戦争勃発後の戦術

(一) 戦争勃発に際しては、當該交戦國內の共産黨は戦争反対のスローガンを直ちに放棄し、「戦争を内亂へ」のスローガンを公然と掲げること

(二) 戦線兵士の煽動を執断に行ひ、兵士サボタージュ、敵國兵士との交戦を逃避し、凡ゆるデマを飛ばして指揮官に反抗するやうな状態を作り出すこと

(三) 以上の兵士赤化に或る程度成功を認め、た場合は國家において工場労働者の煽動を行ひ、軍需品の生産機運を梗塞せしめ、ストライキを決行せしめること

(四) ストライキは全地區から全地方へ全地方から全国的に擴大する必要があるから、共産黨は全精力を傾注してストライキの擴大による全国的ゼネ・ストを決行せしめること

(五) ストライキは又大衆を動員して、デモンストレーションと結合せしめる。これによつてストライキーデモンストレーション、デモンストレーション、ストライキを交互に實行し、國家をして收拾し得ざる混亂状態に陥れれる。

(六) 混亂状態の成功度合ひを狙つて労働者を武装せしめ、政府及び公共機關銀行等を占領し、一舉ブ

ロレタリア獨裁政府を組織する

以上が彼等の自國敗北主義戦術の内容である。計畫の用意周到さには恐怖すべきものがある。

戦争度對を中心目標とした第六回大會以後における彼等の攻撃は、その實踐に對置せしめると問題は甚だ幻想的となる。

彼等は、共産黨の活動と正比例してそれらに對置する他の勢力が必然的に發展すること、即ち共産黨掃掃を主要任務とする民族主義的國民運動がそれらに對立して發展することを忘れてゐる。

千九百二十八年以後の數年と豫斷した「戦争と革命の時機」は、彼等の幻想からさへも立ち消えた。この時代は僅かに一連のストライキ策動が彼等の攻撃として現はれたゞけである。其後の數年は、彼等の赤化攻撃への焦慮の中に、老なる反共産主義的國民運動が世界的動向の濤に登場した。しかし彼等の策動は、ヒトラー獨裁下にあるドイツにおいてさへ消滅してゐない。ドイツは、共産黨の跋扈に最大の歴史的基礎を興へ過ぎた。しかし支那における共匪の横行跋扈を除いても、各國における共産黨一味の策動は、既に見えざる領域において續續してゐる。國家の動搖期、或はその部分的微弱化は、彼等の魔手に好機の油を注ぐこととなる。凡ゆる間隙を狙つて秘かに爪牙を研



ぎ澄してゐるのがコミンテルンの眞實の姿である。昨年末葉のコミンテルン第十二回大會の席上で、彼等は號令してゐる。

「今や、戦争と革命への直接的移行の時機は始まつた。」と。彼等は、今や必死となつて立ち上つてゐるのである。

### 六、サヴェート・ロシアにおける内訌争闘の基礎

兇暴極まるコミンテルンの世界陰謀と對比して、サヴェート・ロシアの内訌はその眞實の姿となつてゐる。サヴェート・ロシア當局は、共產主義社會の理想を説くとも、その現實を説くことをしない。現實の暴露は、世界共產主義者への恐慌となるからである。

内訌醜争の具體的叙述に入る前に、赤露内訌の社會的國家的基礎を擧げることとする。

(一) 共產主義の將來に対する愚惑——この問題は普通の場合、共產黨幹部の腦裏に忘れられてゐることとくに見えるが、一段論争が發展すると急激にしかも明らかに現はれる。論争の性質、分派争闘の深淺によつて、この本質的問題が個々の論争の下に隠蔽せられることがある。しかし醜争の激化は、獨裁權力維持可否の一點に結末を置くこととなる。コミンテルン赤化政策の決

定的失敗の如きは、彼等の視點をこゝに集中させざるを得ない。支那赤化の失敗は、この問題をめくつて未曾有の對立に導いた。反對派は、自己の政策を主張し、自己の見解を現幹部派に對立せしめて、「政權を吾々に渡せ」と叫ぶ。殊に前述したやうに農村社會主義化の失敗、五ヶ年計畫の不成績等は、サヴェート・ロシア一國のみの赤色獨裁權力の維持を「暗澹たる展望」に結びつけてゐる。トロツキーの永久革命論は、この最も代表的な表現である。

(二) 共產主義者の傳統的宗派主義——セクテイイズム、宗派主義は共產黨の歴史的傳統となつてゐる。この精神はレーニンによつて發明されたもので、今日では、コミンテルンが各國共產黨をこの精神で教育してゐる。これはボリセヴィズムの主要なる内的要素の一つで、共產主義、しかも自派の主張に離反するやうな分子に對しては、極度の排外主義をもつて望むのである。共產黨は、革命運動の指導的最前衛でしかも非合法半非合法の状態に追ひ込められてゐる結果、所謂規律遵守のための意識の統一を第一の要件としてゐる。謂はゞ宗派主義は、共產黨の自己保有の策略として發生したものである。しかるにこの策略が、反つて共產黨の内訌の基礎となつてゐるのである。政治運動にあつて一派の意見が絶対に正當たり得ることは、決して普通の原則ではない。反對派は常に生産される。しかるに現幹部派は、反對派の意見を採用するより



も、寧ろ彈壓するの政策を採る。彼等の意見を採用することは、自己の誤謬を承認することであり、讓歩であり、且つ又權力的地位に反對派の席を與へる意味での讓歩である。反對派には辨別、デマ、敵のスパイの名稱が與へられる。反對派はそれを不當な彈壓として抗議するのであるが、それは「黨紀違反」の名によつて多くは潰滅される。反對派の意見は、反對派の彈壓後現幹部派によつて、こつそりと竊盜される。スターリンの採つてゐる戦術は常にさうであつて、五ヶ年計畫に對するトロツキーの反對意見は、トロツキー追放後に始めて採用された。喜劇はまたトロツキー彈壓の先導に立つたブハーリンが、それと同時に除名されたといふことにある。

(三)官僚主義——官僚主義は、赤黨のとき条件の下では、支配的地位にある現幹部派が、自己の理論的白痴、自己の無能無策を隠蔽する手段として利用されてゐる。去る一月の黨大會においても、モロトフは官僚主義の跋扈を認めてゐる。サツエイトにおける官僚主義は、幹部派と非幹部派間に、共產黨員と非共產黨員間に、國家官吏と國民全體間に、工場役員と労働者の間に、即ちその階級のあるところ、必ずそこには官僚主義の原則が確立されてゐる。この一年以來赤黨當局は、新經濟政策の代償として國營商業制度を設け、その數二千數百に及んでゐるが、傳統の官僚主義は、顧客の應對の上に、商品取扱の上に極端に現はれて民衆の反感を高めてゐる。

官僚主義が赤黨全土に蔓延してゐる。

(四)無能黨員の跋扈——無能黨員の吸集はスターリンの政策から來てゐる。この代表的入格はモロトフで、彼はスターリンの個人秘書兼親密なるお氣遣取り役である。黨を統一するため、政策を動搖なく徹底せしめるためと稱して、有能なる分子よりも、無能にしてしかも統制のきく黨員が重視される。派閥を擴大するためには、派閥の主張を實行するために人間機關としての幾多のロボットが必要である。試みにロシア共產黨指導部の社會的構成を見よ！赤黨當局は、共產黨は國民の最大多数の労働者農民の黨であると稱してゐる。この根據から彼等は獨裁を合理化してゐる。しかるに事實は——。全地方地區の黨指導部員は、二割九分だけが農民出身で、二割四分四厘は、所謂インテリゲンチヤと稱するものである。而してこれ等の諸委員會の委員は、その八割一分一厘が官衙の使用人で充たされてゐる。そこで工場労働者は、中央及び大地區委員會に二割三分二厘、小地區委員會には僅かに九分八厘で、その數は一割にも充たぬ。この状態からして、サツエイト・ロシアの權力は誰が果して把握してゐるかの問題が常に提起される。しかるにスターリンは、プロレタリア獨裁權力は、小數のブルジョア階級に對する、



國民最大多数の労働者農民の政府であると主張してゐる。こゝに大衆の中から現幹部派に對する反感の基礎が常に與へられる。所謂サヴェート權力の「事實における無産者排斥」の皮肉な言葉が常に叫ばれるのはこの點である。

(五)所謂民主主義的中央集權制の廢止——現幹部派は、民主主義的中央集權主義(デモクラチック、センツリズム)を流行の官僚主義をもつて置き代へてゐる。共產黨の宗派主義、幹部絶對專制主義は、レーニンなどによると、この民主主義的中央集權主義によつて補はれると言つてゐる。これは、黨の指導的幹部は、投票によつて全黨員の代表として下から選出される。そこで選出された幹部は、絶對的な支配權を握るといふ理論であつて、成る程理窟だけを見ると正當さがあるのである。しかるに事實は、この制度が實際に行はれたことは恐らくたゞの一回もない。選挙の代りに幹部の實際における個人指名的任命制が採用されてゐる。「サヴェート・ロシアの現状」を暴露したトロツキーの言葉によると「最近數年間ポリセヴィキの傳統を汚し、數多の黨大會の直接決議を無視しつゝ、黨内部のデモクラシーの組織的破壊行動が行はれた。實際の役員選挙は、今や事實上瀕死の状態となつてゐる。ポリセヴィキの組織上の原則は、一歩々々邪道に入つてゆく。幹部の支配權を擴張し、平黨員の權利を縮少するために、黨規は計

畫的に變更される。諸種地區委員會の選挙期間は、中央委員會によつて一年、二年更に長く延期される。諸高級委員會の首領等は、三年から四年、若くはそれ以上の任期が與へられ、事實上罷免することは不可能となつた。」

實際赤黨の幹部席は、彼等が反對派としてスターリンに背反しない限り永久的な特權となつてゐる。「大會會合は前もつて凡ての問題を全黨が討議する事なしに召集される。かゝる議論を要求すると黨紀を紊すものとして取扱はれる」又「野心満々たる正銘のサヴェート役人の堂に入つた連中のゐる官廳にあつては、現象は一段と醜惡化する。彼等は公式の場合には革命への忠實さを發揮するが、而も彼等は自己の仕事に對しては、全然無關心なことがお好きであり、あらゆる根を市民的環境に下して生活する。彼等は蔭へ回つては黨の指導者を惡罵し、黨の會合となると反對的攻撃をお勧めする。指導的黨員、特に幹部委員の權利は、幾百人の黨員の權利よりも事實遙かに大きく、かくのごとき自己の役人機械化を扶けるものはスターリンの無産階級の獨裁は、ひとり黨の獨裁のみによつて行ひ得べく、又行はざるべからずの一理論で、これは、各ポリセヴィストにとつて不可侵のレーニン主義原則を否認するものである。」と。眞相は以上の引用で明かとなる。欺瞞に充ちたサヴェート支配網の策略は、常に反對派發生の



基礎を與へてゐる。

(六)個人主義的權勢慾——この個人主義的な權勢慾は、現下の幹部派が多くはインテリゲンチヤ出身である點から基礎づけられてゐる。共產主義的インテリゲンチヤは、彼が政權にありつた場合、それを固執する以外に道はない。支配的地位は彼等の目的そのものであるし、又政權を離れることそれ自身は、彼等の個人的自滅以外の何物でもない。そこで政權固執のためにはあらゆる陰謀が策謀される。彼等の正否を審判するものは、僅かに死せる、而かも神化されたレーニンの言葉であるが、言葉は常に部分的に、誤謬合理化の手段として利用される。理論で事態を合せること、これが政權保持の外皮となる。彼等が政權を固執すればする程反對派との抗争は激化する。

### 七、内訌及び反對派の性質

内訌反對派發生の根據は、前述したやうに赤色獨裁政權維持の疑惑が中心問題となつて、其他の有力な諸因がこれを速進助成してゐる。官僚主義は特に他の反對派發生の根據と一連の結合を示してゐる。官僚主義から生れる所謂民主主義的中央集權主義の廢止、黨員の大衆的追出し事件、言論

の抑壓、官僚主義は黨紀維持の名目の下に行はれてゐるが、それはそれを通じてスターリン的派閥の獨裁を實現せしめてゐる。内訌の發生は、それ自身一つのサヴェート政權の動搖を示してゐる。動搖は暴力によつてしばしば鎮壓されてゐる。内訌反對派の發生的根據は、一つの歴史的現實性として確固たる存在を示してゐる。現幹部によつて與へられてゐる鞭打つこととサヴェート大衆への労働の拍車は、時としてこの問題を歴史の表面から隠蔽することがある。しかし口火が與へられれば不満の烽火は爆發する。労働者反對派は、レーニンの官僚主義的政策を楔機として發展した。トロツキーとの對立抗争は、サヴェート・ロシアにおける歴史的な幹部間の對立を表面化したものであるが、それはスターリンの政策、殊に支那問題に對する赤化方針の相異から激化した。ブハーリン、ルイコフ等の所謂右翼反對派は、單にその誤謬を國際形勢の理論的分析の上に犯したことに過ぎなかつたが、それはスターリンによつて、同僚の黨幹部を権力から追逐する手段として役立つたのである。

反對派の形態性質及びその闘争目標も、これを歴史的に見ると非常な相違を示してゐる。千八百年代の末葉から、ロシア革命前後に亘る内訌は、主としてレーニン派(ボリセヴィキ)の政策に對する兩者の派閥主義をめぐつての争闘であつた。ボリセヴィキ對メンシェヴィキとの競争は、



ロシア革命の指導権を中核とする争闘であつた。彼等は、共産主義者同志の繩張りから、何等かの手段で大衆を自れの傘下に糾合し、自派の手に政權を獲得せんとする謂はゞ「將來の高位」をめぐる争闘であつた。レーニンは、この争闘における所謂勝者である。内訌は結果においてレーニンの獨裁的野心を實現せしめたのである。

レーニンの死後、所謂スターリン時代の内訌は、これとは又別な性質を示してゐる。ポリセヴィキは獨裁権力なる一種の権力を既に獲得してゐたのである。今度は、内訌は既に獲得された政治的権力をめぐつて行はれた。政治的經濟的地位の、功勞に對する分配の不均衡から均衡への回復が争闘の目標となつた。反對派が「スターリンの政策ではロシアは自滅する吾々に政權を渡せ」と主張する裏面には、政權運用者に對する交代が要求されてゐる。

又他面においては、スターリンは決して黨内においてレーニン程の信頼を得てゐない。トロツキーよりも下僚であり、ルイコフ、ブハーリン、ジイツイエフ等とは、單に同僚以上に出ずるものではない。スターリンにとつては、政治的手腕の優れた同僚の存在は、それそのものが一つの脅威となる。そこでスターリンの目的は、新黨員間に自己の勢力を擴大し、彼等を自己の政治的傘下に採用し、支配的地位を利用して官僚主義の武装を行ふこと、舊黨員を排斥し、先輩を陥れ、同僚を次

第に放逐して自己の派閥をもつてその支配的地位を強化することにあつた。トロツキー一派を陥れることに成功した彼は間もなくブハーリン、ルイコフを失墜せしめることに成功した。官僚主義、所謂スターリン的派閥の形成は、千九百二十九年において一段落を告げた。黨内の内訌は脅喝によつて一時形を潜めるに至つた。

しかるに矛盾は解決されない、ロシアの政治的社會的矛盾は、無能な黨員を連ねて人間統制におけるスターリン的機械化を斷行して見たところで、増加しこそすれ消滅することをしない。千九百三十年には、新たな形での内訌が生れた。所謂「産業黨事件」である。サヴェート當局は、この事件をフランス參謀本部の計畫として宣傳してゐる。成る程産業黨はスターリンによる獨裁権力の打倒を外國からのサヴェート攻撃に楔機を認めてゐたことは事實である。しかし調査は當局の宣傳と矛盾して、産業黨がサヴェート經濟の矛盾から、特に産業層の利益擁護を目的として結成されたことを物語つてゐる。又農民層の暴動は、スターリン獨裁の死刑法に對置されて、頻々として展開してゐる。最近のウクライナ獨立事件は、農村の強制的な社會主義化から離脱せんとする農民層の努力であつた。

内訌の形は、千九百二十九年以後新らしい形態をとるやうになつた。それは黨内の直接的な内訌



として表現されず、寧ろ苦しみつゝある階層の直接的反抗として現はれるやうになつた。しかし、これを分析して見ればその社会的根柢は同一のものである。以前には、社会的矛盾が共産黨幹部間の反対派的抗争の中におしかくされてゐた。しかるに反対派清掃後には、この矛盾を叫ぶところのトロツキイが存在しなくなつたのである。代辯人なき民衆は、先づ自から立ち上つて不満を吐出しなければならなくなつた。彼等は、自身直接にスターリン権力に内迫した譯である。この社会的矛盾が、共産黨幹部間の競争として表現される場合は、幹部の個人的政權慾がつけ加へられる。しかるに争闘は直接的となり露骨となつた。反対派清掃以後の内訌の新しい形態は、こうであつた。次に、スターリン時代における内訌のイデオロギイ的特質を一言する必要がある。内訌を解決するためには、自己の政治的手腕と策謀の卓考以外に、何等かの審判の基準が必要とされる。レーニン時代においては、マルタスを上手に解釋する者が勝利への手段を持つた。スターリン時代には、レーニンを上手に解釋することがこれ又勝利への手段を持つことゝ信じられた。レーニンの神化が流行し出した。幹部派も反幹部派も自から新時代におけるレーニンたらんとした。『レーニン曰く』、『レーニン曰く』これが兩者の理論争闘における砲彈となつた。例へばトロツキイとスターリンとの競争にかゝり、レーニン解釋利用の點を見ると兩者の力は何れとも判断することは出来ぬ。し

かしてトロツキイには、その古い埃においてレーニンに對立した傷があつた。スターリンには、政治的權力とゲト・ペト・ウトを操る有利な條件が與へられてゐた。

イデオロギイの見地から、反対派清掃後の直接的な民衆の反抗を見ると、そこにはレーニンの神化は行はれない。ロシアは今やスターリン時代である。革命直後トロツキイ、ジイツイエフの數多の著書は國定教科書として採用されてゐたが、それは理論が関連つてゐた爲ではなくトロツキイが野心の實現を關連へた爲今日では廢棄された。今日、レーニンに代つてスターリンの神化が行はれてゐる。通俗的で有名になつたスターリンの著書『レーニン主義の根本問題』は、今やサヴェエトの哲學者と稱するものが必死となつて價値づけんとしてゐる。スターリンの獨裁は、スターリンの通俗的で分り易い理論の獨裁となつてゐる。

この時代における反対派は、レーニンによつてスターリンを征伐するよりも、行動によつてスターリンを征伐せんとしてゐる。スターリンの理論に反抗することは、今日レーニンに反抗するよりも罪惡なのだ。マルタス主義の科學的無神論は、しかし神ならぬスターリンを今日神化してゐる。最後に反対派内訌の性質を見る上に、重要な一語を注意する必要がある。即ち内訌競争の人的移動の問題で、昨日の反対は、必ずしも今日の反対派ではあり得ない。又同様に昨日の幹部派は決し



て今日の幹部派ではあり得ない。幹部派は、個人的妥協の戦術によつて反対派の分裂を畫する。幹部派は又、幹部内部における對立的勢力の除去を策する。内訌は、しばしば彼等の理論的無定見を暴露してゐる。派閥争鬭の軍門に降れば、昨日の敵は今日の同志となる。又同様にその逆の原理を展開されてゐる。

ロシア革命後千九百二十三年、トロツキイは「方向轉換」の問題で新政策を提案したが、これが楔となつて追放最後まで彼は反対派の極印をおされてゐた。彼が反対派たる以前、ロシア共産黨の意見を代表する「ブラウグ」によつて描かれたトロツキイを紹介する。

「千九百〇五年におけるベトログラードにおける労働者サヴェート議長トロツキイ——數十年革命のために盡粹してゐる一革命家——この者がドイツ政府が金を出して援助する陰謀と關係があると稱する英國大使館に到着した電報を、ほんの一分間でも信じられやうか？ これは明らかに一革命家に對する途方もない鐵面皮な中傷である。」

これは千九百十七年四月十六日發行のブラウグ紙上に掲載されたものである。さてトロツキイが反対派として現幹部派に對立した場合、彼等はいかにトロツキイを評したか。當時の幹部派の一人ジノウイエフをして語らして見やう。

「若しレーニンが古典的プロレタリア革命家典型とすれば、トロツキイは古典的インテリゲンチヤ革命家の型である。このインテリゲンチヤ革命家は得意な一面を持つてゐて、或る時は（運動が發展しつゝあるとき）労働大衆と結合する才能を有してゐる。しかしその政治行動の眞髓はインテリゲンチヤの革命性である。」

これは、ジノウイエフが「ボリセヴィズムかトロツキイズムか」の著書で評したものである。インテリゲンチヤと呼ぶことは、共產主義者間では最大の侮辱を意味するものである。トロツキイはこゝでは「インテリゲンチヤの革命性」となつてゐる。又當時の幹部派の一人カナトチコフは黨十四回大會の直前トロツキイを評して次のごとく言つてゐる。

「トロツキイが労働階級と希望を代表するマルクスの理論で武装したプロレタリア大衆の政治的首領であるとは、今迄何人も眞面目に考へてゐなかつた。彼は政治問題の領域においては革命藝術の愛玩者であつた。現在においても同様彼を政治的指導者、我黨の首領であると眞面目に考へてはならぬ。」

更に續けて曰く、

「トロツキイは自己の政治手段において、明確な政治的綱領を持たず他人の説を中傷、譏諷する



ことによつて置き代へてゐる。彼は自己の政策の根本主義を、自己の有利な流言、風評、中傷、外交的辭柄を弄することをもつて足れりとしてゐる。彼は功利的な策術と中傷をもつて階級政策の根本内容に置き代へんとしてゐる。」

トロツキーは、こゝでは「革命藝術の愛玩者」功利的な策術と中傷をもつて階級政策の根本内容に置き代へんとする」中傷専門家となつてゐる。又當時のやはり幹部組のエフドキモーフは、彼を評して曰く。

「トロツキーは異見を懷抱しながら共産黨インターナショナルの一員となつた——遺憾なことである」

こゝではトロツキーごときがコミンテルンへ加入することは「遺憾なこと」とされてゐる。又當時の幹部派の有力な理論的代辯者であつたカメネフは、トロツキーに就いて次のごとく言つてゐる。

「十五年餘りメンシヴィキの著述企業の間を彷徨つてゐた政治家は、國民革命の波でポリセヴィキの波に打ち上げられて、ポリセヴィキに入黨したが、彼は秘かに眞理は自分にあるとの思想を持つてゐた。彼が入黨したのは黨に學ぶためではなく、黨を教へるためであつた。全力を擧げて黨の協同的大家業に當るためではなく、大衆の前に自己の先見的救世主たる役割を誇負するため

であつた。彼はポリセヴィズムを、トロツキー化する野心で入黨した。」

こゝではトロツキーが自惚れの高い「先見的救世主」を自負する者となつてゐる。さて、當時トロツキーを口を極めて悪罵することの出来たこの三人は何うであらう。その後僅かに四年の後、千九百二十七年には、彼等はトロツキーを正義の首領としてスターリン反對の「新反對派運動」を起したのである。又千九百二十三年前後労働者反對派なるものを指導して、トロツキーとその立場を同じうしたコロンタイが、千九百二十七年には何時の間にか現幹部派に成りすまして、反對派を次のごとく處断してゐるのは寧ろ滑稽に屬する。

「自己の分派的意思をもつて、團體の意思を打破せんとするものが罰せられずに済むといふことはあり得ない。斯く試みる者は必ず大衆からボイコットされる。」

と。コロンタイ女史よ！ 覺り顔かなである。さて最後にトロツキー一派を大陰謀家の群として國外追放を斷行することの出来たスターリンは、その前日までトロツキーに就いて何と言つたか。スターリンによれば「トロツキーはロシア革命の最大の功勞者」であつた筈である。「最も卓越せる黨指導者等の役割」において彼は曰く、

「動亂の實際的組織の仕事は、悉くペトログラード・サヴエート議長トロツキーの直接指導の下



に行はれた。兵艦が速やかにサヴェトトの手に移つたこと、革命的兵士委員会の勇敢なる活動は、主として特にトロツキの功に負ふところであると確實に断言し得る。」

トロツキをかく揚言したスターリンは、一表明すれば彼を「陰謀家」黨の分裂を策し黨を敵の手に賣り渡す者」として罵罵してゐる。何となれば、トロツキはスターリンの政治的地位を脅威したからである。實際派閥主義的獨裁を訂正せんとする行動は、獨裁官僚にとつては、「陰謀家」であり且つ「黨の分裂を策する」敵のプロツオカイトルともなる。

以上によつて、赤露内訌における幹部派對反對派の人的構成及びその性質が明かとなる。彼等の個々の移動、個々の行動、理論を單なる方便にまで下劣化する無節操が明白となる。内訌問題を全體的に観測すれば、彼等はサヴェト・ロシアにおける社會的經濟的矛盾の表現である。彼等は、意識的にか無意識的にかその潮流を代表してゐる。

彼等は内訌の悲劇を通じて、共產主義の矛盾の上に踊つてゐる機械人形のごときものである。

## 第二章 内訌渦中におけるレーニン獨裁の成立過程

### 一、レーニン、プレハーノフと共にナロードニキに反旗を翻す

ロシア革命運動史の上を流れる一貫した真理は間断なき内訌の反覆である。レーニンは、彼が革命運動に潜入した當初において既に内訌争闘の先達者であつた。

プレハーノフの組織した「ロシア社會民主主義労働黨」(今日のロシア共產黨の前身)は、千八百九十八年以後、ロシア革命運動内訌史の一方の擔ひ手となつたが、この組織に先立つてロシアには一つの有力な革命黨が組織せられてゐた。所謂「ナロードニキ」運動がそれである。この組織は、既に千八百七十年前後に組織せられてゐたもので、指導者と稱するものはゴツチ、チエルノフ、チヤイコフキ等であつた。ナロードニキは所謂革命黨として、その本質には非常に陰謀的な深みを持つてゐた。戦術における直接行動、皇帝及び政府大官の暗殺はナロードニキの主要なる特徴をなしてゐた。レーニンの實兄アレキサンダー・ウリヤノフのごときも、千八百八十七年のアレキサンダー二世の暗殺事件に、ナロードニキ黨員として参加してゐる。



この黨の思想的色彩は第一が先づ専制政治の打倒であつた。所謂「人民の中へ」がその主要なるスローガンであつて、廣汎なる人民層——實は農民層であつたが——へ彼等自からが潜入して、民衆の反政府意識を呼び起すといふのである。理論と實踐が一致するか否かは別として、彼等は實際専制政治を打倒することによつて、當時の民衆にヨーロッパ的自由を與へやうとした。當時ヨーロッパ社會の空氣を呼吸した青年、自由主義者、所謂一般の社會主義者と稱するものは、専制政治に對する極度の反感から悉くこの黨の傘下に參集した。

専制政治打倒後の新政府形態に對する彼等の理想は、決して一貫した方針で定式化してゐた譯ではなかつた。或る時期には無政府主義であり、又或る時期には立憲政體であつた。しかるに千八百八十年代に至つてロシアに侵入してきたマルクス主義の影響は、この黨派に共產主義の問題を討議せしめた。この討議はナロードニキをして共產主義の一部分、所謂共產主義社會の理想を採用せしめるに至つた。ナロードニキは、ロシアの共產主義化を理想として謳歌するやうになつた。

しかるに千八百八十三年、この組織を妨害する目的で、ナロードニキの一分派「チヨールヌイ・ペレディエール」の黨員ブレハーノフによつて「労働解放團」なるものが秘かにジネーヴにおいて結成された。この黨の創立メンバーは、ブレハーノフを筆頭としてザスリツチ、阿克セリロード以下である。

この「労働解放團」は、ナロードニキの中にあつて、何れかと言へば、格別重要視されなかつた不平分子が結成したものである。彼等の野心の所在點は、歐洲から新奇な革命理論としてのマルクス主義を移入して、これをもつてナロードニキの陣營を攪亂し、最後に自派の手中に「ロシア革命の指導權」を奪取せんとしたものである。

しかるにナロードニキは、當時非常に共產主義的な理想を持つた政黨となつてゐた。彼等はロシアの共產主義化を綱領にさへ掲げて、當時ロシアの諸地方に残存してゐた「農村共產體」を基本にしてロシアは資本主義を経過することなく、共產主義社會に這入るものであると云ふ見解を樹てた。ブレハーノフ等が、若し「ナロードニキ思想が、背反的の革命理論であつて、マルクス主義に對立する」といふ意味で、黨内黨を作るの背反的結社を組織したのは、當時のナロードニキのマルクス主義化に對して無意義なことである。彼等は、單に革命黨の方針にマルクス主義を採用するだけであれば、ナロードニキ黨内にあつて、ナロードニキをマルクス主義化することが出来た筈である。しかるに彼等は、それと對立する別個な組織を結成した。そこには前述したやうに、將來の政治的支配的地位と結びつける投機心が含まれてゐたのだ。



そこでナロードニキと「労働解放團」との醜争の表面的形式は、所謂覇権をめぐる理論闘争の形で現はれた。この醜争は、レーニンなる天才的執拗性を持った青年が参加するに及んで一段と激化した。

ここでレーニン（本名、ヴラヂミール・イリイチ・ウリヤエーノフ、レーニンは彼のペン・ネームである）に關して一言する必要がある。彼は學生時代からブレハーノフの理論に心酔し、彼の謂はゞ一ファンであつた。千九百九十三年に、レーニンは、サマラからベテルスブルグにやつて来て、當時の過激な陰謀團グループ（ゲー・タラツシン、ゲー・イルジャノフスキー、エス・ラドチエンコがその巨頭）に身を寄せた。彼は「市場に關する」報告なるものによつて、この無智な陰謀團の指導者格として間もなく納まることとなつた。彼は「労働解放團」へ加入して、そこで自己の勢力を擴大する上には何うしても當時のナロードニキ對労働解放團との醜争に参加し、且つ労働解放團のブレハーノフ側に味方する必要を感じたのである。彼は間もなく若い誇張した文章で「人民の友とは何ぞや」及び「彼等はいかに社會民主主義者と闘つてゐるか」を書いた。

インテリゲンチヤが革命運動に這入つて、指導的地位獲得の手段は、今日と雖も唯だ一つ所謂理論を回轉する技術あるのみである。レーニンは、早くもこの點から仕事を始めたのである。國外

にあつたブレハーノフのごときは、突如として現はれたベテルスブルグの無名の聲援者を喜びもしたが、又一面においては甚だ不思議に思つたと云はれてゐる。

ナロードニキと「労働解放團」の醜争は、先づ理論的領域では「ロシア革命指導の社會的實體は何であるか」と云ふ問題を中心として行はれた。ナロードニキ側の主張は、「專制政治下にあり且つ專制政治に反感を抱いてゐる國民層がロシア革命の指導的實體である」となした。これに反して、「労働解放團」側は、「ロシア革命の指導體は労働者階級である」と云ふマルクスの公式を持ち出した。ナロードニキの主張は當時漠然としてゐるといつた批評があつたが、他方のは、「少數の労働者の解放がいかにして國民全體の解放となり得るか」の質問に答へることが出来なかつた。ナロードニキは、「労働解放團」一派を追跡した。即ち「労働解放團は労働者階級がロシア革命の指導階級であると稱するがロシアには指導する筈の労働者は存在しない」と。實際、當時のロシアは工業國としてではなく農業國として存在してゐた。ナロードニキの有名な言葉に、「労働者が指導層なれば先づマルクス主義者は工業を發達せしめるために企業家とならねばならぬ。村では彼等は居酒屋を開業しなければならぬであらう」と云ふのがある。「労働者解放團」は、公式は樹て、見たが現實の問題とすれば矛盾が生じてくる。ナロードニキの主張に對しては成る程と肯定しなければならぬ。



然し成る程と頭を下げることは自己の敗北となる。そこで彼等による労働者階級の調査が始まつた。この仕事はレーニンが引き受けて、千八百九十六年から所謂「ロシアにおける資本主義の發達」の起草となつたのである。この著作は、今日赤色分子の中で廣く讀まれてゐるものであるが、これは要するに當時のロシアにおける労働者の存在を指示した調査的な作品である。當時のロシアが農業國であつたと云へ、少數の労働者は存在した。しかしそれはイギリスにおける當時の労働者の増加數と、共產主義運動とに對比すれば到底比較の圈内に這入るものではない。

労働者解放團側は、今度は、ナロードニキ攻撃の手段として、ボアンカレーヤロベスピエールを持つてきた。ナロードニキの思想は古い。ボアンカレーヤロベスピエールのイイズムであると誹謗する手段を採用した。そこで労働解放團は、新奇な事物に感銘し易い學生層を煽動することに視野を轉じた。

## 二、レーニン等醜争に學生層を利用す

ブレハーノフ其他の首領によつて著述的才能を認められたレーニンは、千九百九十五年に國外への旅行を始めた。彼の目的は、當時國外にあつた「労働解放團」の首領等に交渉を持つことであつ

た。首領等はこの青年を迎へて、有力なる革命運動の味方を持つたやうに思つたと云はれてゐる。レーニンは解放團の正式の團員となつて、所謂労働運動の中心地と稱せられてゐたヴオリノ、モスクワ、オレホヴオズエヴオ地方を回巡してベテルスブルグに歸つてきた。彼は、こゝで「ベテルスブルグ労働解放團」なるものを組織した。彼は、實際において、ナロードニキとの醜争に参加し、單に理窟の上で論争したのみならず、實踐的領域においても所謂繩張り闘争の實行者であつた。大衆の利益を擁護すると稱する團體で、幹部間の醜争は肝要の大衆にとつて無關心なことが多い。理論によつて所謂大衆獲得の戦術とすることは、當時においては殆んど不可能であつた。レーニン等は、ナロードニキとの抗争の關係上、何うしても自己の勢力を實際の社會的舞面に植えつける必要があつた。彼等が當時の新奇な理論の支持者を、労働大衆よりも寧ろ學生層に求めたことは當然のことである。

千八百九十年前後から、學生層の反專制政府意識は部分的に發展してゐた。幾多の著書を通じて彼等が理解したヨーロッパの政治制度は、當時におけるロシアの專制政治と比較すれば遙かに進歩してゐた。彼等の理想としてゐたものは所謂自由主義のヨーロッパに外ならなかつた。こゝで當時の學生運動が專制政府を憎惡する點で、革命的陰謀團の煽動と結びつたのは當然のことでもあつ



た。レーニンの指揮したベテルスブルグの労働解放団が、次から次へと展開する學生騷擾事件に口火を點じていつたことは事實である。當時の學生運動なるものは、殆んど大學高等専門學校の所在地をロシアの全国に亘つて席捲した。所謂常套手段の學内集合を催し大衆的示威行列で市街に進出し、公然と學校内部を占領することさへ辭さなかつた。政府は、學生運動に對する峻厳なる取締りを採用するに至つたが、この取締りにも拘らず學生騷擾事件は反つて熾烈化した。峻厳なる取締りは所謂學生の大量的逮捕と、赤化學生の強制的入營の二つの手段であつた。取締りの手段は原始的である。政府は學生騷擾事件の中心分子とそれに結びつく陰謀團の本據を突くことなしに、徒らに大量の學生を逮捕することによつて事態の解決を急いだのである。後者の強制入營に至つては、その政策たるや甚だ愚劣であると言はねばならぬ。政府の意圖は、兵營訓練によつて赤化學生の精神を改めることにあつたが、結果は殆んど逆である。兵營は決して獄舎ではなかつた筈である。しかるに兵營の獄舎化は、帝政ロシア崩壞の或る意味での一因をなした。

そこで煽動の海に乗つた學生群は學生の大量的逮捕に對して、政府大官及び取締執行官に對する「赤色テロル」を實行した。ボゴリエポフ暗殺事件、ボベドノスチエフ暗殺事件等がこれ等の學生の手によつて惹起された。ボゴリエポフに代つてワネスキー將軍が立つたが、彼は學生運動取締り

に關して護歩的な綱領「誠實なる配慮」を發表するに至つて寧ろ社會の冷笑を招いた。又強制的入營によつて入隊した赤化學生群は、これ又兵營内部の積極的赤化を企てた。

當時の學生運動の内容は、非常に狂暴なものであつた。この騷擾事件を利用して、所謂労働解放團が自己の組織網を學生層に擴め、且つ騷擾の全國的波瀾を利用して、反ナロードニキイズムの煽動宣傳をなすに至つた。

### 三、所謂「ロシア社會民主主義労働黨」の結成とユダヤ人の役割

ナロードニキは、労働解放團側の戦術を「陰險なる戦術」と呼んで、彼等の策動にやはり激烈な對抗の陣を敷いた。兩者の競争は、それが激化する度に相應じて増々相互の區劃線を明確にしていつた。妥協は彼等の間には行はれなかつた。競争の結論は、そこでナロードニキはナロードニキの道を行き、労働解放團は又同様に彼等の道を進むだけであつた。ギヤツプは消滅することなく千九百十七年革命まで約束された抗争を残したのである。

所謂「労働解放團」は、ナロードニキとの競争渦中に、その陣容強化の意味で「ロシア社會民主主義労働黨」なるものを組織した。レーニンは當時労働解放團の首領ブレハーノフの信頼を得てきたの



で相當の勢力を持つてゐた。彼等がこの黨の組織に参加したのは言ふまでもないが、同黨の成立事情には少しく注意する點がある。所謂「社會民主主義労働黨」は其後におけるレーニンの分派闘争の根據地となり、且つ今日の「ロシア共産黨」の前身である。

先づ第一に特筆すべき點は「ロシア社會民主主義労働黨」が全くユダヤ人の手によつて組織されたことである。この黨の参加構成に應じた團體は、ユダヤ人の組織「ブンド」を筆頭とした次のときものがあつた。

ブンド

労働解放團

南露労働者同盟

ペトログラード闘争同盟

北露労働者同盟

キエフ闘争同盟

モスクワ闘争同盟

其他、社會民主主義サークル

(當時彼等共産主義者は、共産主義を社會民主主義と稱して政府當局の眼をかすめてゐた。) 所謂ユダヤ人の秘密結社ブンドは、當時ロシアにおけるこの種の過激組織の最大なるものであつた。これは在露ユダヤ人によつて組織されてゐた唯一の結社であつて秘かに專制政府の打倒を畫策してゐた。凡ての暴動、凡ての叛逆運動の渦中には、彼等の陰謀が陰然陽然と現はれた。彼等陰謀團の共同的事業には、唯だ一つと雖もブンドの勢力と結びつくことなしには行はれなかつた。彼等は、當時のロシアの全地方にユダヤ人が存在してゐた理由から殆んどロシア全國にその勢力を持つてゐたのである。當時における過激運動には、事實上彼等の指導權が確立されてゐた。所謂「ロシア社會民主主義労働黨」の結成が、ユダヤ人の指導によつて行はれたことはこの事情からして當然なことである。ジイツイエフは、當時の事情を次のごとく言つてゐる。

「千八百九十年代の後半には、ユダヤ労働者の運動は甚だ重要なものであり、黨におけるブンドの役割は甚だ重要なものであつた。それには吾が黨の第一回大會の主たる組織者が「ブンド」であつたことを指摘すれば充分である。そしてこの大會がミンスクにおいて開かれたことも決して偶然ではなかつた。同地はユダヤ人の移住地帯の一都市であり「ブンド」の活動區域であつた。」  
ロシア革命の元兇は、後の全露サヴェートの議長となつたジイツイエフが明言してゐるやうに、



所謂ユダヤ人の陰謀として始まつたことは否足出来ぬ。所謂第一回大會は、千八百九十八年三月一日から、三日に亘つて秘密裡に開催されたもので、その代議員は、僅かに九人に過ぎなかつた。この創立大會では所謂黨規約、黨活動方針が決定可決されてゐる。これ等の草案はインテリゲンチヤ一群の労働解放團の草案になるもので特に興味あるのは後の帝制君主主義者となつて陰謀團から足を洗つたヌツルルツエが第一回大會の宣言を起草してゐることである。この宣言はバツリーリ著「ロシア社會民主主義史概説」の中に收められてゐる。この宣言文中に、ロシアの資本家を次のごとく言つてゐるのは面白い。即ち「東歐に行くに従つて（ロシアは東歐である）ブルジョアジイは政治に關しては増々無力となり、怯懦となり、下劣となるに反して、益々大なる政治的文化的任務がプロレタリアートの肩に落ちてゐる。」と。彼はロシアの資本家を攻撃して、將來の政治的、文化的支配者は労働階級であると大見得を切つたのである。さて、この創立大會で決定された活動方針の主點を見る必要がある。それは、専制政治打倒と共產主義革命實行のために、社會民主労働黨の當面の任務なるものを「政治的自由の獲得」となしたことである。當時のロシア國民の間には、ヨーロッパ的政治的自由は與へられてゐなかつた。政治的自由權の獲得は、ロシア國民全體の要求である故に、この要求運動を共產主義者が指導し、且つ彼等の勢力を利用して革命を實行すると云ふ

處方箋である。日本におけるコミンテルン出張所の戦術もさうである。所謂政治的自由の個々の内容は、舊労働黨の綱領が説明してゐる。

兎に角「ロシア社會民主主義労働黨」の成立によつて、千九百十七年におけるロシア革命の母體は植え付けられた譯である。しかし、この創立大會において注意すべき第二の點は、ブレハーノフ一派（レーニンも含む）の「労働解放團」のこの黨内における地位である。今日ロシアの官製共產黨史は、「吾が黨」の重大なる歴史を歪めてゐる。「吾が黨」の創立者ユダヤ人は影を没してゐる。又従つて「労働解放團」の役割は、——レーニンを含むが故に——誇張されてゐる。しかるに歴史の事實は、労働解放團がこの黨内における一分派として参加したに過ぎないことを明かにしてゐる。當時ブレハーノフを首領としたインテリゲンチヤのグループは、單に便利な文筆的代書家以上には相手にされなかつたのである。

#### 四、黨内に於けるレーニンの勢力擴張運動

個人的勢力擴張運動の手段は、當時の陰謀團の中にあつては自から競争の指導者となること、革命の指導權を自派の手に收めんとすることであつた。このことはさきにも一言した通りである。動



搖蕩中にあつて一つの旗を掲げて抗争することは、何處かの場所に味方を獲得することになる。これは一つの政治的投機である。結成された「ロシア社会民主主義労働黨」内部には、その明日から階級闘争ならざる闘争、即ち内訌闘争が展開した。この醜争は、主として共産主義運動の戦術問題を楔機として、あまり人格的に喜ばれなかつたブレハーノフに對する反対派の抗争が勃發したのである。所謂歴史上では、非合法的共産主義と、合法的共産主義者との醜争、若くはロシア社会民主黨（ロシア社会民主主義労働黨を略す）内部のイスクラ派と經濟主義者との内訌として傳へられてゐる。

**イスクラ派**

- ブレハーノフ
- マルトフ
- ポトレソフ
- アクセリロード
- ザスリツチ
- レーニン

**經濟主義派**

- プロコボヴィツチ
- クスコーザ
- ロホフ・オリヒン
- コーク（フィンランド人）
- マルチノフ
- イワニニン
- クリチエフスキー

以上は、内訌兩派の顔振れであるが、餘り興味のあるものではないが、一應参考として掲げて置く。又レーニンは、イスクラ派の新参者であるから一番最後に名を連ねることにした。

經濟主義派は、前記したやうに大體ブレハーノフの人格及び政策に對して反感を持つてゐた人々であつた。大體内訌は個人的意味を除けば分派闘争とならぬものである。具體的な歴史は、感情的對立を理論のベールで陰蔽することがしばしばである。經濟主義派の反感は、既に大會以前から伏在してゐたもので、創立大會におけるブレハーノフ的「政治闘争主義」の方針が深く彼等の意見



と対立してゐたのであつた。プロコボヴィツチの意見は、或る意味で當時の労働者層の意見を表現してゐた。彼等の意見の要諦は「労働者の眞の友は吾々である。諸君は（ブレハーノフやレーニン）は）専制政治の打倒や革命的政闘争のみを考へてゐるが、そんなことは労働者の問題ではない。諸君はブルジョア民主主義性質を持つた任務を提出されるが、労働者の眞の友である吾々は言ふ、労働者諸君！ 諸君には専制政治と云つたことには何等關係がない。諸君は、自身の熱いお湯のことや労働時間のことを考へなければならぬ。」と云ふ點にあつた。経済主義者の主張によれば労働運動家は労働者階級の利益を擁護することが主眼であつて、労働運動家が自己の個人的な目的を實現するために、労働階級を利用することは絶対に許されぬ、ブレハーノフの政闘争主義は、労働者には關係のないブレハーノフ自身の目的である。労働者は、何よりも賃銀、待遇の値上げによつて自己の経済的生活條件の更新を望んでゐる。そこで吾々の當面の任務は、政府及び資本家に對して労働者の経済的改善の要求を提出しなければならぬ、と云ふ點にあつた。この反對意見に對してブレハーノフ一派は答へてゐる。「吾々は勿論労働者の生活を改善することを希望するが、それは吾々にとつて餘りに小さいことである。吾々は労働者が革命を實行し、その主人公となり指導者となることを希望するのである。故に労働者に關係のない問題はない。専制政治の問題は分り切つてゐることを希望するのである。故に労働者に關係のない問題はない。専制政治の問題は分り切つてゐることを希望するのである。」

「ブレハーノフ側は、労働者の生活改善は「希望するが」「餘りに小さい問題である」更に大きな問題は、労働者が指導者となつて、革命運動を實行することであると主張してゐる。ロシア革命の指導者は、今日ロシアの官製歴史によれば労働者ではなくて、天才の名のついたレーニンでありスターリンである。以上の労働者と云ふ言葉を、ブレハーノフ及びその部下レーニンと翻譯して見ては何うか。

ロシア社会民主黨の最初の内訌は、意外にも擴大錯綜した。経済主義者の主張した労働者は生活の改善闘争に、政治闘争は政治家に委せておけばいゝとするスローガンは、その傘下に多くの味方を引きつけた。當時ロシアの革命的陰謀團の群に、特にペトログラードにおいて絶對の權威を持つてゐた「ラボーチヤヤ・ムイスリ」は、プロコボヴィツチとタスココヴァの意見を熱心に辯護した。この意見は、千八百九十八年から千九百〇一年迄の間、ロシアにおける支配的イデオロギイとなつた。又當時外國におけるロシア亡命分子間における経済主義の發展も注目するに價する。所謂外國における経済主義の支持者、實際に於ける反ブレハーノフ派は、「ロシア社会民主主義同盟」を結成し、且つ機關紙「労働者の問題」(ラボトチェ・デエーロ)を發刊して、反ブレハーノフの熾烈な攻撃を展開した。「ラボーチエ・デエーロ」には、マルチノフを始めとして、マキモフ・マクノヴェツツ、



イワニニン。クリチエフスキー等の所謂當時の革命家と稱する面々が揃つてゐた。ブレハーノフは、半ば悲鳴的に、経済主義者を反駁して、「彼等は経済と云ふ憐れなパンの問題に労働者を局限して労働者を大小屋へたゞき込む」云々と主張した。内訌の嵐は、ブレハーノフ一派の面皮を次第に削がすことゝなつた。彼等は否むべくもなく苦戦に陥つたのである。しかるに時しも、この内訌事件に一役買つて出る筈のレーニンは、内訌闘争がやうやく熾烈化する直前、逮捕されてシベリア流刑となつた。彼は、それでも流刑地にあつて「ロシア社会民主主義者の任務」なる著書を出してこれをブレハーノフへの助け船とした。この著書は、丁度ブレハーノフ一派の敗北を止どめ得る點に役立つたので實力以上に宣傳且つ評價づけられた。

レーニンの名が、部分的ではあるが、始めて知れ渡つたのはこの時以來のことである。しかるにレーニンは、千九〇〇年一月流刑地からベトログラードに現はれた。(彼の逮捕は、千八百九十七年である)彼の歸來は内訌闘争を一般と激化することゝなつた。彼の活動は先づ、経済主義者の合法的マルクス主義を攻撃することゝ、攻撃陣營内部において指導権を獲得することであつた。彼は、マルトフ、ポトレソフ等と計リブスコフにおいて秘密會議を開催し反経済主義の全國的政治新聞の發刊を提起した。しかしこの新聞は、ロシア國內では發刊されず外圍即ちヂュネローフ

において發刊された。と云ふのは、當時のロシア政府の取締りを懸念した結果で、インテリゲンチヤイとしてのレーニン等には、實踐の上では著書の上で説くやうな非合法運動は出来なかつたのである。外國における「イスクラ」(火花)の發刊を模範として千九百十七年の三月革命まで、彼はづつとロンドンにあつてロシア革命を指導してゐた。安全地帯ロンドンにおけるレーニンの生活が、後に至つて卑怯の評価をうけたことは又當然の事である。

後に「ロシア社会民主黨」の公然の機關紙となつた「イスクラ」は、千九百年十二月に、パワリヤのミニンヘン市(後のジュネローフ)で兎に角發刊された。イスクラの同人は、ブレハーノフ、アクセリロード、ザスリツチ、マルトフ、ポトレリフ、レーニン等の顔ぶれである。所謂「イスクラ」發刊の目的は、第一に経済主義者に対する戦争の布告であつた。内訌は、今日、ロシア共産黨員の謳歌してゐる光輝ある「イスクラ」を生んだのである。ジノヴィエフの書くところによると、イスクラは経済主義者の主張する労働者運動に對して宣戦を布告した。即ち労働者運動を飽く迄平和的經濟的要求の拷問床に押し込めんとする彼等の努力を容赦なく罵倒し、叱責するためと稱されてゐる。所謂「イスクラ」は當時レーニンの草した「全國的政治新聞は同時に全國的宣傳者であり組織者である」と云ふ宣言を發表したことによつて有名である。彼等は、この新聞を利用して、先づ何よ



りも経済主義者としての合法的マルクス主義派を罵倒し、其他の反対黨ナロードニキ等へも遠慮のない誹謗をあびせかけた。こゝにも現はれてゐるやうに、レーニンの内訌闘争の秘策は、決して反対派と妥協しないこと、自派の主張する方針を絶對的に正當化して執拗にそれを宣傳すること、敵を最後まで罵倒することであつた。所謂「イスクラ」の戦術にはこの方針がよく表現された。しかし「イスクラ」派のブレハーノフ及びその尾端についたレーニン等の経済主義者征伐は猛烈であつたにも拘らず、「イスクラ」は餘り大衆の支持を得なかつたのである。

のみならず、更に「イスクラ」編輯部内部で所謂同志の醜争を通り越した同志の内訌が發展した。内訌の波瀾は黨内の二大分裂から更に分裂派の分裂へと押し寄せていつた。「イスクラ」の發刊と同時に、この編輯局へ二人の有名な評論家に参加して来た。一人は、スツルツエと他の一人は、オボレンスキーであつた。ブレハーノフ等はこの名聲ある評論家を利用する策略であつた。これ等の人々は「多くの關係を持ち金を持ち廣大なる邸宅を所有してゐた。既にこれ等の理由からでも彼等を一時的に利用することは正當であつた。」この見解が當時における彼等の態度であつた。こうした功利的野心を持つた陰謀家と一應の社會的地位を持つた紳士との雜居が到底長く續くべき筈はなかつた。人的接觸の上に、個々の仕事に現はれる小さな異見の上に、彼等の對立は激成されてい

つた。オボレンスキーの言によれば、彼等は紳士的何等の良心を持合せない共同するにたえぬ醜類であつたのである。これ等の人々との共同編輯は不可能となつた。そこでオボレンスキーとスツルツエの二人は、ツガン・ペラノフスキーを加へて、これ等「醜類」の巢窟から足を洗つたのである。非常に遠慮勝ちなオボレンスキーが、「イスクラ脱退の宣言」に、「余は今や解放運動における労働階級ヘゲモニーの問題を断念すべきである」と言つたのは意味深長である。ヘゲモニー、所謂指導權を名とするレーニン等の宗派主義は、頑迷な程、度し難いものであつたのである。分裂は、「イスクラ」を微弱化した。彼等の所謂殘留同志間には、一應意識的にも仕事の上にも一致點が見出されたやうであつた。しかしこの一致は表面だけの現象であつた。野心家の集團には眞に胸裏からの統一は成立する筈がなかつたのである。プロレタリアの指導權の裏には、將來の政治的支配者を夢見るインテリゲンチヤの集團があつた。インテリゲンチヤの集團には、又その内部に將來の個人的政治的支配者を夢みる人格が存在した。彼等は、相互に他人を排斥することなくして自己の黨派内部における指導權を確立することが出来なかつた。他を排斥すること、自己を指導者として高めること、しかし大衆運動と呼ばれる種類の運動は、他者を排斥しつゝも尙且つ他者を利用しなければならぬ。利用の糸の引き具合によつて矛盾が發展する。彼等の内訌の矛盾は實に



以上の點から絶えず發生したのである。統一あるべき筈の残留「イスクラ」編輯部は、更に後述するやうに間もなく分裂するに至つた。統一さるべき筈の原則は、ほんの瞬間的に實現されたに過ぎなかつた。

さてしかし、ブレハーノフ一派の「イスクラ」残留組は、オボレンスキーとスツルルツエ脱退後も所謂經濟主義者との醜争を續けてゐた。しかるに千九百〇一年頃、ロシア國內の革命運動の中には新たな狀勢が勃發した。政府當局によつてストライキ煽動の罪人が大量的に逮捕されたことである。彼等の敵手としての經濟主義者は、「イスクラ派」が打倒するよりも、ロシアの政府當局が打倒してくれた。皮肉にも當局の政策はレーニン側に進路を拓いた。

經濟主義者と「イスクラ派」との醜争はこゝに自然消滅の形となつた。しかし内訌の敵手の倒れたことは、同時に内部の結束の糸を解くこととなつた。「イスクラ」の第二次分裂と、ロシア社會民主黨の歴史的二分はかくして行はれたのである。

（レーニンは、千九百〇二年に小冊子「何を爲すべきか」を書いてゐる。内容は經濟主義に反對したものである。）

最後に附言するが、レーニンは出獄後の小冊子と活動によつて黨内に次第に認められては來たが、その地位は到底他の「イスクラ」のメンバーの足下にも及ばなかつたことである。

## 五、ロシア社會民主主義労働黨第二回大會とポリセヴィキと

### メンセヴィキの大分裂（レーニン、ブレハーノフに背反す）

内訌争闘の敵手が倒れると見るや、頃しもよしと「イスクラ」派は、自派の組織的強化を企圖するに至つた。先づその第一の表現をロシア社會民主黨第二回大會の準備策動に見ることが出来る。イスクラ派は何時しか「組織委員會」なるものを内部に結成して、第二回大會召集の策略を協議してゐた。當時におけるロシア社會民主黨の構成は、さきにも一言したやうにユダヤ人の「ブンド」が絶對多數を占めてゐて、又經濟主義者の殘黨其他各地方の個々の結社が加入してゐた。（ブンドとはユダヤ語の組合の意）彼等は各々自己の意見自己の方針を持つてゐて、イスクラの方針に一致するもの反對するもの、或は部分的に一致するが又部分的に反對すると云つた様なものであつた。又「イスクラ」の集團を、ロシア革命運動の事實上の指導部と考へるもの、或は「イスクラ」を目してせいぜい「文書の起草所」程度に扱つた者もゐた。

そこで「イスクラ」派の野心は、これ等の諸派をイスクラの下に統一して、社會民主黨内におけ



るヘゲモニーを確立すること、即ち第二回大會を通じてイスクラ派を事實上の指導部とすることであつた。所謂「組織委員会」における協議の内容はこれである。「イスクラ」派は第二回大會に先立つて、ロシア國內社會民主黨の第一回中央委員会を選出開催して、そこに自派の勢力を植えつけんとした。(今日外務人民委員長のリトヴィノフはピアトニツキ等と共に最初の中央委員である。)

次に、「イスクラ」派は、第二回大會の提唱主催者となることによつて指導権を確立せんとしたが、それよりもインテリゲンチヤの特質から「理論的問題」によつて黨を指導せんとした。先づ黨綱草案なるものが「イスクラ」と「ザリヤ」イスクラ派の理論的機關紙の編輯員によつて起草されることとなつた。所謂綱領草案は、——レーニンも参加したが——主としてブレハーノフによつて起草された。それは今日のロシア共產黨綱領の基礎となつたもので所謂四つの部分(一)資本主義の發展(二)資本の集中(三)プロレタリアートの發生(四)プロレタリア革命から成つてゐる。これは、ドイツ社會民主黨の綱領を真似たものである。

(4) 第二回大會開催さる

かくて千九百〇三年夏、プラツセルにおいてロシア社會民主黨第二回大會なるものが開催された。代表参加者六十名、決議投票權を持ち得るもの四十八名である。いま参考のためにこの大會参加者

のメンバーを擧げて見よう。

シヨットマン(ペトログラード委員会)。リヂヤ・マフノヰエツツ(同、經濟主義派)。エン・パウマン(モスクワの委員会)。リヂヤ・イニボヰイツチ(北露同盟)。ストパニー(同)。マフリン(ウーファ委員会)。レオノフ(同)。クラシコフ(キーフ委員会)。デイミトル・ウリヤノフ(ツォラ委員会、レーニンの兄弟)。ゼムリヤチユカ(オデッサ委員会)。パニン(クリミヤ、反イスクラ派)。マンスキー(ドネツ同盟、反イスクラ派)。ガルキン(サラトフ委員会、イスクラ派)。リヤドフ(同、同)。レーヰイナ(ハリコフ委員会、中立)。ニコラエフ(同、同)。マルグデンベルグ博士(シベリア同盟、反イスクラ派)。トロツキー(中立)。スラボフ(バツチーム委員会、反イスクラ派)。クニニヤンツ(バクー委員会)。トブリチエ(チフリリス委員会)。クレイメル(ブンド)。アイゼンシュタット(同)。ポルトノイ(同)。リベル(同)。メデム(同)。コソフスキー(同)。レーニン(在外國)。マルトフ(編輯部)。其他ブレハーノフ。アタセリロツド。ドイチユ。グーゼフ。アツケルマン。(以上主要なる代表者)

これ等の参加者は殆んど非合法的に國境を突破してきたものである。「イスクラ」一派はこれ等の本案内な代表者を迎へて、凡てに個人的な世話をして一方では、「イスクラ」の方針を宣傳し自派



への代表獲得策に出でたことは、トロツキーの指摘してゐる通りである。大會はブラッセルにおいて開催されたが、ベルギー當局の禁止によつて三日にしてロンドンへ移された。

(ロ) 第二回大會の競争とレーニンの分裂主義發揮

第二回大會の勢力は、大別すると大體次の三勢力である。

(一)「イスクラ派」ブレハーノフ及びマルトフ、レーニン等のインテリゲンチヤー派(在外國派)  
(二)反「イスクラ派」即ち後にメンゼヴィキとなつたもの、やはりインテリゲンチヤーの集團である。(在ロシア派)

(三)「ブンド」ユダヤ組合で、黨内加名組合中の第一勢力、ロシア社會民主黨の創立者、労働者、手工業者の黨である。(在シロヤ派)

こゝで在外國と在ロシア派とを明記したのは、第二回大會での「イスクラ」派、即ち在外國派が黨の指導權を握るか、それ共後者の在ロシア派が黨の指導權を握るかの争闘に問題の一面があつたからである。

さて黨第二回大會は、所謂「イスクラ」派が黨内指導權獲得を目論んで提唱主催したので、「イスクラ」派としては、この機會に黨内の指導派となるか、それ共他の反對派に指導權を渡すかの決定的な瞬間であつた。大會開催前の個人的交渉に、やゝ成功の自信を持つたレーニン等は、大會が開催されるや斷骨な專制的宗派主義の政策を提出した。レーニンのひろげた宗派主義の網は、反對派の猛烈な反撃に遭遇した。先づレーニン等の宗派主義的攻撃は、「ブンド」の權利剝奪に試みられた。

(一)「ブンド」代表レーニンの陰謀に反對し席を譲つて退場す

マルクス主義の教義は「民族の完全なる解放と自治權」を共產主義の條件づきで認めてゐる。しかるにこの大會でマルクス主義者レーニンは、「民族自治權の完全なる抑壓者」として現はれてゐる。マルクス主義は、條件によつては對立物へ轉化する手品哲學のごときのものである。條件とは「イスクラ」派が自己の黨内指導權を確立するためには、何うしても黨内第一勢力の「ブンド」を束縛する必要に迫られたのである。この條件がマルクス主義を、簡単にその對立物へ轉化することの出來た要因である。當時「ブンド」は事實「ロシア在任ユダヤ人の唯一の代表者」であつて、この資格から彼等は第二回大會に出席してきた。しかるにレーニンの提案は「ブンド」の組織的解體を提出した。要點は、「ブンド」は社會民主黨中央部(イスクラを意味する)の指導に服従するためにその全國的組織を解體して「ブンド」の各支部は、社會民主黨の各地方支部に編入さるべきであると云ふのである。即ちエストニアにある「ブンド」はエストニアの黨地方支部の指令に服従し、バクー



在住の「ブンド」は、これ又バクー黨支部の指令に服従せよと云ふ命令である。従来「ブンド」は、ユダヤ民族の特殊な組織であると云ふので、特殊な中央指導部を持ち、この指導部から代表を社会民主黨に送ることによつて連絡を保持してゐた。彼等によると、民族的な組合には黨の一般的綱領では解決することの出来ぬ特殊な問題があると云ふのである。この意味で「ブンド」は、黨内にあつても尙且つ特殊な自治権を持たねばならぬ。レーニンの主張は、この自治権を破壊制奪するものである云ふ。ましてや、殊に民族的團結心の強いユダヤ人のことである。レーニンの試みに對して反抗の事を上げたことは言ふ迄もない。

そこでレーニン等は、黨内の補助機關として特殊なグループを持ち、母國語で新聞を發刊する權利を讓歩したが、これだけでは彼等の自治権は確立されなかつたのである。「ブンド」五名の代表は、「レーニン横暴」を叫びつゝ遂に席を譲つて會場から脱退した。

大會は、早くも分裂したのである。しかし同大會で、レーニンがかくも頑強に自己の主張を固執し得たのは、「イスクラ」朝制運動を彼が代表してゐたこと、特に當時彼等間に信頼のあつたマルトフが、やはり「イスクラ」派の立場を代表してレーニンを援助したことにあつた。

しかるに「ブンド」に對して共同戦線を持つた二人は、翌日次の問題で醜争遂に又分裂するに至つた。

### (二) レーニン遂に先輩マルトフに背反す

レーニンは、「ブンド」との醜争が終るや、直ちに黨の先輩マルトフに喰つて懸つた。「ブンド」脱退の後、マルトフは黨員の資格を規定して、「黨員とは黨の統制下に活動し黨の組織を何等かの方法で援助する者を云ふ」と云ふ議案を提出した。しかるにレーニンは、「黨員とは黨の何れかの組織に参加し黨員の義務を果し黨費を納め黨規を遵守する者を云ふ」なる別な定義を持ち出した。この兩者の定義には、格別何等本質的な相異點はなかつたのである。しかるにこの問題は、「イスクラ」内部の個人的對立を激化する楔機となつた。レーニンはこの規定につけ加へて次のごとく主張した。

「一労働者が黨員たらんとするなれば、彼は何れかの細胞に入り、黨の何れかの組織において活動しなければならぬ。労働者にとつては何等このことは驚くべきことではない。この條件の遵守如何によつて、吾々は黨が如何なる人から成立してゐるかを知るであらう。吾々は無秩序な黨員大衆、パン粥のやうな黨員大衆を持つとすることはできない。」

これに反して、マルトフの意見を紹介すると

「吾々は非合法の時代に生活してゐるのであつて、黨へ参加することは相當危険なことに屬する。



労働者は恐らく吾々の下に参加するであらう。しかし労働者以外の學生教授、自由職業家等は吾々の下へは來ないであらう。それ故に黨員の義務に關して最つと廣い規定を與へ、細胞や組織の中へ這入ることを義務とせず、黨を援助してその統制下に活動するものは、誰でも黨に所屬出来るやうにすれば、學生も教授も知識階級も吾々の下に來るであらう。」

と。レーニンは、この問題に就いて青年的宗派主義を代表し、マルトフは老練な所謂黨の門戶解放主義を主張した譯である。實際、後にジノヴィエフが指摘した通り當時の社會民主黨は労働者でなくて、インタリゲンチヤーによつて組織されてゐたのであるから、労働者を問題とし、黨細胞加入を原則とすることは、何等無意義であつたのである。「イスクラ」の幹部派は、悉くレーニンの宗派主義を排撃してマルトフの意見を支持した。レーニンの意見は、何等實際を知らない青年の意見として取扱はれた。しかし、それにしてもレーニン自身はこの意見を固持して自己の指導權を確立せんとしたのである。プレハーノフは、それを知つてか知らぬでか、次のやうな皮肉でこの争闘を諷刺化した。曰く「レーニンの意見を聞けば、それが正しいやうに思はれ、マルトフの言ふところを聞けば又、これが正しいやうに思はれる。あちらもこちらも正しいやうに思はれる。」と。以上の問題では、レーニンは未だ酷く排斥されなかつたがしかるに彼が「イスクラ」編輯部の構成に就い

ての獨斷案を提起するや席上は全く混亂した。

當時「イスクラ」の編輯部は、その部員に六人が所屬してゐた。即ちプレハーノフ、マルトフ、ポトレツフ、阿克セリロツド、ザスリツチ、レーニンである。レーニンは、この編輯部員の改變を提案した。大會の意見が對立錯綜した以上は、それに相應した編輯部を組織するといふのが彼の主張であつた。レーニンの提案は、今日より「イスクラ」編輯部の所員をプレハーノフ、マルトフ、レーニンの三人にすると云ふのである。これが人もあらうに、若輩レーニンによつて先聲を差し置いて提出されたのであるから會場の混亂は思ふべしである。この提議は「黨の最も古い最良の人々に對する精神的謀殺である」と非難された。大會は「イスクラ」派と反「イスクラ」派とに分裂した。又マルトフは、レーニンとの共同を拒否して編輯部入りを拒絶した。そこで、編輯部は、レーニンとプレハーノフの二人となることによつて票決となつた。決定は、僅かの相違、二十五票對二十三票の差でレーニン等が編輯部に落ち着くこととなつた。この多數派が所謂「ポリセヴィキ」(多數派)で小數派が「メンセヴィキ」(少數派)となつた。両者はかくして千九百十七年の十一月革命まで社會民主黨内訌史の二大潮流をなしたのである。

史家は、この分裂事件を目して、レーニンの宗派主義に歸してゐるが、これは決して當を失した



評言ではない。しかしこゝで注意すべきは、少数派は、「イスクラ」が例へレニン等に占領されたとしても、彼等は事實上編輯不可能に陥るであらうと樂觀してゐた點である。果してレニンはこの分裂事件を機軸として孤立化しやがて彼自身大衆からポイコットされるに至つたのである。

(三) レニン大衆から排撃され遂に「イスクラ」脱退の餘儀なきに至る

ロシア社会民主黨は、遂に二つに分裂した。プレハーノフ及びレニンの二人は、「イスクラ」編輯部内に残つて従來の仕事を繼續し、且つ彼等は自派のポリセヴィキによつて支持されることとなつた。しかるにメンセヴィキは、マルトフ以下舊「イスクラ」編輯部員アクセリロッド・ザネリツチ等を擁して原稿寄稿を拒否し、「イスクラ」を事實上ポイコットした。このポイコットは、メンセヴィキが、ロシア國內において寧ろポリセヴィキよりも多くの社会的基礎を持つて居た事情からして、「イスクラ」にとつては偉大なる痛撃であつた。プレハーノフと輩下レニンとは、多くの古い指導者を脱落せしめて一應指導的地位を獲得したと云ふものゝ、反つて事實において大衆のポイコットの中に孤立化するに至つた。メンセヴィキは、歸國と同時に彼等自身の事務局（事實上の指導部）を組織して、本部中央部の統制に服しなかつたのみならず公然とポリセヴィキ撲滅の争闘を開始した。特にマルトフは、大會直後一書を刊してレニンの陰謀を辛辣な筆致で曝露した。

このポイコットに對して答へたのは、レニンよりも寧ろプレハーノフであつた。ポリセヴィキと雖も不評をかつたレニンを表面に立たせることは遠慮した譯である。事實上「イスクラ」はプレハーノフが一人で書き一人で編輯せざるを得なかつた。彼は、當時このポイコットを「將軍連の總同盟罷業」なる言葉をもつて皮肉つたが、將軍連の總罷業は事實「イスクラ」の編輯を不可能とした。この争闘渦中にあつて、レニンは「職業的革命家」云々なる珍説を發表した。これは、インテリゲンチヤの労働運動内における指導的地位を合理化したもので革命運動は労働に従事してゐる労働者よりも、この仕事に献身的な革命的職業運動家によつて指導されるべきであると云ふ主張であつた。この仕事に献身的たり得る餘暇を持ち得る者は、インテリゲンチヤを除いては發見出來ない譯である。この説が、「又かー」と言つて反對派の「イスクラ」ポイコットを熾烈化した。プレハーノフも、遂に手段に窮して恰も「イスクラ」の第六號を編輯すると同時に、「將軍連の總罷業」と皮肉くつた當の敵手を召還したのである。召還の條件は、勿論レニンを事實上ポイコットして、メンセヴィキの主張方針通りに編輯方針を確立することであつた。プレハーノフは、「イスクラ」にメンセヴィキの代表を参加せしめて、一つには内訌を緩和し、第二回大會の分裂を次第に訂正する方針であつた。しかるにレニンへの反感は餘りに強くなつてゐた。レニンは遂に「イスクラ」



を追はれたのである。

當時「分裂主義者」とは一般にレーニンを呼んだ諷刺名であつた。

當時中立的立場(レーニン一派によればメンセヴィキ)にあつたトロツキーが、批評した第二回大會でレーニンの採つた態度を紹介して見やう。大會の翌年千九百〇四年に彼の書いた「吾等の政治的任務」の中から――。

「成程それがマルクス主義である。そしてそれが社會民主主義思想だ。レーニンの如く絶大なる大儒主義をもつて、プロレタリアの最善なる思想的素質に接近することは事實において不可能のことである。レーニンにとつては、マルクス主義は、偉大なる理論的責任を持つところの科學的考察の方法ではない。――否それは――××に汚れた痕跡を拭ひとるに必要な布片であり、自己の大きさを誇るに必要な白い幕であり、又自己の黨員的誇りを示すために必要な、都合のよいものさしである。」

又、レーニンが第二回大會で提出した黨員に對する嚴格なる規定は、トロツキーの指摘するところによれば、レーニンの黨機關は、「奇怪の製造所」であり、中央集權主義は、「奴隸化」であり、細胞への強制的編入論は「人間を車輪か推進機に轉化するものである」と攻撃されてゐる。これが當

時中立的立場にあつたトロツキーのレーニンに與へた批評である。トロツキーは、レーニンの野心を可成り遠回しに言つてゐる。真正面からの反對派がレーニンを稱して「陰謀主義の鬼才」、「野心満々たる陰謀家」として攻撃したのも無理なきことである。

## 六、失業者レーニンとその内訌策動

執拗にしてしかも頑強なる策士レーニンは、人を謀ることによつて遂に自己の悲劇をまねくに至つた。

インテリゲンチヤは、指導部を離れた場合は全く悲惨な境地に陥る。指導的地位そのものは、インテリゲンチヤの革命的陰謀團へ加入する目的そのものである。レーニンは、このために絶えず理論の武器を持つて前進し敢て先輩群をも押し除けることをも辭さず、「イスクラ」を占領するや「職業的革命家」なる新理論さへ發明して、自個の地位を強化せんと企てた一人ではなかつたか。しかるに彼は黨指導部を追はれたのである。

一方當時の狀態は、ロシア國內で事實上の勢力を持つてゐた反對派メンセヴィキによつて「イスクラ」は完全に占領せられた。且つ第二回大會で選出された黨中央委員會はボリセヴィキが脱落し



て悉くメンゼヴィキによつて占められてゐた。黨は完全にレーニン及び彼の派閥を鎮壓したのであつた。レーニン自身に對する非難は増々募つて一部のグループからは彼は「スパイ」扱にされた。彼は、革命運動から身を引いて永久に一市民として隱退すべきか、それ共自派の勢力を糾合して「黨内黨を作る」の策動を断行すべきであるか。この二つの路が彼に與へられるに至つた。彼が採つたのは後者即ち「黨内黨を作る」の内訌の路であつたのである。

所謂「黨内黨を作る」の二重組織は、今日ロシアの絶對的御法度として嚴禁する所、中央黨部は其反對派に對し黨の統制を亂し従つて黨を微弱化し、外國帝國主義に黨を賣渡すスパイ云々の理由で彼等を抑壓してゐる。この二重組織の禁制は、何ぞ計らんレーニンの發案したところであり且つ彼が反對派「イスクラ」に投げ與へた主張であつたのだ。實に此禁制は最初其發案者自身によつて犯されたのであつた。當時レーニンは「正當なる主張を行つて除名された者が内訌の派閥を結成することは正當である」と云ふ意味のことを主張した。この理論は、スターリン獨裁下における今日の反對派にも亦正當な筈ではないか。實際問題として見れば今日の反對派には「デー・ペー・ウー」の組織が所屬してゐないことが陰謀の名によつて鎮壓されることになるのである。除名者が、――よし彼の主張が客觀的に間違つたものであつても――彼が正當と信じる限り自己の主張を貫徹せし

める爲には何うしても内訌の形を採らねばならぬ。即ち善意に解釋すればレーニンはこの方向を採つたのである。

幹部職を失業した失業者レーニンは、先づブレハーフ及びメンゼヴィキに對立してゐたポリセヴィキ派の青年層を糾合することに全精力を傾注した。彼は幹部派の專制を宣傳し始めた。しかし彼の黨内における當時の地位は、現ロシア當局がレーニンの神化を目的とする官製共產黨史においてさへも次のごとく言つてゐる。「同志レーニンは黨内においていかに權威あつたとは云へブレハーフに比しては尙若い指導者に過ぎなかつた」と。彼は、今日の反對派がやつてゐると同様な戰術で黨内下部組織を煽動していつた。そして、黨地區、地方支部を分裂せしめて、所謂ポリセヴィキの事務局なるものを結成し次第にこれを統一して全國的なポリセヴィキ事務局を結成するに至つた。かくてレーニンはその指導者となつた。彼は、ポリセヴィキの所謂黨内二重組織としての全露事務局が結成された直後、機關紙「フベリヨド」(前進)を國外において發刊した。レーニンは、小家内ではあるがこゝに始めて自派の首長となることが出来たのである。これは彼に主張の武器、内訌争闘の後方の陣が出来たことを意味する。

従來のレーニンの内訌争闘は、社會民主黨内に於る無名の一青年として加入し、自己の指導權を



獲得せんとする競争であつたが、これ以後のレーニンの内訌争闘は、自派の勢力にロシア革命の指導権を獲得せんとする争闘となつた。この立場が露骨に表現され且つ第一の目標となつた。

### 七、千九百〇五年革命と「ボリセヴィキ」「メンセヴィ

#### キ」の醜争

千九百〇五年一月九日、あたかも日露戦争の渦中において、所謂「第一革命」と稱する内亂がベテルスブルグに勃發した。ガボンの指導の背後には、勿論ボリセヴィキとメンセヴィキとの二つの陰謀團の姿が伏在してゐた。いまこの事件を中心として兩派の内訌争闘が新たに展開されたことを説く前に簡単にこの反亂事件の要因を擧げて見やう。

#### (イ)政府の労働運動取締及び対策の失敗

尨大なるロシアの國土は、これ等の革命的陰謀團の暗躍を取締る上に非常に困難なことは事實である。政府はこの困難なる事業に對して寧ろ横着とも云ふべき対策を採つた。革命團側が、ヨーロッパの先進理論を移入して増々新戦術を採用暗躍してゐたに對して、古い時代遅れの中世紀的取締方法で對抗してゐた。例へば、革命團側の組織的性質と思想傾向及び彼等の戦術を科學的に且つ綿

密に研究することなく、徒らに末梢的な鎮壓逮捕を事としてゐた。特に正規の社會民主黨員と、それに利用煽動されて一時的に陰謀に参加した分子とを明確に區別しなかつた結果、反つて彼等の反抗を激成し、中間的國民層さへも、政府の鎮壓を機軸として革命運動に走る結果を生じた。又逮捕學生を強制的に入營せしめしめるときは、事實上軍隊の悪化を促進助成したものである。対策における無能を利用して、革命團側は所謂「合法非法法を結合する戦術を採用」し、あらゆる合法的部面を利用して、革命的豫行演習としての策動を展開した。千九百〇五年革命事件の直前には労働者層の——ヨーロッパに比較して僅少なロシアに——ストライキの著しい増加が見られた。

#### (ロ)官僚主義的隠蔽主義

ロマノフ政府の官僚主義的傳統は、實際の労働運動対策の上には單に無能以外の何物でもない。當時の社會の紊亂を正視することなく、彼等は徒らにツァーの善政を誇つてゐた。ツァーのロシアには左様な不祥事は存在しない」と。これは、官僚主義的な責任回避の精神である。陰謀團の策動を暴露せず、反つてこれを隠蔽すること、國民の前にその対策を警告し、彼等の陰謀を全國民的基礎において審判することをせず、反つて徒らに彼等は口々にツァーの善政を讃歌してゐた。善政を讃歌すること、これが彼等の思想善導の唯一の手段であつた。



## (ハ)愚劣な對策所謂スパイ政策

しかし彼等は一面においては、秘かにしかも眞剣に革命陰謀團の暗躍を恐れてゐた。即ち「スパイ政策」として有名なものであるが、政府は、ガボン僧正に命じて、ペテルスブルグに御用労働組合を組織せしめた。これは所謂御用労働組合によつて當時の労働者の過激化をせき止めんとする政策であつたのだ。この労働組合は、殆んどペテルスブルグの全労働者を組織することに成功した。しかしその思想的内容は朝に國歌を合唱してツァーの肖像の前に跪き、夕にキリストの榮光を拜すと云ふ有様であつた。しかるに悲しいことには、ガボンは労働運動の素人であり且つ政府の政策は社會民主黨系過激派のこの御用組合内部における假面を覆ふた巧妙な暗躍に全然無識無能であつた。御用組合の内部にはその思想及び政府の政策に、全く對立した革命的陰謀團の組織網が擴げられてゐた。政府の此政策は正に反對の結果をもつて報復せられた。即ち千九百〇五年には、政府の忠實なる服命者であつた筈のガボンが自から叛亂の先頭に起つたのである。ガボンは、御用労働組合の政策の上に政府の命令を實現しなければならず又労働者間には政府の服命者たる事實を極力隠蔽しなければならなかつた。この矛盾が背後の策動を斷乎として處断し得なかつたのである。

## (ニ)新興資本家層の壓迫

當時ヨーロッパでは、立憲政體が組織されて新興資本家層は何等かの形で其代表を國會に送る事が出来た。然し舊露政府は此新思想に對して舊來の傳統的な專制政治を對置せしめてゐた。新興資本家層は、國會開設運動を続けながら專制政府に對して極度の反感を高めてゐた。彼等は、社會革命黨を組織して公然と專制政府打倒のスローガンを掲げ暗殺陰謀の手段をもつて政府に抗争した。專制政府打倒の點では、彼等は他の陰謀團社會民主黨の目的と一致してゐたのである。彼等は、唯だその擁護する社會層の内容が異つてゐただけである。日露戦争の勃發に對して、彼等が「自國敗北主義」の點で、他の陰謀團と共同戦線をはつたことは蓋し偶然ではなかつた。

## (ホ)農民政策の失敗と農民の反抗運動

ロマノフ政府は、既に千八百六十一年に「農奴解放」を行つたが、その後の「農村共有地」の分配は反つて農民の生活を低下せしめて居た。農民は、「農村共有地」の分配によつて一種の自作農として獨立する筈であつたが、共有地拂下げの分納による借金の返却方法は事實農民の生活を破壊することゝなつた。農民の生活には、當時共有地購入の代價を返却すべき餘利を捻出すべき餘利がなかつたのである。舊時の貴族の代りに、借金の鞭が新らしく彼等を壓迫することゝなつた。彼等の自然的な反抗は、遂に陰謀團の反專制政府意識にまで煽動されるに至つた。試みに千九百〇五年直



前の農村を見ると、そこにはロシアにおいて會つて見なかつた暴動小作争議の著しい増加が見られる。或る種の歴史家は、千九百〇五年事件を、主としてこの見地からのみ説明しやうとさへ試みてゐる。

(へ)一般國民を支配した「自國敗北主義」

當時の日露戦争に對して、ロシア國民の大部分が如何なる態度を採つたかの問題は興味のあることである。少し當時の資料を拾つて、所謂國民の戦争反對氣分を紹介して見よう。自然發生的に國民の間に潜在してゐた反政府意識は、社會民主黨の全線的煽動に絶好の機會を與へた。プレハノフ特にレーニン等の見解は勿論十月革命の敗北主義に較ぶれば所謂ナイーブなものであつたと言はれるが、それにしても彼等は「自國敗北主義」を執拗に宣傳した。又一方社會革命黨も、ロシア軍隊の敗北は、專制政府の讓歩と政權の讓渡を速進するであらうと云ふ見解から「自國敗北主義」の立場を採つた。

(政府當局と社會革命黨の間には、幹部間に一種の妥協が行はれてゐたと稱せられる。「妥協」の眞疑は兎も角として、一般に敗北主義を採ることを妨げなかつたやうである。) 見方によつては「誰も彼も日本最悪であつた」と云ふのが當時の潮流をなしてゐた。いま社會革

命黨員ゲルシュユニーの日記を開いて見よう。彼は、當時獄内にあつて辯護士カラブチエフスキーとの會話を次のごとく記してゐる。

長い窮屈な儀式の後に監房の戸が閉ぢられて吾々二人だけになつた。

ゲ「プレーヴェは、また政權を握つてゐますか。彼は未だ生きてゐるのですか。」

カ「えゝ、そうですよ。然し耳新しい事件がありますよ。宣戰が布告されたのをぞ存知ですか。」

ゲ「戦争ですつて、一體何處とです。」

カ「日本とです。吾が國の巡洋艦がもう二、三艘爆沈されました。ロシアは最う敗北ですね。」

ゲ「第二のクリミア戦争ですか。そして旅順港がセバストポールで、光は東方よりと云ふところですね。」

カ「まあ、そんなところでせう。」

ゲ「それで國內は何んなですか。愛國主義が有頂天になつてゐますか。玉座の指導者の周りに集まることを望んでゐますか。」

カ「えゝ、勿論さう云ふことも無いことはありません。けれ共皆非常に人爲的に煽動されたものですよ。戦争は不人氣です。誰も戦争に期待をかけず、又それを望んでゐるものもありません。」



不思議なことに、このペトロハフロフスク監獄の薄暗い監房の中ではこの事が突然明かにされた。無限の恐ろしさと、無限の苦しさ、無限の悲しきものが近づいたやうに感じられた。そして私は、この事件は國家にとつて、眠れる者を覺醒し、國民の大部分に對して専制々度の眞の本質を覆ふてゐた帷を引き裂いて燒き落とすところの霹靂の役割を演じるであらうと思つた。

以上手記にある對話によつて社會革命黨員よりも寧ろ一辯護士が紹介した當時の氣分が明らかとなる。彼は「戦争は不人氣です。誰も戦争に期待をかけず」と説明してゐる。又革命黨員は「専制々度を……引き裂いて燒き落とす」「無限に悲しいものが近づいたやうに感じられた」と言つてゐる。

又當時のロシア評論家の一人で、しかも頑固な君主々義者と呼ばれてゐたチチェリンの如きでさへも「戦争の結果はやがて國內の危機を救ふ助けとなるであらう。いかなる戦争の結果が吾々にとつて望ましいかと云ふことは一寸と言明しかねる。」と言つてゐる。彼は、こゝで君主々義とは全く別なことを言つてゐるのである。

次ぎにこの「敗北主義」的傾向は、當時のロシア文壇の上にも現はれた。特に自由主義的傾向を持つた作家の作品は、何等かの形で自國の敗北を謳歌してゐた。例へばロプシンの「青ざめた馬」などはその端的な表現と見ることが出来る。又一般に當時のロシア知識階級層の敗戦主義的傾向は、

ベシサエフの「日露戦争略記」に詳しく記述されてゐる。

當時の一般的國民の氣分は、かゝる險惡な「自國敗北主義」にひたつてゐたのである。この間にあつて、陰謀的な社會民主黨員が民衆煽動に或る種の成功を収めたことは勿論であらう。

(ト) 労働者の氣分

當時ガボンの御用労働組合には、凡そ八千餘りの労働者が加入してゐた。社會民主黨加入者は當時のペテルスブルグに約百名あつたが、この勢力は事件の全體として見れば舉數の範圍ではない。全體として一月九日事件を見ればこの指導部隊はガボンの労働組合であつた。社會民主黨の陰謀家群は一月九日より寧ろ十二月一揆に暗躍したのである。

事件以前モスコの労働者の中には、ボクロウスキーの記述するところによると、戦争の開始による物價の昂騰と、それによる労働者側の生活難更に著しい失業の増加であつたと云はれてゐる。事件直前におけるガボンの御用組合の集會に現はれたペテルスブルグ労働者の氣分をボクロウスキーの記述から引用して見やう。

「集會には、常に何だか神秘的な宗教的な感激のやうなものが支配してゐた。恐ろしく狹隘の中に互にひしめき合ひ乍ら、何千の民衆が何時間となく立ち續け、貧るやうに傷められた辯士労働



者の技巧の無い恐ろしく強い単純なそして熱のある演説を聞いてゐた。演説の内容は何時でも貧しくあらゆる調子で同じ句が繰返された。(我々はこれ以上我慢が出来ないのだ)(我々の堪忍袋の緒が切れた)(我々の苦しみは最う何を持つても量り切れない)(こんな生活なら一層死んだ方がましだ)(人間の皮を三皮はがさうたつて駄目だ)等々。しかしこれ等凡ての言葉は、恐ろしく感動的な熱誠をもつて叫ばれ、痛められた人間の魂のドン底から生れたので、この何百となく繰返される同じ言句が、眼に涙を呼び深く感動せしめ、そして極度に強められた労働者の悲嘆に出口を與へるために、何か實際に決行されねばならぬといふ強い信念を注入したのであつた。しかし、この「實際に決行」されねばならぬと云ふ内容は、一月九日のスローガンが示したやうに決して過激な内容を持つものではなかつた。労働者は、單に生活の餘裕を求めてゐたのである。當時のロシア労働者の生活は、ヨーロッパのそれに比較すれば勿論考慮の外であるが、政府は最う少し彼等の生活を考慮する必要があつたのではなかつたか。「労働者の生活はベテルスブルグに於てさへ極端に貧しかつた。労働者自身にとつて氣晴しは酒場で、彼等の家庭には何等の氣晴しがなかつた。」この生活から彼等のニヒリズムが生れたことは争はれぬ。ニヒリズムは又過激な陰謀の母である。しかし、彼等の墮落した精神を訂正するためには政府の一寸した政策で充分なのである。

「會議(ガボンのロシア労働者會議)が自分の會員のために一般的な音楽會を開いたとき、それは本當の啓示であつた。音楽會場は全一杯になつて警官が時々眞面目に、毀れなければよいが、と心配し出す程であつた。——どうですぬ私達の所は、まるで貴族のやうじやないか——と、音楽會のすんだ後で、労働者の細君達は誇らかに語り合つた。「労働者の要求の單純さが判る。しかるに專制政府は、労働者の生活に國民的な態容を持たせることは貴族の傳統的誇りに對して演神的な罪惡を犯すことゝ考へてゐた。」

## 八、一月九日事件所謂「血の日曜日」

所謂「血の日曜日」として知られるベテルスブルグ叛亂事件は、旅順陥落後、ガボンを先頭とした二十萬の民衆が、皇帝への請願書を持つて冬宮へ示威し、近衛軍隊の砲撃によつて無数の死者を出し潰走した事件である。この事件は、ガボンが當局と連絡を持つて、二月二十二日に遂行することであつたが、ブチロフスキー工場の三名の労働者の解雇を契機として豫定よりも早く決行することになつたものである。ガボンの豫定は「労働者を、常に警官や監督の所でなく、警視總監とも大官とも交渉をぬきにして、直ちに皇帝のところへ連れてゆく。」と云ふのであつた。實際當時の労働



者は、皇帝を除いた凡ての支配者は國民の敵であると考へてゐた。即ちツアアのみが國民の味方であつて「幸福は直接ニコライ二世から勝ち得ることが出来る」と信仰してゐたのである。この運動は、實際の内容は「ツアアへの請願運動」であつた。又その請願の内容も決して過激な内容を持つものではなかつた。即ち「最低プログラム」は三つからなつてゐた。(一)政治犯の全般的大赦(二)憲法を制定すべき「全國民地方行政會議」の召集(三)八時間労働日の制定、——がその内容で、これ以外にガボンの語るところによると、「ロシア國民の無學と無權利に對する對策」や「國民の貧窮に對する請願」が書かれてあつた。

一月九日——運命的な日曜日既に明けやらぬ以前に群集はガボンの旗幟を目ざして集合した。そして百人中の九十九人までは皇帝が彼等を助けるものと固く信じてゐた。いま筆者はこの日の概略を紹介するために當時の記録を摘擧する。「集まつた者は凡そ二十萬人と稱せられた。しかし参加者自身にとつては未だ不充分だと見えて「人が少い少い」と群集はわめいてゐた。最後に云ひ難い労働者の悲嘆を言葉に表現しようとする演説が聞えた。「諸君、諸君は何故に吾々が行くべきかを知つてゐるであらう。我等は眞理を得るために皇帝の所へ行くのだ。我々は生きることが不可能になつた。諸君はかのミミンがロシアを救ふために國民に訴へたのを知つてゐるか、しかし彼は

誰の手から救はうとしたか。ポーランド人からである。しかし、今や我々は、我々がその壓迫下に苦しんでゐる官吏の手からロシアを救はねばならぬのだ。我々から汗と血とを絞り取つてゐるのだ。我々は一つの部屋に十家族も住んでゐる。獨身者も同じことだ。俺の言つてゐることは正しいか」「さうだ！」「さうだ！」と四方から聲が聞えた。「所で諸君、我々は皇帝の所へ行くのだ。若し彼が我々の皇帝であるならば、若し彼が自分の國民を愛してゐるならば、彼は我々の言ふことを聽かねばならない。」しかしこの間に射撃の凡ての用意は出来てゐた。軍隊はその場に立つてゐた。當時のペテルスブルグの軍隊では安心が出来ないのでブスコフから歩兵を連れてきてゐた。有志の間では之を知つて愕いてミルスキー(大臣)ウイッテ(退職中の前大臣)へと駆けつけた。しかしその何れも「力」を借さなかつたし又借す事が出来なかつた。今や凡ては軍本部の手にあつて而もそれは何うしても「教訓を教へる意志」であつた。ところで労働者が最初の哨兵線と最初の射撃に出會つたのは未だ町の關門の所であつた。この衝突の一つでガボンは引倒され、彼の崇拜者によつて群集から連出されてそれ以外彼はその日舞臺に現はれなかつた。しかし示威運動の大部分は官殿廣場(今のウリツキイ廣場)にまで達することが出来た。空虚な官殿は、大砲を持った軍隊の綿密な垣によつて圍繞されてあたかも包圍にあつてゐるやう、あたかも故意におびき寄せざるやうに群集は集まる



にまかせられた。皆はこの時、關門の所の射撃は行違ひで、個々の長官の馬鹿げた悪戯だと安心して始めた。と廣場に喇叭の音が鳴り渡つて「砲聲は嵐のやうに」響いた。幾百といふ人が殺され傷けられた。——人間の密林であるから簡単に殺されていつた。恐怖の最初の數分の中に逃げ散じた労働者は憤激に甦つた。そして凡ての軍人警官大群の兇行に對する復讐を個々の手當り次第の軍人や警官に對して爆發させたのである。これは更に新しい發射を招き、そして又群集の憤怒の新らしい爆發を呼んだ。」そこで群集は遂にワシリエフスキー島で兵器庫を破壊して防壁を築いたが間もなく悉く鎮壓された。

さてこの事件は急速にロシアの各地方へ喧傳されていつた。この事件は、專制政府にとつては大なる失敗であつた。この事件を楔機として國民のツァーに對する信仰は破壊された。「昨日までツァーを信じ大臣だけが悪いのだと考へてゐた労働者が、今や自分の最も憎むべき敵は專制政府でありツァーであると云ふことを知つた。」と記されてゐる。而してこれは決して誇張ではない。

當時イギリスの通信員でロシア大學教授であり、且つ官廷の事情をよく知つてゐたドクトル・デイロンによると射撃事件の事情が明らかとなる。

「私は宮内官吏の一人に、何故今日は相當の形式を経ずして、素手の労働者や學生を殺すのであるかと訊ねた。彼は答へるに、何故と云つて平時の法律は廢止され、戰時法が行はれてゐるではないか。この事を誰も知つてゐないのが貴方を驚かすでせうが、我々のロシアではイギリスと物事が少し違ふのです。昨夜陛下は市民権を廢止して、社會秩序の維持をウラジミール大公に委任されました。公はフランス革命史に非常に明るいので無茶な寛大はせぬでせう。彼は憲法的陰謀から國民を引離す最も確實な方法は何百人と云ふ謀叛人をその朋友の前で絞殺することであると考へてゐる。今日大公は最高の權力を持たれて幾らでも望み次第のことが出來ます。大公は、國家の人としてその才能を即ちナポレオンの性質を現す絶好の機會が與へられてゐる。例へどんなことが起つても、彼は群集の叛逆的精神を鎮めるでせう。例へ彼がその配下にある軍人の凡てを人民に向つて送らなければならぬとも……」

皇帝は、一月九日の前夜「市民権の廢止」を行つたのである。これは勿論ガボンも知らなかつた事柄であらう。ウラジミール大公はフランス革命と逆な方法を使用したか、デイロンの記述によると、彼はこの事件に望むに、一種のドラマテカルな遊戯心を持つてゐたやうに思はれる。實際ネフスキーの記述によると、政府はこの示威運動を故意に許して群集の砲火による處理を計畫してゐた。政府は示威運動をガボンの報告によつて知つてゐたので、本來なれば、示威運動禁止の手段を採る



とか、又は豫防手段として檢束及び指導分子の逮捕を行ふべきであつた。なんとすれば當局はこの示威運動の組織者指導分子を悉くガボンの手紙によつて既に數日以前から知つてゐたのである。しかるに政府はこれ等の一切の豫防的手段を採らずに、故意にそれを許可して素手の群集へ砲火を用意してゐた。しかも陰謀の計畫的中心を突くことなしに、ツアーに多大の信仰を持つてゐた群集を射殺したことは、兎に角甚大なる不評をかつた。不評は社會民主黨の跋扈に機會を與へることゝなつた。

ロマノフ政府は、この事件によつて國民への讓歩を餘儀なくされ、同年十二月の一揆と、更にロマノフ家の終焉を將來した十月革命の素地を作つたのである。

### 九、千九百〇五年におけるボリセヴィキ及びメンセヴィ

#### キの陰謀計畫と醜争の展開

一方レーニンは、ロシア國內に「ボリセヴィキ事務局」を結成し、機關紙「フベリヨド」を發刊するに及んでメンセヴィキの攻撃を始めた。彼が後にその著「共產主義左翼小兒病」の中で書いてゐるやうに、當時のロシアの状況は千九百〇五年を前にして「偉大なる嵐が近づきつゝあるやうに」

感じられたのである。彼等は悉く革命の近づきつゝあることを論じ合ひ、討議し合ひ、しかもそれに対する陰謀のプランを秘かに樹立しつゝあつた。然し彼等は、早くも近い將來に與へられるであらう革命の指導權をめぐつて争鬭を展開した。「來るべき革命に我々こそ指導權を獲得しなければならぬ」この合言葉が、いまや彼等の全活動を規定するに至つた。レーニン一派は名稱の上では多數派(ボリセヴィキ)となつてゐたが、事實は黨内の小數反對派に過ぎなかつた。黨の中央委員會、黨中央機關紙「イスクラ」は全く依然としてメンセヴィキ派によつて占められてゐた。レーニン一派の焦慮は、——彼等の表現をかりれば——來るべき革命を前にして極點に達した。メンセヴィキが右の路を進めばボリセヴィキは左の路をとつた。メンセヴィキの方針に對しては、彼等は「一々誹謗攻撃する事を忘れなかつた。論争の領域では「臨時革命政府」の問題で熾烈化した。彼等は、あらかじめ革命を豫想して「臨時革命政府」(各派主として社會革命黨派によつて組織される革命政府)の新設さるべきことを信じたのである。この革命政府へ参加すべき否やの問題がそこで彼等の論争の中心點をなした。メンセヴィキは、臨時革命政府は、ブルジョア黨の組織するものであるとの理由でそれへの参加拒否を聲明した。しかるにレーニン等は、それへの参加をメンセヴィキとは反對に聲明する有様であつた。



かゝる経緯の中にあつて、一月九日事件が勃發した。彼等兩派は、既にこの事件以前にペテルスブルグの煽動を行つてゐた。しかし彼等の勢力は、この事件の範圍では到底ガボンの勢力を支配することは出来なかつた。否寧ろ彼等は内訌渦中にあつてこの事件には黨として組織的には参加しなかつたのである。

しかるに一月九日事件の直後、政府は、一般國民による極度の反政府運動の熾烈化によつて「シドロフスキー委員會」を設置するに至り、こゝに専制政府が始めての國民への讓歩をなすこととなつた。この委員會は、元老シドロフスキーを委員長として、ガボンの要求と同一の精神で「労働者の生活條件改善」を協議するために、労働者の代表をもつて構成せられると云ふ内容を持つたものであつた。又二月には、オーレル及びトウーラ地方に未曾有の農民叛亂が勃發してそれが次第に各地方へと傳播しつゝあつた。この状態の中にあつて、社會民主黨兩派の抗争者が、眞の革命は寧ろ、一月事件の後に到來すると信じたのは當然である。そこでレーニン等は四月五日にロンドンにおいて、レーニン派(ボリセヴィキ)のみの大會を開催して、これを「ロシア社會民主黨第三回大會」と自稱した。中央機關の承認を經ない、勝手に開催したレーニン派のみの大會である。勿論黨規によれば除名以上の罪惡を犯したことになる。メンセヴィキは、レーニンのこの行動に極度に憤激して

彼等も亦同様に、ゼネバにおいて社會民主黨第三回大會を開催するに至つた。

#### (イ)ボリセヴィキの陰謀プラン

ロンドンに開かれたボリセヴィキ大會は、今日のロシア共產黨精神の發足點をなしてゐる。この意味でこの大會の計畫は興味がある。所謂大會なるものは、第一に今日、コミンテルンの革命戰術の基礎をなしてゐる「總同盟罷業」の問題を決議してゐるが、この決議は當時ドイツのマルクス主義の尖鋭分子であつたカウツキーでさへも嘲笑したものである。第二に、武装蜂起の計畫を決議するに至つて、彼等は將來の過激な陰謀團としての様相を既に當時において示したのである。其他決議は、(三)農民を共產主義革命に利用する件、(四)合法政黨組織の件、(五)他の革命政黨との關係等を規定してゐる。彼等は、専制政府の讓歩と、一面農民の叛亂の中に近づきつゝある革命の武装蜂起を計畫してゐたのであらう。武装蜂起、所謂今日コミンテルンの採用してゐる暴力革命の思想はこの大會に胚胎したと言へる。メンセヴィキはこの極端な過激思想を排斥した。彼等に從へば、武装蜂起は最惡の陰謀事に屬したのである。かくて、カウツキーが、レーニンのボリセヴィキを評して「マルクス主義の邪道」であると指摘したのは故なきではない。

#### (ロ)ブルイギン國會の開設

第二章 内訌渦中におけるレーニン獨裁の成立過程



政府は、シドロフスキー委員会の設置によつて、第一次の譲歩を示したが、この譲歩は反つて農民の叛亂を助成し革命的陰謀團體の暗躍を速進した。そこで六月には、有名な「戦艦ポテムキン叛亂事件」が勃發した。この事件によつて専制政府は最早や確固たる處断を失ふに至つた。政府は又も國民への譲歩を敢行して「ブルイギン國會」を開くこととなつた。これはツァーがブイルギンに仕事の準備と適當なる選挙法の作成を委嘱して作つたもので事實ツァーへの協議機關であつた。政府としても應急の策として、これ以上の改革を断行することは不可能であつた。この國會が又社會民主黨一派の煽動と、彼等の内訌の材料となつたことは例に漏れない。以前にシドロフスキー委員會をポイコットしてそれへの参加を拒否したメンセヴィキは、今度は國會への参加を宣傳した。ところでポリセヴィキは、今度は又メンセヴィキの逆を主張しなければならなかつた。レーニン等は案の通り國會のポイコットを宣傳した。ポイコットのみならず「國會を大衆動員によつて破壊せよ」と叫ぶに至つた。兩者は同じ黨内にあつて常に對立の兩極を歩んでゐた。彼等は、相互に排斥し合はねばならなかつた。現在の官製ロシア共產黨史が、無定見のレーニンの態度を、合理化することに汗を流してゐるのは寧ろ客觀的に憐れな事態である。當時のロシアの民衆は、——現在でも大差はないが——一面において左程に無知であつたのである。

### (ハ)所謂「十月革命」

千九百〇五年十月に入るに及んで、ロシアには未曾有の全國的ストライキが勃發した。地方的な群小組合は、全露「組合の同盟」を組織して次から次へと罷業の濤を傳播していつた。彼等は、口々に、労働者の代表を選出し得るやうな憲法の制定と國會の開設を叫んだ。陰謀的分子が再び據頭して跳梁跋扈し始めた。政府は遂に十月十七日の「専制政府の譲歩」と呼ばれる憲法の制定を宣言するに至つた。これはロマノフ政府の最後の大譲歩であつた。しかしこの譲歩にも拘らず陰謀分子の策動は停止することがなかつた。特にメンセヴィキは、労働者農民層を煽動して世界最初の「サヴェート」なる二重政權を樹立した。サヴェートは、所謂一國の政權をポイコットして叛亂分子が組織する一種の革命政權である。トロツキーが全露サヴェートの議長として納つたのはこの時である。所謂「サヴェート」は十月革命の際に、彼等が最も利用した革命的二重政權組織の戦術である。メンセヴィキは労働者を煽動し、サヴェート政權なるものを組織せしめ、何れも該組織指導部を獨占し、又代議員を彼等の派閥によつて獨占した。殆んどメンセヴィキによつて革命の指導權を奪はれたレーニン等は、このサヴェートに對してメンセヴィキの指導精神を攻撃し、且つ自派の宗派主義的イデオロギイを彼等に強要する手段に出た。しかるに労働者は、レーニンの主張とは關係の



ない自己の主張によつて行動してゐた。ボリセヴィキ一派は、労働者の中から次第に排撃されていつた。さて狼狽した彼等は「社会民主主義的綱領を公然と承認することをサヴェートに要求する」とは中止した」のである。共産黨は労働者の利益要求を集中的に表現すると説く彼等の歴史において、しばしばボリセヴィキ的派閥主義が労働者の利益を蹂躪することを見るのである。

#### (二)陰謀團の敗北(十二月暴動)

前記の騒擾は十二月に入るに及んで最高點に達した。策謀家の策動は激化し、あらゆる煽動は亂れ飛んで労働者は眞實に革命の事を信じさせられた。煽動にのつた労働者は武器をさへ手にしやうとした。この状態に突け入つたのが、不評をかつたレーニン等のボリセヴィキである。メンセヴィキは、武器を手にすることだけは以前から許すべからざる陰謀として排撃してゐた。レーニン等は、凡ゆる民衆に武装蜂起を無責任な言葉で注入した。レーニン等は政權の掠奪を秘かに夢見てゐたのだ——利用される者は労働者である——總て十二月九日、ボリセヴィキは三人のロボツトを押し立て、モスクワに武装蜂起を遂行した。軍隊との戦争が十二日間廿一日迄繼續した。煽動された労働者は、遂に悲惨な敗北を餘儀なくされて結果は幾多の死者を見るだけであつた。此暴動は直後メンセヴィキのブレハーフをして「武器を執るべきではなかつたのだ」と叫ばしめてゐる。労働者は

次第に冷靜となり、彼等の煽動から醒めるに従つて先づ自からを批判し始めた。無責任極まるボリセヴィキは次第に労働者の領域から排撃されてきた。しかるに彼等は、ブレハーフの「武器をとるべきではなかつた」云々を攻撃し、パリイ・コンミンの歴史的實例を引用することによつて自己の無責任を合理化せんと試みたのである。相手を誹謗し攻撃することによつて、自からを正當化さんとする戦術は、今も昔しもボリセヴィキにとつて變りはないやうである。

兎に角、目覚めた労働者の中に次第に彼等の野心が觀取されたことは事實である。そこで彼等の孤立化時代が、この時機以來始まつた。ロシア官製共産黨史は、この時代を「反動時代」と稱してゐる。彼等はこの事件によつて、當面政權獲得の野心を放棄しなければならなかつた。そこで、メンセヴィキとボリセヴィキの合同が行はれたのである。

### 十、陰謀團の孤立化と内訌による戦線の分離

#### (イ)メンセヴィキとボリセヴィキの合同

千九百〇五年事件は、ロシアの國家的政治組織の上にも一連の變化を齎らした。専制政府は、憲法を制定し、國會を開設し國民衆の利益をそこに表現せしめて國民立法の制度を採用するに至つた。



資本家層はガデット黨(立憲民主黨)を組織して代表をそこに送り、農民層は「黒百人組」等の政黨を結成して、これ又代議員をして國會に送ることが出来た。ロシアの社會には一沫の清明さが深ふやうになつた。

しかるに社會民主黨の狀勢はどうか？ 彼等にも或る種の合法性が與へられた。彼等兩派には、合法的な日刊新聞さへも許容された。即ち「ノーツアヤ・ジーズニ」と「ナチャーロ」がそれである。前者はポリセヴィキの機關紙で後者はメンセヴィキの機關紙である。彼等は少數のロボットの代議士をさへ國會に送るやうになつた。彼等は宣傳の自由を與へられたのである。

しかるに彼等の實際の組織的勢力は如何。千九百〇五年事件は、反つて彼等の分野から労働者層を離反していつた。労働者層の進歩的部分は、社會民主黨一味の悪煽動から次第に目醒めつゝあつた。陰謀團の組織的勢力は微弱化したのである。時に彼等の陣營の兩派には失敗に對する争論が火花を散らしてゐた。責任は何れにあるか。兩者は相互に責任の砲彈を投げ合つてゐた。メンセヴィキ一派は、ポリセヴィキを攻撃して曰く「ポリセヴィキの煽動にのつた労働者は、徒らに過激な方向に走り貫徹し難い要求に餘りに熱中しポリセヴィキの道を辿つて自からその首を折つた。」と即ち「貫徹し難い要求を」突き出して、徒らに事態を悪化させ「自から首を折」らしめたのはポリセヴィキである」と云ふ。しかるに何故に彼等が、暴亂のための暴亂を企てるのであるかの點に關しては、流石に一言も觸れてゐない。

一方ポリセヴィキは、全然別個な見地から失敗の責任を所謂合理化してゐる。失敗の原因はと彼等は言ふ。第一が國際狀勢が不利であつたこと、第二は農民に階級意識がなかつたこと、第三はブルジョアジイが裏切つたことである云々と。そこで彼等は、「メンセヴィキは失敗分析の仕方が間違つてゐる」と逆撃してきた。痛い尻尾の傷は一寸踏まれても吠へねばならぬ。プレハーノフの「武器をとるべきではなかつた」が當時、否今日も尙いかにポリセヴィキ攻撃の的となつてゐることか。

微弱化した敗者には自づから結合の原理が働いた。相互に攻撃、誹謗、罵倒、中傷の限りを盡したメンセヴィキとポリセヴィキが、あたかも一夜にして合同した。この合同には、他面次のやうな理由も伏在してゐた。即ち當時の労働者は社會民主黨一味の悪煽動には飽き果てゝゐた。労働者はこの點ばかりでなく他の重大な一點に氣がついた。つまり社會民主黨が自稱するやうに彼等が労働者の味方であるとするれば、何故に彼等は統一しないのであるか。しかるに彼等は何れも同じ様な事を繰り返して醜争してゐる。彼等には一體どんな目的があるのだと。大勢は所謂「ポリセヴィキの



意思なき結婚」を餘儀なくさせたのだ。千九百〇六年四月、彼等は内訌で傷ついた面をさらしてストツクホルムで合同したのである。

この合同大會において、レーニン等に與へられた運命は、全代議員によるボリセヴィキ排斥の聲であつた。彼等は一切の邪惡な罪の免罪をこねばならなかつた。決議は凡てメンセヴィキによつて提出され、メンセヴィキ派に轉じた多数によつて決議された。

(ロ)レーニンも黨規に違反して内訌を捲き起す

ロンドン大會後、レーニン等は少く共若干の期間免罪の謹慎をしなければならぬ筈であつた。又日頃彼が主張してゐたやうに、大會における決議は、個人的意見を放棄して絶対に服従する義務があるもので、この原則は「ボリセヴィキの原則」としてロシア共產黨幹部が今尙一種の誇りにしてゐるものである。しかるにレーニンの實踐は、原則は單なる自派の主觀的原則に過ぎないことを實證してゐる。大會直後レーニンは突如として身を翻した。不満を爆發させて背反した。彼は間もなく黨内部に自派の中央委員會を組織して黨中央委員會に對置させた。流石にジイツイエフもこの點を承認せざるを得なかつた。曰く「ボリセヴィキは黨の規約に叛いた中央委員會を組織した。吾黨の歴史においてこの時期は、中央委員會においてもベトログラード委員會においても少数であり」

と。彼等の哲學では少數派なれば黨規違反も特殊權利となるやうである。このレーニンの暴舉に對して、メンセヴィキは勿論斷乎たる處斷をも要求したが、當時彼等は、所謂サヴェート權力と稱する武器を持つてゐなかつたのである。

さて、黨の書記局には、當時メンセヴィキとボリセヴィキとの兩派から各々一人づゝの書記が任命されてゐた。ところが、レーニンは、自派の書記を黨内スパイとして利用した結果こゝに又兩者の醜争は激化していつた。黨大會は、千九百〇五年後に展開さるべきロシアの狀態を「革命の退潮期」として規定し、今後ロシアには議會主義的政治が樹立されるから、社會民主黨はこの狀態に順應して戰術を樹てねばならぬと決議してゐる。レーニン等は、しかるにこの戰術を早速罵倒し始めた。「革命の退潮期ではない。今日は革命の前夜だ。吾々は武装蜂起を準備せよ。」これが、焦慮によつて生れたレーニンの猪突主義であつた。

又同年フィンランドにおいて社會民主黨は「都市會議」なるものを開催したが、この會議は、兩者の醜聞掘み合ひに終つてゐる。

(ハ)ユダヤ人組合「ブンド」再び社會民主黨と合同

當時政府によつて召集された第一回國會は、ツァーと國會との衝突によつて解散された。千九百



○七年四月から五月に亘つて社会民主党は、ロンドンにおいて第五回大会を開催した。この大会で注目する事件は以前レーニンの暴挙によつて脱退したユダヤ組合「ブンド」が、彼等の側に復歸したことである。この時以來ユダヤ人は、社会民主党内に再び勢力を作ることゝなつた。

ユダヤ人が復歸したのは二つの理由があつた。一つは、當時この種の陰謀團の一般的敗北による合同で、革命の指導権の問題が、彼等の當面の目標から離れていつたことである。これはメンセヴィキとポリセヴィキとの合同理由と同じである。第二には、當時二三年前から事實において社会民主党とユダヤ人との共同闘争が行はれてゐたことで、社会民主党内には既に多くのユダヤ人が指導権を握つてゐたのである。ユダヤ人は、彼等の祝福の中に復歸していつた。

しかし又この大会も同様に兩派の醜争に終始した。この兩派共棲黨は、國會参加の可否、他の諸黨に對する黨の態度等々の争論を通じて、第四回大会と同様ポリセヴィキ一派の敗北によつて終つた。中央委員會、黨機關は依然としてメンセヴィキの手中にあつた。レーニンはこの大会で自派の部分的な勝利を豫想したのである。しかるに結果は、當時彼が言つたやうに「ポリセヴィキの不安定な地位」を安定せしめることが出来なかつたと、同時にレーニンの執拗な内訌も解消されなかつた。

#### (ニ)社会民主党の陰謀と非合法への潜入及び彼等の陣營の再分裂

ロンドン大会の直後、國會にあつた社会民主党議會フラクションは、國家顛覆議會破壊の陰謀が暴露して悉く逮捕された。ために第二國會は解散されたかくてストリピンは凡ゆる陰謀的革命團に強硬政策を採用し遂に彼等の合法的存在を剝奪するに至つた。

そこで社会民主党の陣營は一大混亂に見舞はれた。彼等の悉くは誰も失望のどん底に陥つた。特にポリセヴィキは、彼等が主としてインテリゲンチヤのみの組織であると云ふ點で、非合法へ潜入するにもその條件が與へられてゐなかつた。レーニン派はメンセヴィキに比較すれば、殆んど労働者の信頼を持つてゐなかつたのだ。當時彼等の哲學は、僅かに政治策動のみであつて、「労働組合のことはメンセヴィキに委せておけ」と云ふ程度であつた。しかるにレーニンは自派を導ひて地下運動へ潜入していつた。彼等の陣營は、そこで當然又分裂したのである。一方は地下運動反對派であり他方はレーニンの地下運動移行派である。反對派は、ラリンを筆頭として分裂した。ラリンは當時ペトログラードに「ヴオズロシユデーニエ」(復活)なる機關紙を創刊してレーニンの無知な企圖を嘲笑した。マルトフ、ダン、ポトレソフ、レヴィツキー等が明確な反レーニン派として立ち現はれた。彼等は、レーニンの小企業を稱して曰く「何處の都市でも嘴の黄色い青年共のサークルを二



グリス位作ることには諱のないことだ。だがそんなことに何れだけの意義があるか。眞面目な人間なら地下室などへは遁入つてゆかねだらう。又、社会民主黨の中央委員会も同様に分裂した分裂派ミハイル、ロマン、ユリの三名は中央委員会の解體を宣明して脱退し直ちに聲明書を發表した。この聲明書の一部には次のごとく主張されてゐる。「吾々は中央委員会の成員ではあるが、かゝる稚戯を企てる程無知ではない。吾々は諸君の中央委員会（レーニン等の——筆者）には出席すまい。あらゆる非合法的組織は解體されねばならぬ。それは既に破産してゐるが故に。今やヨーロッパにおけるが如き社会民主黨を樹立すべき時である。」レーニン等は、事實陰謀團として地下に取り残された形となつた。彼等の組織は分散し、潰滅し、僅かに不定期の新聞を刊行して宣傳策動を遂行する程度に過ぎなかつた。

又注目すべき現象は、メンセヴィキの中にも合法派非合法派の分裂が生じて、内訌争闘の將軍ブレハーノフが地下運動へ遁入つて、レーニンと實際上の和解をしたことである。レーニンは、この時だけ初めてブレハーノフを神のごとく讃歌した。彼の「敗北の中にあつて眞の同志は見出される」は恐らくブレハーノフを指したものであらう。へしかるにブレハーノフは今日のロシアでは口にするだけで除名の種になつてゐる。

さて當時のレーニン一派の状態は、混乱分裂の幾重奏であつた。彼等は全く單なる陰謀團として孤立化した。ポリセヴィキの有力なる地盤の一つであつた中央ロシア委員会の如きも、レーニンの小黨分離主義に反對して分裂した。又「ウリチマキズム」なる反對派が生じた。これはレーニンを日和見主義者として排撃したもので、彼等はロシアのポリセヴィキが困難な渦中にあるとき、レーニンが一人ロンドンの客舎に納まつて勝手なことを言つてゐるのは怪しからぬと云ふのである。全くレーニンは、終始一貫ロンドンの安全地帯にあつて、國內の自派を牛耳つてゐたのであるからこゝろした反對派が生じるのは無理なきことである。

この反對派の首領はボグダーノフであつて、彼は「ラボーチャ・プラウダ」(労働者の眞理)を機關紙として大いにレーニン攻撃を始めた。

又ルナチャルスキー、ゴリキー等もレーニンに対する強固な反對派となつた。ゴリキーなどは自派の青年分子を連れてカプリ島に引上げ、そこで労働學校を開設すると云ふ始末であつた。彼等の陣營は見る影もなき敗殘のドン底に落ちていつた。

## 十一、「ポリセヴィキ」と「メンセヴィキ」の最後の分裂



第五回大會において、一應合同することの出来たメンセヴィキとボリセヴィキは、その後の非法時代に入るに及んで戦線は再び混乱し分裂した。かくてこの分裂対立の中において、千九百〇八年パリにおいてロシア社会民主黨の中央委員会總會なるものが開かれた。

この總會には、常例の通り兩派更に合法派も加へての三派が出席した。總會の目的は、再び對立派の感情を沈めて合同することであつた。和解の一と役はブレハーノフが買つて出て多數決で又も合同と云ふことになつた。しかるにレーニン派はこの合同には反對したのである。と云ふのはレーニン等が一人立ちの自信を持つに至つたからである。組織の分散状態は、同時に分裂派そのものも亦決して多數派ではなかつた。しかし分裂派に比較すればレーニン派は多數派であつたこと、次に重要な點は、彼の全歴史を通じて闘つた敵「メンセヴィキ」にも同様に内部的分裂が起り、その中央委員会は殆んど潰滅の状態となつて彼等の勢力が甚だ微弱化したことである。

レーニンは、メンセヴィキの勢力が絶對多數であり、且つ彼等が労働者間に眞の勢力を持つてゐた時代には、寧ろ革命師(老人組)の寛容さを利用して飽くまで黨内にあつて宗派的反對派の活動を行つた。彼の目的は、労働者間における老人組の影響を剝奪してそこに自派の勢力を植えつけることであつた。しかるに老人組としてのメンセヴィキの分裂は、レーニンの目的を自然と達せしめるやうになつてきた。特にメンセヴィキの巨頭ブレハーノフが自派の援助者として従來の同志と分離した事は勢力の均衡を自派に傾けしめる結果となつたのである。状態は以上のごとく變化した。そこでレーニンは、パリ會議で合同を約し乍ら、その明日「ボリセヴィキの独自の行動」完全なる分離」を宣言するに至つた。

この時から、レーニンは黨内の一反對派から離れて、始めて自派の青年によつて守られた政黨の首領となつた。(しかし憐れなのは老ブレハーノフで彼は間もなくレーニンによつてボイコットされ遂に革命の際には宗派を變更して永久に裏切者の汚名を残してゐる。)

しかるにパリ會議の後、レナ地方にしばらくぶりのストライキが勃發した。このストライキは再びロシアの労働者を赤く染めていつた。早くも「ボリセヴィキ」一味は、再び千九百〇五年の到來を叫び出した。彼等は合法的に機關紙「ズヴェズダ」を發刊して、過激思想の傳播に魔手を伸ばしていつた。

#### (イ) プラウグ全露ボリセヴィキ會議とレーニンのクーデター

千九百十二年一月、レーニンは自己の派閥を引率してプラウグに全露ボリセヴィキ會議を開催した。この會議に参加した代議員は二十五名であつた。ブレハーノフは、レーニンの召集状を受取つ



たまたで既に出席はしなかつた。この會議は露骨なレーニン派の示威運動であつて、レーニンはこの會議の席上で、メンセヴィキ及びその他の反対派を慘酷なる程罵倒し「黨は吾々だ。吾々はポリセヴィキの旗を高く掲げる。吾々と共に有らざるものは吾々の敵である。吾々は清算主義（メンセヴィキと合法主義者を意味する——筆者）に對する戦を拒むあらゆるものに對して容赦なき闘争をなすであらう。」と言つた。これがレーニンの態度である。彼は大きくなるや否や、大きなことを喋り出したのである。且つ彼はこの會議において不純分子除名の名の下に自派内における反レーニンの傾向を持つ者を強制的に黨から放逐した。この無慈悲さはレーニンの發明したポリセヴィキの原則である。

當時亡命者の大部分は勿論レーニンに極度の反感を持つてゐた。彼等はレーニンの暴舉に切齒憤慨したと云はれてゐる。又一方メンセヴィキは國內にあつて、あらゆる攻撃をこの會議に集中し「黨の掠奪者だ」と呼んだ。レーニンは實に然りである。彼は天才的な分裂主義者であつたのである。

#### (ロ)レーニンの峻烈なる黨の統制ぶり

社會民主黨内にあつて、常に黨規の謀叛者であり、派閥主義の創始者であり、且つ絶えざる内訌の策動師であつたレーニンは、自派の統制には如何なる態度を執つてゐたか。

#### (一)民主主義的中央集權主義

これは幹部の絶對專制主義で、中央委員會の指令は、各下部機關及び黨員全體が絶對服従しなければならぬものである。レーニンによると、幹部は、民主主義的選舉方法によつて選出されるものでそれは黨員全體の意思を代表してゐる。従つて中央委員會は、黨員全體の總意を表現するものであるから、その權力は絶對であると云ふのである。こゝで幹部の專制主義は常に實行されたが、民主主義的選舉方法は——今日のロシアにおいてさへもそれは曾て一度も斷じて實行された事が無い。實は過去の事實が示す様にレーニン自身が、この原則の最も代表的な攪亂者であつたのだ。

#### (二)多數決への絶對服従

大會或は中央委員會の多數による決議は、小數派は異論を捨て、絶對に服従しなければならぬと云ふ原則である。レーニンは、これを「マルクス主義者の自己批判的美徳」として謳歌してゐる。この點は、前者と同様に今日コミンテルンで採用してゐる原則である。しかし又同様にこの原則の最も偉大なる且つ最初の破壊者はレーニン自身であつたのだ。

#### (三)二黨組織の禁止

レーニンは、自己の派閥に「黨内黨をつくる」の謀叛的行動を絶對に禁止してゐる。禁制を犯す



者には除名がある。トロツキー等の反対派は彼が党内黨を作るの行動に出でたとき初めて放逐された。この點も今日のコミンテルンの原則である。だが又同様にこれを犯した最大の者はレーニン自身であつた。

(四) 一切の黨規の嚴守

黨規の嚴守は又レーニンの自派統制の原則である。彼は共產主義運動は、一般國家において普通非合法若くは半非合法である。それ故に、黨規の嚴守は、非合法團體の生命であると主張してゐる。これを犯す者は、共產黨員として最高の嚴罰に處せられる。

この點も今日コミンテルンの原則で、同時に又その模範的なる破棄者もレーニン自身である。

(五) ブラック・リスト制

これはレーニンが自分の腹心の者(例へばジノヴィエフのとき)を黨内のスパイとして、反対派の狀勢を偵察せしめる方法で、更に自派黨員の一切の行動、個人的私行まで偵察せしめるものである。弱點は一切ブラック・リストにと云ふことになる。弱點を持たぬ黨員は不幸にして勢なかつたと見えて、彼等は悉くレーニンの首かせに縛られてゐたのである。

レーニンは、その著『左翼小兒病』において、ボリセヴィキの理論は、メンセヴィキとの不斷の闘争において形成されたと云ふ意味のことを主張してゐる。レーニンの峻嚴なる統制原則も、やはり内訌において學んだやうである。彼は彼自身が犯した罪禍を、黨員處断の武器として對置させたのである。社會民主黨内におけるレーニンの内訌的謀叛は、彼が謀叛毎につけ足した理窟を謳歌するボリセヴィキ以外には、恐らく如何なる人も承認し得まい。メンセヴィキは邪道であり、ボリセヴィキは正道である。ボリセヴィキの内訌は破邪顯正なりとは、甚だボリセヴィキ的過ぎる理窟である。

トロツキーが當時、レーニンの指導方法を指摘して次のごとく断じてゐるのは面白い。

「レーニン派はインテリゲンチヤの小块であつて、指揮されれば如何なる方法手段にも恥じない連中である。レーニンは灰色の手段でロシアのプロレタリア運動を握つてゐる。それはプロレタリアの無智と時代遅れがボリセヴィキを信用してゐるためである。問題はロシアのプロレタリアをこの一派と首領レーニンの束縛から解放せしめることである。」

トロツキーの指摘した「ロシア・プロレタリアの無智と時代遅れ」は、間もなく十月革命に現れたのである。



## 十二、ボリセヴィキの反戦策動と十月革命及び権力の奪取

社会民主黨における派閥を獨立黨化したレーニンは、過激な方針によつて自己の策動を開始した。千九百十三年四月ボリセヴィキは、正式の機關紙として「ブラウダ」(眞理)をペテルスブルグに發刊した。彼等は今度は、異なつた基礎の上に——黨内の二派としてではなく、既に分裂した別個の革命團として——メンセヴィキと抗争しながらしきりと大衆赤化の魔手を伸ばした。レーニンは當時ロンドンから國境ガリシアに進出して、自派全策動の指揮官となつた。千九百十四年に入るに及んでロシアには又全國的なストライキが勃發した。個々の地方では武装叛亂さへも勃發した。勞働者は何時の間にか、千九百〇五年の經驗を忘れてボリセヴィキの悪煽動にのつてゐた。特に當時尙勞働者間に基礎を持つてゐたメンセヴィキが、政府と妥協する傾向を示したので、彼等の活躍には絶好の條件が與へられた。彼等はメンセヴィキの地盤を次から次へと自派の手に納めていつた。ボリセヴィキの横行濫歩が始まつた。

かゝる時機に歐洲大戰が勃發したのである。

ボリセヴィキの陰謀は、彼等のロボットであつた國會議員ベトロフスキーの逮捕によつて暴露さ

れた。彼はレーニンの自筆による指令をポケットに入れてゐたのである。又彼の逮捕と共に現はれた日記帳によつて、彼等の對議會戰術が暴露された。(政府は以前と變らず革命運動に關しては無智であつた)この日記は、裁判所其他の場所で公然と讀み上げられた。

彼等は、公然と或は非公然と戦争を内亂への宣傳を續け、國民大衆の間に兇暴な武装蜂起の思想を傳播していつた。加ふるに千九百十四年のストライキの著しい勃發は、彼等の策動に拍車を加へて、メンセヴィキでさへも「ブラウダ」の病毒の蔓延を警告するに至つた。

戦争勃發と同時に、政府はこれ等陰謀團の断乎たる撲滅を期さねばならなかつた。

政府はボリセヴィキの策動を禁止し、彼等の指導分子の逮捕を行つたが、ボリセヴィキの跋扈を根絶することが出来なかつた。彼等の機關紙「ブラウダ」は依然として合法的發行所をペテルスブルグに持つてゐた。政府は、これに對して断乎たる處刑をもつてせず、徒らに發賣禁止、押收、罰金等の生ぬるい政策を行つてゐた。加ふるに専制政府の傳統的官僚主義は、又々、この種の運動取締りに對する無能を暴露した。政府はボリセヴィキを徹底的に取締ると稱し乍ら、一方には「戦時産業委員會」などを組織して、メンセヴィキをして合法的に加入せしめ急に勞働者のご氣嫌取りを始めた。



一時的に退却したボリセヴィキは、あたかも政府の取締りを忘れたかのやうに再び擡頭してきた。千九百十五年三月には、ベルンにおいてボリセヴィキは「評議會」なるものを開催し、そこで戦争に對する一切の陰謀プランを樹てゐる。彼等は、國內の取締りが嚴重になれば、國外から策動の手をさし伸べてゐた。彼等は國外にあつて秘かに準備を調へ虎視眈々として機會の到來を狙つてゐた。

#### (イ) チンメルヴァルト會議

千九百十五年七月には、レーニンの「自國政府の敗北について」なるボリセヴィキの怪文書がロシアに現はれて騒ぎを起した。同年九月に、チンメルヴァルトに第二インターナショナルの會議があつて、レーニン等はこの時ロシアの少數派として出席した。この會議に出席したのは、勿論ヨーロッパの社會主義者のみであつたが、レーニン等は、その兇暴な計畫を主張したことによつて各國代表を驚かせた。各國代表は戦争には反對であつた、しかし自國政府の敗北運動にはレーニンとは一致しなかつた。凡ての者は寧ろレーニンを嘲笑した。レヂブールの言葉は、同じマルクス主義の系列にあつてレーニンの主張が如何に異端的であるかを證明してゐる。即ち「外國に居て亡命者として内亂を宣傳することは容易なことであらう。だがまあ一度ロシアへ歸つて君の後へ誰がついて

來るかを考へて見よう。」と言つてゐる。彼等の見解は戦争中は「階級闘争を停止すべきである」と云ふのであつた。レーニン等は争論したゞけでこの會議を脱退した。

こゝにマルクス主義體系内の最過激な陰謀主義コミンテルンの萌芽が見られるのである。

#### (ロ) 二月革命事件

千九百十六年一月には、ペテルスブルグに参加者十萬の大ストライキがあつた。十七年一月には今度は著しい政治的色彩を持つたストライキがペテルスブルグに勃發し、それがモンクワ、バクトに傳播して混沌たる状態を呈した。ストライキは悪化し、叛亂は諸々に惹起して終に二月二十三日、ペテルスブルグの革命勃發となつた。

(千九百十七年の二月から十月に亘る所謂「ロシア革命」については既に幾多の著書が刊行されてゐる。故にこゝでは、ロシア革命の歴史的記述が主要問題ではないので、その詳述はさげることとする。たゞ當時濶闊的なレーニン派が、權力を奪取するに至つた過程と、その根據とを説明するに止める。)

二月革命は、先づ第一にツァーの退位を齎らし、次ぎに革命的臨時政府の組織となつた。所謂臨時政府は、カデツト、右翼社會革命黨、十月黨の三派聯合政府で、レーニンのボリセヴィキはこれ



に参加しなかつたのである。

四月二十四日—二十九日に、臨時政府支持派と、非支持派との示威がペテルスブルグにおいて衝突した事件が勃發した。この事件が表示するやうに當時のロシアには二つの國民的傾向があつた。そして臨時政府支持の潮流は相當に大きかつたのである。

ボリセヴィキは勿論臨時政府の反對側に立つて策動してゐた。彼等は、千九百〇五年に利用した戰術、二重政權としての「サヴェート」を組織した。この「サヴェート」において注意すべき現象は、千九百〇五年のそれは、労働者の一部分を農民とインテリゲンチヤがその構成部分に過ぎなかつたが、今度はそれに新たな層「兵士」が参加したことである。この點にロシア革命の決定的點があつた。ボリセヴィキはこの兵士の赤化と組織煽動に専心策動した。彼等の權力争取秘密はこゝにあつたのである。さてボリセヴィキ一派は、如何にして「兵士」を引き入れることが出来たか。

二月革命の直後においては、彼等の勢力は決して最下部の政治組織においてさへも多數黨ではなかつた。否寧ろ單なる少數黨がその現實の事實であつた。いま市會における彼等の勢力を當時の資料からとつて見る。

黨別

議員數

社會革命黨	五四
立憲民主黨(ガヂツト)	四七
メンセヴィキ	四〇
ボリセヴィキ	三七
勞農黨	一一
人民社會黨	六
エディンストヴオー國	五
急進民主黨	無
共和民主黨	無
商工聯合	無
無所屬	無

以上

しかるにコルニコフ將軍の救援軍の敗北後彼等ボリセヴィキの勢力は二倍化した。これには次の二つの理由が伏在してゐた。

第二章 内訌渦中におけるレーニン調教の成立過程



第一は、臨時政府の戦争継続である。戦争問題では、既に千九百〇五年の経験が示したやうに、ロシア國民には特異な民族性が潜在してゐた。國家的意識の稀薄さは、寧ろロシア民族において卓越してゐた。これは一面において専制政府の國民教育上における失敗と、その缺點を過激陰謀團に利用せられた處が大いにある。トロツキーが指摘してゐるやうに、レーニンは、ロシア労働者の「無知」を利用することが出来たのである。

ヨーロッパ戦争は、何人も知るやうにドイツの侵略主義に對する正當なる防衛と云ふ標語で行はれた。平和主義者は、所謂「戦争を終焉せしめる戦争」を宣傳して、從來の戦争反對の旗を急に下して戦争を支持した。ロシア政府も以上の標語の下にヨーロッパ戦争に参加した。ロシア國民の當時の戦争気分は、決して日露戦争の場合のごとく最初から敗戦的気分があつた譯ではなかつた。しかし戦争の進行が緩漫となり、豫定の勝利が失敗し、戦争が長びくに從つて兵士の敗北主義的気分が勃發した。潜在的な非國民意識が表面に現はれた。戦線には最初軍隊の消極的サボタージュが起つた。將官に對する個々の不満が現れて次第に歸還の要求が一般的傾向となつてきた。「戦争を止めよ、そして倦倦を村へかへせ。」この気分が一般に現はれてゐた。此時あたかも國內に二月革命が勃發したのだ。彼等は當然臨時革命政府は戦争を休止するものであると考へた。と云ふのは臨時政府

の参加各黨が、帝制打倒の戦術として戦争反對と休戦を主張してゐたからである。

しかるに彼等は政權奪取後は戦争を休止しなかつた。即ち臨時革命政府は戦争を継続したのである。

これによつて戦線兵士の混乱が生じた。消極的反抗としてのサボタージュが激しく流行した。この國內における混乱と、戦線兵士の反戦気分とを利用して暗躍し始めたのがボリセヴィキである。簡単に説明すれば、彼等は戦線の兵士に次のごとく説いた。「臨時政府は戦争を止めない。吾々が政權を取れば直ちに戦争を止める。吾々の政權獲得運動を支持せよ。そこで諸君は、單にサボタージュすることを止めて武装を以つてその指揮官に臨時政府に戦ひを敢行せしめよ！」ボリセヴィキの戦線における暗躍策動は激しくなつた。彼等は敵國兵士との「交歓」を説き、一面これまで無言の中に機を狙つて潜入せしめてゐたボリセヴィキ兵士を暗躍せしめて「勞農兵士委員會」を組織せしめた。

彼等の赤化網が戦線に擴がるに及んで状況は變化した。これまでの兵士の意識は、單に消極的に自己の任務をサボタージュするだけに止まつてゐたが、兇惡な病毒の傳播と同時に彼等の意識は「武器を手にする叛逆」となつた。彼等は武器を前方の敵に向けるのではなく後方の指揮官に向けるこ



とを煽動された。

戦線には何時しか「勞農兵士委員會」が結成せられて、所謂一種の革命的自治組織を作るに至つた。戦線の分裂が生じ兵卒の指揮官に對する叛亂が勃發した。彼等の一部は、四分五裂の獨自行動をとつて國內に歸還した。この行動の上には、勿論ポリセツイキの陰謀が一貫してゐる。レーニン一派のポリセツイキは叛亂兵士を利用して七月には、ペテルスブルグに臨時政府反對の武装示威運動を行つた。

ポリセツイキの策動は、完全に権力奪取に利用し得る軍隊を握つたのである。

第二の條件は、ロシア社會民主黨のメンセツイキが臨時政府と妥協したことである。二月革命直後においてもメンセツイキの勢力は確かに國內において優勢であつた。しかるにメンセツイキが臨時政府を支持したことは、その政策、特に戦争の繼續を支持した結果となつた。戦争の繼續は當時のロシアの状況において正當の政策となつてゐたが、それはロシアなるが故に不當の政策となつたのである。この結果メンセツイキは急激に勢力を失墜していつた。二分されてゐた社會民主黨の地盤が、次第にポリセツイキの手に奪取されていつた。臨時政府支持の一點によつてポリセツイキの傳統的敵手としてのメンセツイキは遂に十月革命によつて永久に姿を没し去つたのである。

其他二月革命による國內の混亂、臨時政府の躊躇逡巡と不徹底なる政策の繼續は、少数派閥ポリセツイキをして、ロシア顛覆の大陰謀を達成せしめる有力な條件となつた。

かくて十月革命直前のペテルスブルグ市會議員數を見ると

社會革命黨	七五
ポリセツイキ	六七
立憲民主黨	四二
メンセツイキ	八
勞農黨	二
人民社會黨	二
エディンストヴォー團	二
急進民主黨	一
共和民主黨	一
商工聯合	一
無所属	一



以上

となつた。ポリセツイキは、二月革命直後の三十七名から六十七名の増加を示したに反して、メンセツイキは以前の四十名から、僅か八名の数字となつた。ペテルスブルグ全地区の全投票数を見る

社会革命黨	一八二、二〇三
ポリセツイキ	一七四、四九二
立憲民主黨	一一〇、九二八

となつてゐる。しかしポリセツイキは決して第一黨ではない。臨時政府側の社会革命黨と立憲民主黨との結合した勢力に比較すれば、到底権力の把持者としての資格を持つものではない。しかるにポリセツイキ一派には軍隊があつた。

十月革命直前の「サヴェート」の構成を「サラトフ・サヴェート」について見ると

労働者	兵士	
ポリセツイキ	一六四	一五六
メンセツイキ	七二	四

社会革命黨

四三

四三

無所屬

三四

となつてゐる。サヴェート内における軍隊のメンバーは二月革命直後には、(サラトフ)で社会革命黨二百六十名、メンセツイキ九十名、ポリセツイキは僅かに五十名に過ぎなかつた。メンセツイキの没落と同時に、その成員がポリセツイキによつて奪取された。又社会革命黨の軍隊間における勢力の激減は、當時における兵士の気分と、ポリセツイキ一派の策動の巧妙さを證明してゐる。さて革命は一種の混乱した熱病である。凡ての人間は常規を脱して行動してゐた。群首はポリセツイキの手に握られた。

ポリセツイキが軍隊獲得に奏功したことは、既に指摘した通り、かの暴力革命遂行の第一要件となつた。暴力は政治的正義を脱してゐる。ポリセツイキの政治的機關における地位は、反政府黨としての少数派であつた。正當の輿論の中では、流石がにロシアにおいても彼等は少数派であつたのである。政治的正義の見地からは彼等の権力奪取は到底不可能であつた。しかるに暴力においては彼等は多数派——しかも極悪煽動の病毒の傳播による——多数派であつた。この點からしてロシア革命の性質が導き出される。



## (ハ)十月革命事件とボリセヴィキのクーデター及びレーニンの権力把握

既にボリセヴィキ一派は、七月から八月にかけて、第六回大會の名の下に大會を開催し秘かに臨時政府打倒暴力革命實行の陰謀を決議した。レーニンは既に二月革命の許容した合法性によつてロシアに歸國してゐたが、このボリセヴィキの陰謀が暴露せられるとレーニシに對する國民の反感が極度に高まつた。この大會の直後、彼は追跡せられてフィンランドに逃走した。しかるにレーニンの悪運強きか、十月革命の直接動因となつた一事件が國內に勃發した。所謂農民暴動がロシアの全土に勃發して臨時政府はその取締りに狼狽した。レーニンが「危機は熱せり」なる檄文を草して全露の一味に武装蜂起を指令したのはこの時である。レーニンのこの指令に對して、當時のボリセヴィキ中央委員會は、過疑逡巡したと云ふよりも寧ろ反對の立場を採つた。しかるにレーニンは、やはり彼一流の辛辣振りを發揮して、秘かに腹心の部下を急行せしめ新たなる革命中央委員會を強制編成したのである。一ダースのレーニン腹心中央委員會——この中に見出された一人が今日レーニンの後繼獨裁官としてのスターリンである。

十月二十五日(新曆十一月七日)ボリセヴィキ一味は武装蜂起を決行した。冬宮にあつた臨時革命政府大臣はケレンスキー以下、悉くボリセヴィキの威嚇に包圍された。「権力を渡せ、然らずんば砲撃するぞ。」これが臨時政府閣僚に突きつけたボリセヴィキの威嚇であつた。臨時政府閣僚はボリセヴィキによつて與へられた僅かの時間内に態度を決定しなければならなかつた。彼等は、正式に通告して「権力の譲渡」を餘儀なくされた。閣僚の全部は冬宮を出たが彼等一部分はボリセヴィキの暴漢によつて撲殺された。トロツキーの指令下にあつた叛亂赤軍は、冬宮に亂入して手當り次第の掠奪を行つた。(官製ロシア共產黨史は後にこの掠奪行爲を制止したと書いてゐる)

冬宮は無数の暴漢によつて占領せられた。権力はボリセヴィキによつて奪取されたのである。この火藥の臭のなかつた革命事件を、今日のボリセヴィキは「紳士的」方法として一種の誇りとしてゐる。ボリセヴィキの紳士の誇りとは、後方に大砲を擁した威嚇であり、紳士の権力の譲渡を實行した閣僚の撲殺に外ならぬのだ。

レーニンはかくして権力を獲得したのである。

大戰後のヨーロッパ諸國の疲弊と動搖は、このレーニンの陰謀を傍觀するの餘儀なきに至つた。宗派主義者レーニンは、彼にふさはしい共產黨獨裁権力を樹立した。獨裁権力は、レーニンのクーデターを實現して、凡ゆる反對派凡ゆる反レーニン主義分子の射殺を斷行したのである。このクーデターは、スターリンの形態においても、レーニンの獨裁権力が存続せしめられたと同様に今日尙



依然として行はれてゐる。

### 十三、レーニン獨裁權力下の内訌事件

(主として共産主義の現實相について)

レーニンの獨裁權力樹立の過程は、以上において大體説明することが出来た。今日サヴェート及び世界の赤色分子によつて神化されてゐるレーニンは、早くしてアレキサンダー暗殺事件に死刑となつた兄を持ち、ブレハーノフの思想に感銘してロシア社會民主主義労働黨に参加した。内訌又内訌を続け、醜争又醜争を繰返し、これ等の過程の中に一宗派主義者として徹底した派閥を形成し、多くの先輩及び彼の恩師たるブレハーノフすらも裏切つて、遂に專制政治を樹立して自己の野心を實現することに成功した。

かくて獨裁權力樹立と共に現はれたのは、前述したやうに各國からの對露出兵と不斷の内亂の勃發、生産機關の破壊による未曾有の大饑饉であつた。今や獨裁權力は全國民の壓迫機關として君臨してゐる。革命直後の内亂と其後の内訌事件の連続は何を意味してゐるか。彼等が必要に迫られてと稱する「獨裁強力政治」によつて問題は簡単に導き出される。

要點は、宣傳による共産主義と、現實に見た共産主義社會との矛盾對立である。紙片と煽動演説とを通じて見た共産主義社會は、現實のボリセヴィキ的共産主義社會とは何等の共通點をも發見することが出来なかつた。共産主義社會は人民の經濟的保證を實現したか。所謂眞の意味の人民的自由を實現したか。人間による人間の支配を撤廢することが出来たか。平等は、擄取は、武器からの人間の解放は、凡ては瞭然たる事實の前に百の「否」をもつて答へねばなるまい。

人民はボリセヴィキの「利用」から解放され、靜かにそれを考へることが出来ると同時にボリセヴィキに反抗しなければならぬ。如何なる層が最も利用され、如何なる層が先づ目醒めていつたか。

第一は、農民層であり、第二は中小市民層であり、第三には部分的に労働者層である。共産主義の理論は、革命理論の指導要素として——實際はインテリゲンチヤイ又はレーニン等の如き職業的革命家であつても——労働者層を指してゐる。而して誇稱して曰く「労働階級の解放は結局凡ての人民の解放となる」と。この問題に對する矛盾は、既に千九百〇五年事件直後トロツキイとレーニンの猛烈な論争として現はれてゐる。「ナチャイロ紙」(トロツキイ)は當時主張した。ロシアには共産主義によつて少しも利益を獲得しない農民層がある。しかも農業がロシアの大部分の經濟的基礎とさへなつてゐる。農民は、ブルジョア民主主義的要求は持つてゐても共産主義的要求は持つて



かない。何となれば、共産主義は農民の経済的生活を破壊するから。そこでロシアにおける共産主義革命は、世界共産主義革命が行はれるか、それ共ロシア革命直後に世界共産主義革命が行はれない限り到底政権の維持は困難である云々と。この困難は革命後實現した。

レーニン等は當時「労働者と農民との矛盾は兩者の密接なる提携によつて労働者の解放は究極において農民の解放となると云ふ思想を宣傳することによつて解決する」と主張してゐる。兩者の主張を公平に見ると、後者の意見には單なる宣傳的意味以外のものは含まれてはない。トロツキーはこゝで眞理の一面を語つてゐる。

ポリセツイキの宣傳を信じ、人民の「無知」の寛容さが「利用」を與へたポリセツイキ革命は、次のとき内容を持つたのである。つまり兵士及び特に農民は提携の名によつて「利用」の武器となつた。そして彼等は「利用」の意味を解釋することの出來た瞬間には、獨裁権力の反對派とならざるを得なかつた。蓋し由之觀之、レーニン獨裁下に於けるトロツキーの受難は不可避の宿命である。

しかしトロツキーが十月革命の功勞者としてサヴェートの幹部席に登場する頃は、現實の甚だしき困難に直面し、レーニンをして反對者トロツキーの意見を親切なる警告として採用せしめたのである。先づ新經濟政策の採用による農民及び中小階級への讓歩がそれであつた。

さてレーニン獨裁政権確立直後の内訌事件を見やう。

#### 十四、労働者反對派結成とその内訌

労働者反對派結成は、共産主義獨裁政権の樹立が、労働者層自身の利益は何等實現し得なかつたことの實證である。偽瞞されたる労働者層は革命によつて「自己の権力」を夢想した。しかるに権力は、職業的革命家レーニン派閥インテリゲンチヤの勝手な獨裁となつた迄である。労働者反對派の結成は、非労働者の派閥獨裁政府への最初の労働者の反抗であつたのだ。革命の直後、内亂の整理が一步進むや否や千九百十九年既にこの運動が勃發した。この反對派の結成は、メドウエデフとシリヤブニコフの二人の指導者によつて成された。(共に労働者である)この黨派の理論的方面を受持つてゐたコロンタイは、當時獨裁権力の性質と其反對派たる自黨の役割を次のごとく言つてゐる。「労働者反對派」とは階級的に結束し、階級意識に目醒め、階級的に卓越した我國産業プロレタリアートの部分である。「労働者反對派」は、プロレタリアートの先導部隊で、しかも組合に組織された労働大衆と有機的に結び合つた尙サヴェート官邊に溶解されない部隊である。」

この引用の中にも繰り返されてゐるやうに、彼等の「階級的」と云ふ言葉は自己を誇る表現であ



る。この「階級的」な卓越した労働者の部分」が「サヴェート官達に溶解されぬ部隊」たることを明示してゐる。この反対派は、獨裁者の派閥に抗争して、サヴェートの組織の変更を要求するに至つたのである。

しかし事物は純粹な形で現はれないことが多い。この反対派で注意すべき點は、それが單に當時の戦時共產主義制に對する労働者の強力な反抗を代表するばかりではなく、實に農民層の重大な反抗を表現してゐた點である。

(戦時共產制の暴政は、自稱労働者政府が労働者壓迫の典型を示したものである。當時労働者の職業はロシア全國に亘り、遂にベテルスブルグ、モスクワに傳播し、クローンスタットには有名な叛亂が勃發した。労働者は新たな専制政府に對して唯一の反抗手段としてストライキを執つたのである。)

千九百二十年前後に於ける農民層の反抗は全ロシア的なものとなつた。權力を持つた共產黨の強盜的行爲は農民の生活を極度に脅した。農業生産物の暴力的徵發、強制服役、及び牛馬其他の家畜類の強奪即ち一切の農村生活を遺憾なく荒し掃つた。これに對する農民層の不平不満は言ふまでもない。しかし彼等の叛亂は、鐵歴の急所を知つてゐる共產黨政權によつて間もなく撲滅されたので

あつた。だがこの農民の反抗の意志は「労働者派」の中に伏在し且つ代表されるに至つた。この運動が、直接大都會よりも農村に接近した地方都市から發展したことは比間の事情を證明してゐる。

#### (4) 労働者反対派のサヴェート國家批判

労働者反対派によつて描き出された當時の「サヴェート・國家」を紹介して見よう。

「毎日の實際生活において、労働者の利益は、小ブルジョアに(レーニン派を指す)侵されてゐる。労働階級と農民の對立は、サヴェート政府の政策をまるで右と左に引き離し、サヴェート政府の階級政策の鮮明さを崩して必然に兩者の衝突は脱がれない有様となつた。資本の從順な被傭人奉仕者(レーニン派獨裁を指す——筆者)で多額の俸給を受けてゐる資本主義生産の高級管理者たる社會の群は、我政治の中に時々刻々偉大なる勢力と意義を持ちつゝある。」

國民の大多數が饑餓のドン底に呻吟してゐるとき、何と云ふことか。サヴェート國家機關の中には、レーニン派の私黨が「多額の俸給」で人民の管理者として納まつてゐた。コロンタイの書いた「労働者反対派について」は更にレーニンを次のごとく批評してゐる。

「君が選んだ三社會團體を同一待遇にすると云ふ政策は如何にも聰明な政策であるが、その政策は古いお馴染みのご都合主義日和見主義の臭味がしてゐる。」



と。三社會團體の中には、労働者層と農民層がある。この兩者の對立的階層に對する一律の共產主義制度の適用は、その矛盾解決の方策を失つたレーニンの日和見主義、七都合主義として斷じたのである。

この労働者反對派が、サヴェート獨裁權力の改變を叫んで立つたのは當然である。凡ての反對派がさうであるやうに、彼等もやはり黨内における官僚主義、言論の抑壓、幹部秘密協議制に對して闘争してゐる。彼等のスローガンは、そこで「黨内批判の自由」「黨會上における發言の自由。討論自由の保證」を要求してゐる。こゝに、レーニンの「民主主義」の實際が暴露される。又ボリセヴィキの中央委員會、サヴェートの中央委員會は、既に政治的良心を喪失した魔性と化してゐた。労働者の要求に曰く

「特別の秘密に亘らぬ限り、黨の幹部會議には何人を問はず黨員なれば列席し得るの自由。評論、意見提唱の自由の保障。並に討論の自由のみならず、意見發表のためにする黨内の思潮の著作出版の費用の補助等を要求するものである。」

#### (ロ) 労働者反對派の活動

労働者反對派についてレーニンは秘かに洩らしてゐる。「労働者反對派は實際眞面目な黨員によつ

て結成されてゐる」と。労働者反對派には、當時非常に多數の共產黨員が参加した。又地方農民も部分的に参加した。バクーのサヴェートを中心として彼等の活動は熾烈化し、レーニンの秘密が暴露せられ、中央委員會及び黨機關紙の虚構、製造が彼々とあかるみに出された。この運動と一般國民の共產黨獨裁政治への不平不満が結合した。コロンタイが指摘してゐるやうに此時實際共產黨は「分裂の危機」に遭遇したのである。

反對派運動の激化に狼狽したレーニン派幹部は、千九百二十一年三月黨十回大會を開催して急遽これへの對策に鳩首協議した。そこでレーニンの幹部派は、この思想を「無政府主義」のレッテルで清掃を決議した。だが他面レーニン自身(決議第二條)をして「この分子は特に我がロシアには甚だ多い。而してこの傾向は、殊に凶作、戦争による破壊即ち數百萬の軍隊が解體されて労働者農民の社會へと投げ出された時生活手段と仕事をもち得ない窮境に際して發生するのである。」と書かして居る。實に彼自身「労働者反對派」發生の必然性と共產主義の矛盾を暴露したものである。しかるにこれに對してレーニンは如何なる態度をとつたか。

一面における強壓政策と他面における讓歩政策であつた。強壓政策は、シリヤブニコフの除名となつた。(サヴェート國家においては黨よりの除名は國外放逐と同様な待遇を意味する)しかるにレ



レーニンの提案にも拘らず、中央委員会は一票の相違で除名案は通過しなかつたのである。又譲歩政策の採用は、彼等が分裂の危機に餘儀なくされた結果であつて労働者反対派メンバーを黨機關に採用したレーニン派獨占の變革であつた。しかしこの決議は單なる決議に止まつて實行せられなかつたが此辛き經驗に徴しレーニン派は間もなく、「幹部選舉の民主主義を實行することは黨を潰滅するものである」と叫び出した。労働者反対派の活動は、第十回大會後反つて激化していつた。反対派側は、「レーニンを首領とする中央委員會」の内部を暴露しその解體を要求した。シリヤブニコフの指摘によると「レーニンの提出した決議案程籠絡的で事實を曲解せるものはない」。それは「二十年の黨生活において未だ曾つて見ざるもの」である。又「提議された決議は明らかに籠絡的な許し難き性質のもので我黨労働者を我黨の小ブルジョア並に官僚的分子で中毒せしめるもの」であつたのである。又メドウエデフの云ふところによれば

「レーニンを首領とする中央委員會は黨を改善する何等の手段方法をも講じなかつた。——中央委員會は労働デモクラシイ原則を實際的に黨内に實行する手段を採らず、且つその擁護もしなかつた。彼等はサヴェート機關を蠶食する官僚主義撲滅のために有効なる手段を講じなかつた。又中央委員會は中央並に地方サヴェート機關に労働者出身者を以て活動させなかつた。中央委員會自

身の中でさへ無力である。」

右の如きものである。續いてメドウエデフのバクー労働者に送つた手紙が各地方反対派の機關紙に轉載されるに及んで事態は愈々激化した。幹部派即ち中央委員會は、レーニンの個人的秘書であつたジノヴァエフの手によつて、前記手紙の反駁文を發表する筈であつたがこの返禮は遂に姿を現はさなかつた。しかし代償として幹部派は直接これを鎮壓することゝなつた。

#### (ハ) 労働者反対派の強制鎮壓

幹部派と労働者反対派との内訌中、第十回大會は、レーニンの所謂「新經濟政策」のプランを通過せしめてゐる。この反共産主義的政策は、——幹部派の國家的宣傳によつて——内訌事件を大部緩和してきた。レーニンは、反対派を排撃し乍ら他面においては反対派の政策を實行し始めた。レーニンは今度は反対派の断乎たる鎮壓策を考究しコミンテルンの力を「利用」して反対派の勢力を削ぎ、かくして中央委員會に首領シリヤブニコフの除名を提起し遂に彼を黨籍から追ふ事に成功した。その理由は、其後スターリンが踏襲してゐる反対派鎮壓聲明の典型を示したものである。

レーニン曰く

「中央委員會は委員の何人たるを問はず、中央委員會の政策を破壊する事を許す譯にはゆかぬ。」



(シリヤブニコフは中央委員の一人であつた。)

中央委員會曰く

「委員シリヤブニコフ及メドウエデフは一派の者から反黨の意味ある手紙を接受しながら、しかもそれは全然個人的なものではなく、全く反黨的氣分のある「労働者反對派」一派に関するものであつたに拘らず、これを審議するために該手紙を中央委員會に提起しなかつた。」

「メドウエデフとシリヤブニコフによつて「労働者反對派」の特別集會が開かれ、該集會には既に黨の譴責除名處分を受けてゐるミヤスニコフをも列席させた。而してこの集會は全然模範なき調査、不確實な報告に基き黨に對する告訴狀を作成した。」

「該手紙を中央委員會に提起しなかつた」こと、無斷で集會を開催し除名者をそこに列席させ「黨に對する告訴狀を作成した」こと、この理由以外更にレーニンの所謂「黨の破壊者」となつたのでシリヤブニコフは除名されたのである。この除名直前の中央委員會は彼に對して次のごとく規定を與へてゐる。

「中央委員としてのシリヤブニコフは再三黨を無視せるにより、中央委員會議會は次の諸斷を反復して聲明する。即ち將來シリヤブニコフが中央委員會以外の場所で、演説、聲明、評論による中

中央委員會の政策並に黨大會の決議を攻撃することは許すべからずとして、シリヤブニコフの中央委員としての事務に携る可なりや否やの問題を提起するものである。」

と。しかるにシリヤブニコフは、黨の政策を攻撃し、中央委員會以外の場所で演説聲明論評したばかりでなく、反政府的ストライキを鎮壓する赤軍の暴行に對しても攻撃した。彼は遂に「中央委員として事務に携はる可なりや否やとの問題を提起」された譯である。

除名の理由は、外的行動の形式で充たされてゐる。その思想的内容は問題ではない。中央委員會の政策に反對する一切の者は「黨を破壊するものであり黨を敵の手に賣り渡す帝國主義の手先きである」と云ふ事になるのである。これが反對派除名鎮壓の常套的手段である。

若し中央委員會の意見が間違つてゐた場合は、例へ反對派結成は少數であつても正當な手段であるとは、レーニンの言明ならず彼の實踐であつた。しかるにレーニンは、一度權力を獲得すると同時に、即ち赤軍とゲー・ペー・ウーを持つと同時に見事に一變した。會てのストライキの有名なる煽動家は、今やストライキの勇敢なる武裝的彈壓者となつた。

シリヤブニコフの除名事件に關連して注意すべき點は、彼と同時に數百名の共產黨員が除名されたと云ふ事實よりも、その除名の方が舊メンゼヴィキ黨員に向けられたと云ふ點である。一例を



とつて見ると、舊メンセヴィキの活動的幹部であつたミーチンのごときもそれである。この事件に参加した行動があつたので、「過去十六年に亘りメンセヴィキとして活動し千九百二十年共産黨に入黨、分派の創立者の一人にしてドン地方における黨務機關で黨の分解行動に出てゐるミーチンを悪意ある破壊者として黨より除名す。」と云ふ託宣で除名された。その他この事件に参加した舊メンセヴィキ黨員は悉く除名された。レーニンの獨裁戰術は恠した點にも明確に窺はれる。

### 十五、『民主々義的中央集權派』の擡頭と反レーニン運動

前記の『労働者反對派』の發生と同様に、『民主々義的中央集權派』は、革命直後の千九百二十一年に發生した。當時の反對派の基礎は前述したやうにこれを客觀的に見ると、共産主義の現實に對する反抗若くは背反である。『労働者反對派』は、獨裁權力と大衆の反抗の間において、寧ろ共産黨幹部の一部に現はれた調停的性質を持つてゐる。この意味からすれば『民主々義中央集權派』も多分にさう云つた色彩を持つてゐるのである。しかし、現實に樹立された共産主義國家の本質的矛盾を表現する意味においては、反對派内訌は同一の水準に立つてゐる。内訌は反對派と幹部派との醜争——恐ろしく共産主義的理論争闘の外皮をとつた——として勃發するが、決して共産主義社會の矛盾を

觀察するための妨げとはならぬ。『民主々義的中央集權派』は、發生の根據がやはり前者のそれを類似してゐる。この反對派は、名稱自身が示す通り、共産黨の民主々義的中央集權制の實施を要求して起つたものである。『民主々義的中央集權主義』は、既にレーニンが過去の内訌争闘で採つた唯一のスローガンであり、且つ彼自身の發案になる主張であつた。しかるにレーニン自身の足下から、レーニン自身の主張を持つて彼の打倒運動が勃發したのである。陰謀團から獨裁的權力の把持者へのレーニンの轉換は、運命的な皮肉をそれに附け加つた。

レーニンは實際に民主々義的中央集權主義を行つたことは未だ會つてない。労働者農民自身の權力として宣傳された共産黨權力は、支配機關レーニン派閥による獨占と上から下までの幹部の絶對的任命制に外ならなかつた。民主々義派が、この現状を楔機として、民主々義的幹部選舉の實施を要求して起つたのは當然なことである。

#### (イ) 民主々義的中央集權派によるサヴェート國家現状の批判

千九百二十一年一月二十一日に發表された『民主々義的中央集權主義派』の民主々義實施案による

と  
(一) 戦時共産制から今日までの期間サヴェートの黨務機關及び特に上部機關は徹底的に官僚主



義化してゐる。

(二) 党内は分散状態に陥り言論は抑壓せられて「討論の自由」は況試合に變化した。黨幹部は党内労働者デモクラシーを完全に廢止してゐる。

(三) 労働者共和國の一般經濟状態の疲弊と相俟つて都市と農村との矛盾を深化し農民大衆はサヴェート政權に對して極度の不滿を持つに至つてゐる。更に労働者の一部分にも反共產主義的氣分が高まつてきた。

これはプロレタリアート先進部隊の層にも影響を及して党内に「マハラ」思想の増進サンチカリズム思想の發展共產主義否定の試み更に地方本位的傾向の成長種々の思想的病毒が發生してゐる。

(四) 黨生活の總體的水準の低下黨員大衆の反黨的氣分の發展。

(五) 従つて大衆の共同精神並に全露中央執行委員會人民評議委員會等指導機關には何等の協力一致精神もなくなつた。事實上凡ての事務方針は幹部連の形式的な官制を押すこととなつてゐる。

(六) 狹隘無類の官僚主義お役所心理の瀰漫それは上部機關にゆけばゆく程甚だしい。

(七) 明白な野心家によつて中央官廳は占領されてゐる。

(八) 平黨員の不滿は連續的にいたる所に勃發し自覺する黨員さへも獨裁權力に反抗するに至り日に日に反黨的行動が高まつてゆく。

(九) 中央指導部は官僚主義的中央集權化の絶えず増長せる政策を採つてゐる。黨並にサヴェート機關が成熟したにも拘はらずこの傾向は少しも衰退しない。

否返つて第九回大會(千九百二十年三月)において「軍國主義化並に統一化」の旗幟の下に増進された。

(十) 黨最高幹部層の腐敗。

(十一) 黨中央委員會の欺瞞的大衆籠絡政策。千九百九十年十月共產黨全露會議は「黨並にサヴェート中央機關の官僚化」に對してそれを訂正する政策を採用した。會議は例會制度によつて全露中央執行委員會と地方との連絡を決議し同様の制度で縣の黨務委員會を設定することを決議した。

しかるにこれ等の決議はその後唯の一つも實施されず又實施しようともされなかつた。

唯だ千九百二十年九月に党内反黨運動が全国的に勃發した際彼等は狼狽してサヴェートの成員を變更したゞけである。又同會議の決議は全露共產黨會議に黨務のため全體の黨員を誘致すること



中央幹部と地方大衆との連絡關係の増進特權の縮少等を決議したが、この決議は大部分その片鱗さへも實施されなかつたのである。

大衆の眞實の言葉は、遺憾なく當時のサヴェート國家の實際的部面を白日下に暴露してゐる。

(ロ) 反對派の要求と鎮壓

反對派の要求は、以上の缺陷に對して、國民的要求を實施することであつた。官僚主義の廢止、任命式レーニン派閥獨裁の反對、これの改革手段としての眞に大衆の中から、即ち下からの民主主義的選舉による幹部の選出であつた。更に彼等の要求を紹介すると

- (一) 共產黨に労働者大衆を加入せしめること。
  - (二) 黨内討論の自由。
  - (三) 國民生活における經濟的安定。
  - (四) 官僚主義幹部任命制の廢止と労働者デモクラシーの絶對的確立。
- である。レーニンの主張する「プロレタリア黨としての共產黨」の中には、労働者を入黨せしめよの聲が叫ばれる。官僚主義幹部任命制反對、討論の自由獲得の爲闘つたレーニンの權力樹立後には、官僚主義、幹部任命制反對の叫びが彼の足下から起つてゐる。そして「討論の自由」が執拗に要求せられてゐる。

しかしレーニンは、一切の反對派は黨を破壊すると云ふ原則を持つてゐる。レーニンは自己の原則には忠實である。反對派は權力の強壓によつて鎮壓せられた。労働者反對派と同様に大衆の極度の反抗を表現した「民主主義的中央集權派」も、レーニンの鐵鎚下に又同様な運命を辿らざるを得なかつた。

(當時レーニンの獨裁下には、左翼共產主義者の反レーニン運動、——千九百十七年—十八年—労働者團體——千九百二十二年—三年——労働者眞正派の同様な獨裁恐怖政治への反抗闘争が捲き起つた。しかしこれ等の反對派内訌事件は、その發生の根據と要求するところは前二者と同様である。各々單に部分的特殊性を持つたものに過ぎない程度なので、こゝでは省略する。)



### 第三章 内訌渦中におけるスターリン獨裁の形成過程

#### 一、スターリン時代の内訌の性質と『レーニン遺書』に現はれた分裂の豫言

廣汎な大衆の共産主義権力への反抗と絶えざる内訌の反覆によつて、レーニンは遂に共産主義制の旗を下さざるを得なくなつた。千九百二十一年の全露共産黨第十回大會において、彼は遂に新經濟政策を採用するに至つた。レーニンはこの政策の結果を見ることなくして、即ちこの政策によつて脱生された新たな矛盾を解決することなくして、千九百二十四年一月二十一日に歿した。

既に第一章において指摘したやうに、スターリン時代の内訌は、共産主義獨裁権力維持に關する深い疑惑からくる分裂であつた。新經濟政策の採用は、彼等の自稱する『労働者農民の獨裁権力』としての共産黨獨裁政治の性質を正しく反對の物へ轉化させてゐた。労働者層の反抗は新經濟政策の實施によつて何等鎮壓されなかつた。しかし新經濟政策は、農民層の破局的な窮狀を一部分的に緩和し、又中小國民層の經濟的活動の制限を緩和したことによつて、サツエート國家自身の危機を一

時的に切り抜けたことは確かである。

新經濟政策の實施は次のことを意味してゐる。即ち共産主義國家の資本主義的經濟秩序への逆轉と、これによつて共産主義制度實現の不可能、更に大衆の著しい反共産主義的傾向である。大衆は所謂共産主義よりも資本主義を望んだのである。國民大衆はこの政策の採用によつて部分的な經濟活動の自由を獲得しその中に若干の生活内容を高めることが出來た。又部分的には、共産主義國家内に資本家と稱する階層が發展した。この共産主義の資本主義への逆轉は一部幹部層における訂正運動となつた。逆轉されたものゝ逆轉——新經濟政策を今度は再び共産主義制へ逆轉する運動が生じてきた。この運動が、未曾有の内訌事件を捲き起したトロツキー派の反幹部運動である。

トロツキー一派の反スターリン即ち反幹部運動は千九百二十七年に最高潮に達したが、これの發生的契機は、以上の本質的矛盾の外に若干の事實を指摘しなければならぬ。

先づ第一に新經濟政策の限度である。この政策は國民生活の中に經濟活動の自由を與へたことによつて、サツエート國家及び國民の危機を部分的に解決したことは事實であるが、他の傳統的な共產黨精神、官僚主義、幹部の任命制、個人的任命取引きによつて爲された幹部の絶對專制々、依然たる民主主義的選舉制の放棄等々の問題を解決することは出來なかつた。加ふるにスターリン時代